

ベルリオーズの『幻想交響曲』がワルツの曲を奏でていた。スポットライトが二人のカップルを追っていた。ナチュラルターンの切り返しがうまく決まり、そして、ライズ&ローアのステップが、次のステップへと、二人の舞いを美しく誘（いざ）なった。

矢萩英輔と羽村愛香は学生時代から、アマチュアダンス競技会で名を知られたカップルだった。その華麗なステップは多くのダンスファンを魅了してきた。学生ダンス選手権ではチャンピオンになったこともあり、これからの活躍も大いに期待されていた。

レッスン会場には近く開催される地方予選・本選への出場権をかけて、何組かのカップルも顔を出しレッスンに励んでいた。そのせいか、会場には熱気が溢れていた。

その中でも、優雅に舞う愛香のボディ・ムーブメントの華やかさが、一際、目についた。ターコイズブルーのAラインのモダンドレスを着た愛香がステップを踏むと風を含んだように、ドレスの裾野が広がった。胸のあたりに散りばめられた小さなダイヤモンドがきらきらと光り、美しさに華を添えた。

小顔の造りに、前下がりボブのベリーショートの髪型がよく似合った。その髪は艶やかな茶褐色で、とても、きれいだった。目の見張りと、すつと通った鼻筋、小さな唇のかたちも素敵だった。それに、笑った時、右の頬に浮かぶ片エクボもとても可愛いくて、英輔は愛香の笑顔も好きだった。

白い肌の愛香には気品もあり、すべての美しさが、この舞台のために用意された最高の装いのように英輔には思っていた。

円舞会での主役の役を与えられたトップダンサーそのもの、愛香はフロアを滑りながら、ワルツの曲に乗り、身も心も浮揚（フロウト）を続けた。華麗な舞い姿だった。

凛々しい顔立ちの英輔に、正装のダンスコスチュームはよく似合った。ブラックストライブのエンビ服に、白のイカムネシャツ、サスペンダー、そのステップの確かさからリーダーの英輔の技の高さも見てとれた。

「スロー・フォックストロット、クイックストロット、そう、ライズ、ライズ継続、ローアで終わり、クローズだ」

支え足がクローズした瞬間、英輔の背が立ち、英輔がトーンを張った。すべての筋肉を緊張させ、相手を支える動作のことをトーンという。その分、女性は包み込まれるように、ソフトにステップが踏めるのだった。

静と動、二人の意気の合った間合いが、ワルツの曲に、さらなる美しさを添えた。

ドレスの水色の裾野がふわっと翻った。ワルツの舞いの、振り子のような上下運動が、スロ―とクイックの高まりの波の中で、優美な舞いをそこに生み出していた。高い芸術点が期待できそうなステップの運びだった。

小さな拍手が沸いた。

両サイドに観客席もあるスポーツ会館なので、応援をする者の姿も多く見られた。

ダンスシーンをホームビデオに収めている者もいた。みんな関係者のようだった。

その時、ちらと、愛香が観客席に視線を送った。はっとして目を見張った。一瞬だったが、愛香のステップが乱れた。

その男は愛香が顔を見知っている者だった。ステップの流れの中で、くるりと愛香が背を向けた時、愛香が目にしたその男はそくさと席を立った。ずっと、愛香のダンスシーンをこの男は撮影していたようだった。

そのように、愛香には思えた…。

大きく、英輔が輪を描くように、次のステップを踏み出したので、英輔はこの状況には何も気がついていないようだった。

が、愛香は我れを忘れ、自分のフットアクションを誤った。うまく、流れに乗れなかった。英輔のサポーティングフットにも乱れが生じた。ヒップ部分に英輔が手を掛けた。そうやって愛香を自分のサイドに引き寄せようとしたが、やはり、うまくいかなかった。

「待って。やり直しよ」

と、愛香は声を掛けるのがやっとだった。結局は愛香がステップを中止した。

二人はフロアを離れ、一階フロアの隅に用意されたカフェルームでブレイクタイムをとるようになった。

「地方予選まで、あと、一ヶ月余り、こんなんじや、予選にも落ちるよ。大会も近いんだから、もっと、集中しなきゃ。今日は特に、中間バランスがよくなかった。よく言うように、お互い、ボディが真ん中にある状態がベストなんだ。心と体、二つが一つにならないと、ワルツはこなせない」

「わかってるわ。わたしがどうかしていたのよ。ごめんなさい」

と、愛香が言った時、テーブルに飲み物が運ばれた。気まずい思いのまま、二人はお互いを見つめ合っていた。

「どうぞ」

英輔が、愛香が注文したシナモンティーを勧めた。英輔もコーヒークップを手にした。

二十七歳と二十三歳のカップルで、英輔が年上、二人は婚約者同士であった。幼なじみの仲だったので、兄と妹のような関係とも言えた。英輔は若手のドクターで、東上大病院の放射線医療科に勤務していた。超電動MRI装置（マグネチック・レゾナンス・イメージング）や、MRA（マグネチック・レゾナンス・アンジイオグラフィ）、CT装置（コンピュータド・トモグラフィ）などを駆使しての診断を主に手掛ける医師で、最新医学の担い手でもあった。

それだけに、忙しい時間を割いての今日のレッスン、二人が会うのも十日ぶりのことであった。それで、不満顔だった英輔も愛香に気を使い、会えなかった個人的事情を、自

分の方から愛香に話し始めた。

「愛香に淋しい思いをさせているものな。久しぶりのレッスン、ぼくの方が愛香に合わせていられなかったんだよ。気にするな。言い訳になるけれど、いま、大事なプロジェクトを抱えていて、ぼくも、時間が余り取れない」

「大事なプロジェクトって？」

「いや、それが大学内でも秘密事項でさ。それに、アメリカの某科学医療財団から、このプロジェクトの成果が期待されていて、資金面で援助がなされているんだ。成功すれば、世界の共有のビッグニュースとなるはずさ。ほんとうは、こんな場所では口にできないことなんだよ。プロジェクトが成功すれば、そのうち、愛香にもわかってもらえると思うけれど」

「いつから始まるの？それって、もう、始まっている話なの？」

「ああ…」

愛香の問い方が急なので、英輔は戸惑い、思わず、愛香の顔を見返した。目は真っ直ぐには英輔に向けられていず、心なし、愛香はふーと肩で息をした。目の前で合わせた両手を、落ち着かないふうに、動かしてもみせた。

それから、フロアーの方に視線をやったまま、愛香は独り言のような口調で語った。

「もっと、忙しくなりそうなのね。それなら、英輔とはもっと会えなくなりそう。こんなことってよくないことなのに。そうでしょ。せつかく、今度の大会に合わせて、コスチュームもオーダーしたのに、ダンスコンペーションがキャンセルになれば、みんなむだよね。あたし、楽しみにしていたのに」

「うーん、それが…。そのプロジェクト、いつ始まるか、分からないんだ。はっきり、スケジュールが出れば、ダンスコンペーションの予定も立てられるんだけど。その…。今日、明日のうちに、GOってことになるかも知れないし」

「よく分からない話だわ。それって。英輔って、いつもこう、わたしのことなんか、どうでもいいみたい」

ちよつと恨めしそうに愛香は言った。相変わらず、視線は宙に浮いていた。

それから、気を取り直そうとでもするように、愛香はシナモンティーのカップに手を掛けた。愛香の指は細く、きれいだった。

その指の動きを目で追いながら、英輔が愛香に語り掛けた。

「少しだけでも話はするよ。解剖学に関係のあることさ。その準備段階っていうか、ぼくの得意なコンピューター・グラフフィックを使ってのそれは実験なんだけれど、前々から関心のあったことでもあったし、やりがいのある仕事だから、ぼくは引き受けた」

「解剖学に関係のある話なのね。だったら、少しは理解してあげてもいいわ。あなたのおじいさんは解剖学の第一人者、そして、そのおじいさんの影響を受けてあなたは医学を志したんだし、それに、いま、英輔が勤務している放射線医療科の仕事だって、その解剖学が役に立っているんだもの」

一見、理解を示すふうの態度を、愛香は見せた。次の間合いが取れずに、英輔が黙っていると、珍しく、愛香が饒舌になり、小さい頃の二人の話を語り始めた。

「わたしはあなたのおじいさんとも、言ってみれば幼なじみ。そうでしょ。英輔の家の庭の一隅には、いまも、おじいさんの遺した解剖資料館が残されているわ。わたしも子供

の頃は、興味半分だったけど、地下室の仕事部屋を覗いたりして、おじいさんの仕事ぶりを目にしたものよ。こつこつと一人で、解剖標本を作っていたおじいさんの後ろ姿がいまでも、わたしの瞼の裏には灼きつけられているわ。少しは関係のあることよ」

「それじゃ、資料館の話が出たついでに、プロジェクトの一部の目的については話をしておくよ。献体された遺体を特殊な方法で、冷凍処理をし、ミリ単位で、その冷凍体を横断面に、スライス状に切断する。それが第一段階、次に、そのスライス標本を、一枚一枚、写真撮影をし、さらに、コンピューター処理をするのが第二段階、そして、次に、写真撮影したスライス標本を、アニメーションのようにつなぐ。これが第三段階さ。そうすると、映像にした場合、アニメーションのように動くバーチャル体ができ上がるってわけさ」

「凄いことなのね」

さつきまで、落ち着きのない感じで動いていた愛香の指が、ぴたっと止まり、愛香は英輔の話に聞き入った。フロアーに向いていた視線も、英輔に向けられた。

「このバーチャル体が完成すると、コンピューター・グラフィックの組み合わせ如何によつては、人体の内部の隅々までもが、見えるようになるんだよ。つまり、実物の人体そのものがモデルだから、脳組織にしても、内臓などもそのまま細部までも画像では再現されるってわけさ。これは、とても、素晴らしいアイデアなんだよ。そういう夢のあるプロジェクトに参加できるんだ。それに、さつきも言ったように、コンピューター・グラフィックの得意技もぼくとしては、自由に駆使できるわけだし、この機会は逃したくない」

「やっぱり、そういう話になると、英輔って、話の口調まで違ってくるのね」

「うん？ま、それは…」

「英輔のいまの話はとつても面白かったわよ。英輔が何を考えて生きている人が、わたしも理解してあげなくちゃと、いま、思ったの」

「ぼくはまだ一人前のドクターじゃないからね。忙しいのは仕方のないことだよ」

「でも、わたしのこと、英輔はどう思っているのかしら。わたし、とつても不安なの。わたしたち、明日はどうなるのかしらって？」

愛香の小さな唇の端がきゅっと締まった。英輔に向ける視線もきつくなった。

「やだな。だから、こんな場所で話をしたくはなかったんだよ。そんなこと、いま、話ができるわけじゃないし。さあ、ワルツの曲が掛かる。愛香、ぼくのいいパートナーになってくれ」

席を立ち、英輔が愛香に手を差し伸べた。

いつもなら、にっこり愛香は笑うのだが、この時は、笑みは浮かべなかった。遅れて、愛香も席から立ちエスコートした英輔に従った。

やっと、二人はフロアに向かった。

天井のミラー・ボールの輝きが二人を照らし、広いフロアに二人は一步を踏み出した。再び、ダンスビュウの時間の中で英輔と愛香はステップを重ねた。無言のままに。

スロー・フォック・ストロットと、クイック・ステップ、うまく、愛香も英輔の右のオペレーションサイドにポジションが取れた。

流れるように、そして、リズムカルに、愛香と英輔のカップルは『幻想交響曲』の調べに乗った。時折り見せる反対の上半体運動(コントラリー・ボディ・ムーブメント)、それ

に続く、滑らかな波の調律、やつと、二人は本来のワルツの華麗さの表現者となった。美しい愛香の瞳も輝いた。

水色のコスチュームも、それ自体が様々な風合いを含んだ。やさしい風になったり、ちよつと、意地悪な風になったり、また、どこまでも、奔放に野を駆ける気まぐれな風になったり、愛香は美しい舞姫の存在感を存分に示した。見ている者をも存分に魅了した。やつと、二人の息は合つてきたようだった。うっすらとした汗が二人の肌に浮いてきた。

第一章 死刑囚の謎

1

深夜二時、時ならぬ指令が発せられ、猟奇連続殺人犯の死刑囚佐川洋次郎が移送を理由に、拘置所・死刑囚舎房から出房させられた。死刑執行時刻は執行当日の午前八時以降と定められていたから異例のことであった。

拘置所所長玉木重朗と看守長の山浦清次の二人だけがこの場には立ち会った。

処刑実行時には通常は七、八人の特警隊員が動員されるから、その点でも異例だと言えたが、今夜は特別のスケジュールが組まれていた。

山浦看守長は舎房に入るなり、佐川を取り押さえた。不意打ちの上に寝起きだったので、佐川はなすすべもなく縛に付いた。後ろ手錠が噛まされた。そして、素早く、用意していた特製の拘束具が用いられた。目明き帽のような革製のマスクが頭からすっぽりとかぶせられた。このマスクには声が出せぬよう口を塞ぐ防具が付いており、佐川は歯軋りをしたが声にはならなかった。

次に、手足の自由を奪う拘束衣で全身が包まれた。こちらは布製だが袋をかぶされたようなもので、佐川は暴れようにも暴れようがなかった。すべては静かに執り行われた。

各舎房には外が覗ける郵便受けの窓に似た視察孔（シキテンマド）が取り付けられていたが、外を窺い見た者はいず、この真夜中の異変に気がついた収監者はいなかった。

そのあとも、佐川の取り扱い扱いは奇妙を極めた。荷物のように手押し車に乗せられ、獄舎の外にと運ばれた。

数人の夜勤の看守たちはこの様を目撃したが、他の拘置所に移送されると聞かされていたので不審の思いは抱かなかつた。規則違反の暴力行為などがあつた収監者には、このような取り扱いの間々あることで、拘置所では珍しいことではなかつた。

が、施設内から外に通じる地下トンネルを通過したあと、拘置所の外れの場所にある死刑執行場にこの死刑囚の身柄は運び込まれた。十月も末のことで、あたりのコナラの林はすでに葉が散ってそそげた枝だけが暗い天を刺しており、半分欠けた月がその枝に、儂げに懸かっていた。

「うつうつ、うつ」

と佐川が声にはならぬ声を上げ続けた。

佐川はしきりに手足も動かしたが、手押し車に乗せられた袋状のものがわずかにもぞもぞと動いただけだった。

寒々しい林の真ん中あたりに、ぽつん忘れられたように死刑執行場の建物が建っていた。拘置所の高い外塀に沿って灯された明かりが、化け物屋敷の趣を呈した建物を薄ぼんやりと映し出していた。

平屋建てでコンクリート造り、一見、頑丈な建物であった。外壁には枯れたツタが絡まっており、それは暗い天から差し出された魔物の手の先のようににも見えた。

傍らにもう一つ、小屋を思わせるちやちや造りの木造の建物が建っていた。

こちらは、霊安室で、棺桶が一つ入る分の面積が確保されていた。一際古く、この建屋の軒は少し傾いて見えた。

どちらも、死者の館を思わせるおどろおどろしさを、映し出しているかのようだった。内部に入ると、板張りの床は擦れ切れていて、木目がささくれ立っていた。一步一步を気をつけないと、棘が刺さりそうだった。

ただ一つ取り付けられた窓の鉄枠もさびびっていた。

その直ぐの場所に、小部屋があり、そこは阿弥陀仏の像が飾られた仏間になっていた。祭壇があり、ここは今生とのお別れの間だったが、佐川の場合はすべてが省略された。

カーテン一つで隔てられた刑壇のある場所にそのまま身柄は移された。

やっと、死刑囚佐川の拘束具の一部が取られた。革製のマスクと手の自由を奪っていた上着が外された。

だが、後ろ手錠のままなので、佐川の自由が奪われている状況に変わりはない。それに、下半身部分には袋状の拘束衣を着用させたまま、その上、処刑する時の例に慣らつて、両の膝が上からロープでぐるぐる巻きに縛られていたので、佐川は身動きができなかった。自由になった口先だけが、いまの佐川の攻撃武器となった。

「いいかげんにしろよな。これから俺様の首を吊ろうっていうのか。この真夜中によ。そうはさせないぜ。お迎えが来るのは覚悟していたが、何だっただ。こんなふざけた方法で俺様をこんな場所に連行しやがって。えーつ、こいつは規則違反だろうが」

刑壇の床に転がされたまま、佐川はそばにいた執行官に向け、悪態を吐いた。

高い天井から裸電球が一つだけぶら下がっていた。その暗さの下に、前額部がはげ上がり、ぎよる目であごが四角い人相の悪い男の顔があった。

ぺっとそばに控えていた玉木所長の顔に向け、佐川は唾を吐き掛けが、おのれの面を汚しただけだった。

「わたしが責任者だ。特別の事情ありでこのような手段を取るようになったが、これは所定の手続きとわたしは見なしている。どうせ、首をくくられることには変わらない。婦

女暴行殺人で前科六犯、佐川洋次郎は取り調べがついている者だけでも五人、その肉体を傷つけ、凌辱した上に鬪り殺した。どのような処刑方法であれ、お前は文句など言える立場ではない。お前はその体を八つ裂きにされても当然なのさ。凌辱の悪行を働いたお前の男のもの、たとえ、輪切りの刑にされたところで、文句など言えるものではない。いやいや、わたしとしては、そのような刑があれば、直ぐにでも実行に移したい気分だ」

玉木所長が毒づいた。

その時、山浦看守長が天井からぶら下がっていた処刑用の太い麻縄を手元に引き寄せた。直径二センチ、全長七・五メートル、縋われたその絞縄はのど輪に当たる部分全体に黒いなめし皮が巻かれていた。その皮は人間の脂を吸った分、暗い明かりの下で鈍く光っていた。絞縄は天井に吊り下がった滑車に通されており、さらに絞縄の一方の端は壁際の板床に設置された木製のハンドルに繋がっていた。ハンドルを手前に倒すと、処刑台の踏み板が落ちる仕掛けとなっており、また、首が締まるよう体重の分に合わせて、調節用の鉄の重しが、その執行具のロープの端にはセットされていた。ハンドルが引かれると、重し部分が撥ねて、勁部に加重が加わるのだった。

「おい、てめえら。俺様を地獄とやらに落とせば、どういうことになるか分かっているだろうな。てめえらの不正行為を世の中に訴えてやるために、俺はよっ、化けて出っからな。それによ、この拘置所内の噂話だと、この首吊り台で首をくくられた奴はみんな化けて出るんだって？ 《紫魂水》とやらいう紫色をした命の沸き水がこの地下室のコンクリートの床からは沸き出ている、そいつを吸うと、この世に甦ることができそうじゃないか。面白えじやねえか。俺様がそのことを実証してやるぜ。もちろん、そうなりや、真っ先にお前らを呪い殺してやるがな」

「そんなものただの噂話だ。未練がましい死刑囚どもが作り出した嘘話さ。間違いなく、お前は地獄行きた。いまさらじたばたするな。ここで首を吊られて、生き返った奴なんか一人もいやしないんだ。その、悪態をつく口も直ぐに閉じてやるよ。お前の命と一緒にな」

玉木所長が佐川の言い分を一笑に付した。佐川の口に猿轡が嚙まされた。

板一枚下は奈落の底、処刑台は二重構造になっており、地下にあたる部分は空洞になっていた。板と板との隙間から、生臭い一陣の風が吹き上がってきたのを、その時、佐川は敏感に感じ取っていた。

無理やり、佐川はその場に立たされた。

よろめく佐川の体を玉木所長が支え、そして、山浦看守長が佐川の首を絞縄の輪の中に入れた。黒い革の部分がのど仏にあてがわれた。その時、すでに、佐川の両足は二つの足型が記された踏み板の上にあった。

2

佐川からは死角になっていたが、地下室に白衣を身に着けた二人の男の姿があった。

一人は東上大学医学部助教授の根本和芳、もう一人は死体引取りの役を受け持っている葬儀人の宇野俊光であった。

なぜか、二人の顔や体は紫色のゆらゆらとゆらめく光に包まれていた。オーラ光を

思わせるその紫色の発光体こそが、さつき、佐川が口にした《紫魂水》の正体であった。

地下のコンクリートの床の表面から、じゅくじゅくとした紫色の液体様物質が沸き出るように滲み出ていた。その物質からは、ゆらめき立つ湯気のような妖気が立ち昇っていた。死刑囚たちの怨念なのか、この地下室のコンクリート床からは、紫色の液体様のものが拭っても拭いても浮いて出るのだった。

誰もこの物体について解明した者はいないが、拘置所内ではこの《紫魂水》の存在はまことしやかに語り継がれていて、佐川もその噂話を信じている者の一人のようだった。

この時、不審の行動をする者がいた。コンクリート床の上にはしゃがみ込み、その問題の《紫魂水》らしき液状のものを、注射器を取り出し採取している男がいた。葬儀人の宇野が執心ぶりを示した。もう、三分の一ほども注射器には紫色の液体が取り込まれていた。

「そんなもの採取して何になると言うんだ。気迷い事さ。あの死刑囚の男のたわ言をききも信じているのかね」

根本助教授が軽蔑しきつた口ぶりで宇野に告げた。宇野はそれには何も答えず、根本助教授を無視した。背を丸め、なめるように床に顔を近づけ、その不審の行動を続けた。

裸電球が一つ天井部分からぶら下がっていたが、その明かりすら今はぼやけて見えた。暗紫色の闇の中で、モワレ状にゆらめく妖光だけが、生きているもののように揺らめいた。「首を吊られても、三分以内なら生き返ることが可能だ。こやつは本当に殺してはまずい。なにしろ、大事な献体、それも生きたままでの献体は確保したい」

死刑執行立ち会い医師としての役を負っているのに根本助教授が、この場には相応しくない不謹慎な台詞を吐いた。

二人の頭の上の薄い板天井ではまた死刑囚の男と処刑人の間で一騒動があった。そのあと、死刑囚の男が何か喚いた。

「お、急にあたりは静まった。いよいよ、首を吊る準備が整ったようだった。」

「お、おい、止せ。お前ら、う、うら…み…」

とまで、佐川は口にしたが、次の瞬間、踏み板の片面が翻った。

「がちゃん」と音がし、佐川の体が宙に浮いた。二本の足が踏み板を踏み外し、宙を蹴るように地下室空間に突き出た。一度、絞縄はしなり、体全体がバウンドし、持ち上がった。

首には体重の他に、重しの加重が加わるので、いつとき、宙に浮いた体は、その締め付けの分、反発力のせいで跳ね返されるのだった。一瞬、絞縄がぴんと張った。

が、その縄の張りが急に解かれた。黒い塊になった佐川の体が、一旦、宙に浮いたあと、そのまま真つ逆さまに、コンクリート面に向け、落ちて来た。

頭上から降ってきたものを、支え持とうとして宇野が初め、手を差し出したが、「ばしっ」

と、鞭打つような音がし、佐川の体が宙に翻った。次の瞬間、死刑を執行された佐川の体は、頭から落下した。絞め縄が途中で切れたようだった。

後ろ手錠を噛まされたままの状態で、佐川の左顔面がコンクリート床にモロに叩きつけられた。

「がきっ」

と、佐川の顔面の骨が碎ける音がした。

「おっ。何てことだ。こいつの体は一部でも欠けてはならないんだぞ」

コンクリート面にうつむけの状態で叩きつけられた男の顔面から血が溢れ出てきた。根本助教授が慌てふためき佐川のそばに寄り、様子を窺った。

びくびくつと、佐川は全身を痙攣させた。顔を上に上げようとしたが、直ぐに、がくつと首を折った。

「このまま死なれちゃまずいんだ。おい、どうなっている？」

慌てて、根本助教授が佐川の体を仰向けにさせ、そして胸に聴診器を当てた。佐川の心臓はまだ動いていた。ひくくと鼓動を繰り返していた。

左顔面を強く打ちつけたために、眼窩から左の眼球がによりりと飛び出していた。眼窩上孔の一部の骨が欠けたらしく、その部分は陥没していた。砕けた骨片もあたりに飛び散ったようだった。

「こいつは手のつけようがないな。早く、ここから連れ出して、処置をしたほうがよさそうだ」

甲高い声で根本助教授が言った。

佐川の顔面からは血がだらだらと流れ出て、床を汚した。血の流れはつーと走り、そして、紫色の発光物体と交じわった。

血はコンクリート面に吸い込まれたあと、ちろちろと暗紫色の小さな炎を立てた。

陥没した左顔面の眼窩部分からは白い目玉がによりりと半分ほど飛び出していた。目玉をつなぎ止めているぬらぬらした内直筋も目玉につながったままの形状で飛び出していて、それ自体もぬめつと蠢いた。

目玉は《紫魂水》の在りかを確認めようとするのか、眼球を精一杯に見開こうとし、によりと動いた。その白い目玉部分もコンクリート面に触れているあたりから次第に侵食され、紫色に染められて行った。

やがて、《紫魂水》の靈気を浴びたのか、目の玉の赤い血の条も紫色に変色していった。その目玉はじつと暗紫色の闇をそのまま凝視し続けた。何かをしゃべろうとし、佐川は今度は口をもごもごと動かした。舌がによりりと出て来た。どうやら、床から沸き出る《紫魂水》を自らの意志で舐めつくそうとしているようだった。恐ろしい情景を目にした根本助教授がその場に立ち竦んだ。

その時、二人の執行官が地下室に戻って来た。

「絞縄が緩んだようだ。こんなことは滅多にはないのだが。鉄の重しの荷重を掛け過ぎたのかも知れんな」

「も、申し訳ありません」

玉木所長が言い訳をし、そして、山浦看守長が詫びた。居並ぶみんなの顔も暗紫色に染められていたので、異様な感じの連中がこの場所には勢揃いすることになった。

ぽつかりと空いた天井の四角い穴からは、いまでも絞縄だけがぶら下がっており、黒い革の巻かれた首輪が鈍い光を放ちながらぶらんぶらんと、みんなの目の前で揺れていた。

根本助教授が飛び出した目玉に応急処置を施し、ひとまず元の場所に押し込んだ。左顔面は内出血しているのか、こぶし大にふくらんでいた。佐川の顔は異様な面相に変わっ

ていた。

あたりに飛散している眼窩部分の骨片を、根本助教授が一つ一つ拾い集め、ビニール袋に収めた。

「ひとまず生きています。そういうことでいいのですよ。みなさん、これは世の中のため、人のためになることです。医学的人体実験、いっぞやは、下げてもらった死刑囚の献体を、切断面がよく観察できるよう真つ二つに切断し、わたしは人体標本としたこともあります。この男の場合は首吊りの刑に続いて、切り刻みの刑にすることにしようですが、なーに、苛酷な話ではありませんが、それだけの悪行は犯した男、自業自得でもんです。よもや、この男が化けて出ることはないでしょう」

根本助教授が平然とした口調で言い、そして、玉木所長と山浦看守長が頷いた。

地下室の狭い空間に棺桶が運び込まれた。葬儀人らしいてきぱきとした動作で宇野が万端を整えた。

棺桶の中に、死刑囚佐川洋次郎の体は収められた。手足がぐにやりと動いた。

その間、根本助教授が携帯電話で誰かを呼び出した。死刑執行場からメッセージが送られた。

「ああ、矢萩くん、緊急事案だ。例のプロジェクト、献体を入手した。このあと、わたしが遺体の方は処置をしておく。今夜はきみは当直だよな。明日の朝、勤務が明けたら、例の場所に来てくれ。待っているよ」

相手はこの件を承諾したようだった。直ぐに、電話を切った。同じ大学内、この事案が秘密プロジェクトであることを、意識してか、根本助教授は最低必要限だけのことを、同じ大学病院に勤める助手の矢萩英輔に伝えた。

死刑執行場の横手に用意されている霊安室は無用のものとなった。

深夜、黒塗りのバン型霊柩車がその棺桶を積み、拘置所の裏門を出た。真つ暗闇の行く手に街の明かりがいくつも点滅していた。すーと加速し、車はその街中に消えた。

3

街路樹のイチヨウ並木がどこまでも続いていた。風に煽られて黄色い枯れ葉がくるくると舞った。地にまとわりつくように、枯れ葉は街路にへばりつき、そして風に弄ばれた。大きな街通りから少し入った場所にまだ建築して間もない六階建てのビルがあった。

あたりは真夜中のことで、しんと静まり返っていた。街全体が眠りに就いていた。わずかに車のエンジン音だけがあたりに響いた。

その建物の裏口に車の通用口があり、宇野が運転している黒塗りのバン型霊柩車が駐車場内にすべり込んだ。そのまま、地下一階のいちばん奥の場所に車は乗り入れられた。

同行した根本助教授もこの車から降りた。

駐車場の奥まった一角には特別造りの空間が用意されていた。銀色のスチール扉には『J Eステーション』の横綴りの文字が記された看板が出ていた。その下に、目に止まらないほどの小さな文字で『JAPAN ENBALMING STATION』の表記が示されていた。『J Eステーション』とはその略記の意味であった。

EMBALMING（エンバーミング）とは、死体の修復、復元、保存処理、衛生的見地からの処置、死顔を美しく見せるための美顔術（トリートメント）などを行う施術のことをいう。いわば、死体処理術のことだったが、日本では余り馴染みがなく、実際の葬儀でエンバーミングを希望する遺族はまだ少ないのが現状で、余り、エンバーミングのことは知られていなかった。

戦争時の遺体修復の必要性から、発達した技能の一つで、主に、欧米諸国で、エンバーミングは行われており、これらの技能資格を持つ者を欧米ではエンバーマーと称している。宇野もその技能資格をアメリカに渡り、習得した者の一人で、エンバーミング施術については国際ライセンスを得ていた。

間もなく、金属製のチャーチトラック（移送用ストレッチャー）が用意され、その上に棺桶が乗せられた。宇野が手慣れたふうに住物の内部に棺桶を運んだ。

入った直ぐの場所は事務所になっていたが、その奥の扉の向こうには病院の手術室を思わせる造りの大部屋があった。スチール製の扉を開くと一気に明るく空間が開けた。

回りの壁には白いタイルが張られており、広い床面も防水可能なタイル製品で、この部屋は張り詰められていた。

そして、白いほうろく製のオペレーション・テーブル（手術台）とドレッシング・テーブル（遺体安置台）が二台、フロアーには据えられていた。オペレーション・テーブルの側面には汚物を流すための溝が掘られていた。

高い天井には、自在に向きを変えられるリモコン操作の最新式ライトが用意されていた。部屋の間には遺体冷蔵庫、移動用のユースリイティ・テーブル（便利台）も用意されており、天井には電動式の遺体移動昇降機（ボデイリフト）がセットイングされていた。

壁際にはステンレス製の用具箱がいくつもあり、その棚には鈍く光るメスや、ピンセット、ステイザー（鋏）、チューブ、鉗子（フォーセツプス）、それに何種類かの消毒液や薬品類などが置かれていた。

いずれも死体にエンバーミングを施すために必要なこれらは品々であった。

佐川洋次郎の死刑執行体が、宇野の手によってオペレーションルームに運ばれた。

エンバーミング・ルームには根本助教授と宇野の二人が残った。エンバーミング施術が開始されることになった。

無関心な表情のまま宇野が黙々と作業を続けた。根本助教授とも必要事以外は口をきかなかった。

宇野の横顔は整って見えた。日本人にしてはやや鼻が高く、鼻梁も張っていたので、しっかりと顔立ちに見えるからだだった。ただ、三十半ばの齢なのに、眉根に一本深い縦皺が刻まれているのが、この男の特徴で、仕事で死体といつも向かい合っているせいか、陰気な顔立ちの男にも見えた。

このあと、ユースリイティ・テーブルの上に、これから使う器具などが取り揃えられた。宇野がそれらの手順を手際よくやってのけた。

根本助教授が持参したかばんから注射器一式を取り出した。佐川の太い腕に注射針を突き刺すと、根本助教授は催眠剤を注入した。

根本助教授は頭頂が丸く禿げた五十男で、貧相な顔立ちをしていた。落ちくぼんだ

目が引つ込んでおり、頬もそげ落ちたようにこけていた。それに唇の端がいつも結ばれたかたちだったので、どこか、気難しそうにも見えた。

「さあ、素早くエンバーミングトリートメントやらをやってくれ。生きている内がいちばんだ。死体だと死後硬直が始まり、死斑が残る。そりじやまずい。あくまでも生きていくようにだぞ。それにしても、エンバーミングというのは、死体に残存する病原菌なども、きれいさっぱり消毒してくれる。解剖標本作りにはぴったりの処置法だな」

饒舌になった根本助教授が宇野のご機嫌を取り結ぶような言葉を列ねた。

佐川の体は素っ裸に剥かれた。天井に取りつけられている遺体移動昇降機の電源が入れられた。いわゆるクレーンというやつで、この遺体昇降機は縦横にも移動が可能だった。

一旦、佐川の体は壁際に運ばれたあと、壁伝いに降りてきたその昇降機に収容された。体を支える輪が三本ついていて、その中に佐川の体は収まった。それから、ぶろうーんと、電動機の音がし、男の体は白いほうろろ製のオペレーションテーブルの上に上向きに寝かされた。

まだ、死刑を執行されたばかりの佐川は生きていた。半ば、気を失っていたが、息はあった。意識を取り戻そうしてか、正常な右目をしきりに開こうとした。それにつれ、ぐにやぐにやになった左目がひくひくと動き、また、眼球が外に出てきた。目玉だけは生きていることをいまも指し示しているかのようだった。根本助教授がその眼球を眼窩の奥に収めようとした。が、ぐにやぐにやし、この軟体物はなかなか眼窩内に収まらなかった。

「わたしがやります。そういう作業には慣れていきますから」

初めて、宇野が口をきいた。ぼそぼそしたしゃべり口は抑揚がなく、感情に乏しかった。眼球が元の位置にひとまず収められた。手慣れたふうには、宇野は生体を取り扱った。

もう、催眠状態に入りつつあるのか、佐川は何の抵抗も示すことはなかった。

生体の下にボディ・レストを三個噛ませた。解剖台と体の間に空間を作った。

こうしておく、血液や水、汚水などが下の溝に流れやすくなるのだった。

次に、ニードルと呼ばれる血管取り出し棒とメスが用意された。便利台の上にはチューブや、鉗子、注射器、用途別の大小のメス、ステイザーなどが取り揃えられていた。

メスの先が佐川の首筋に当てられた。鎖骨にそってメスが入られた。五センチほど切り込む。肉が切開かれ、血が吹き出た。素早く、ガーゼで押さえた。

次に、宇野は長さが七センチはある血管を取り出すために使われるニードル棒を首筋の切り口に差し入れ、静脈の在りかを探った。一本の静脈が抽出された。ニードル棒で表面に出た静脈を支え、さらに、外れないよう縫合糸でいねいに結んだ。

これはカローデット・アーテリーと呼ばれるエンバーミング法の一つだった。さらに、宇野はいろいろな箇所静脈抽出法を用いた。

肩先、手首、足首の静脈などが抽出され、それぞれ、ニードル棒が支えた。

「血が固まらない内に血液交換だ。これで眠るように、生きながらにして、この男はあの世に行けるつてもんだ。安楽死さ。苦痛があるわけじゃないから、恨みつこなしだな」

根本助教授が勝手な台詞を吐いた。それから医者らしく専門的な注文もつけた。

「グロット・デイス・ペイサー（凝固血液）がないように、きれいに血液は外に洗い出してくれ。死体はきれいに仕上げるのが肝要だ。そのあと、わたしが調合した薬液を体内」

に注入することになる」

これが死体だと凝固した血液が血管内には滞っているのだが、佐川の場合は生体だから、その心配はなかった。心臓だつて、ぴくぴくと動いていた。ただ、催眠剤が効いてきたのか、全身はだらりとしており、すでに佐川は正体を失くしていた。

からからと音がし、金属製の移動作業台に乗せられ二台のエンバーミング・ポンプが宇野の手によつて運ばれた。トロツカーと呼ばれる吸引器であつた。

上半分は透明のプラスチック作りで、下半分には計器や手動ハンドル、それに、強化ゴムで外側が覆われたチューブが各二本ずつ付いていた。一見したところ、全体の印象は大型のジューサー式の攪拌機といった感じであつた。

手際よく作業は進められ、先程、ニードル棒でピックアップした首の静脈に、尖つた管の一方の先が刺し入れられた。さらに、腰骨上の静脈部分にも、もう一台のエンバーミング・ポンプの管の先が取り付けられた。

それから、宇野は別の容器にホルムアルデヒド系の化学溶液を用意し、エンバーミング・ポンプの管と接続した。動脈用の化学注入剤が容器には入つていた。

エバーミング・ポンプのスイッチが入れた。ぶわわーんと溶液が攪拌される音が響いた。それと共に、ホルマリン臭のような匂いがあたりに漂つた。

注入された溶液は心臓というポンプを通して、動脈、静脈、そして、毛細血管にまで、この溶液を送り届け、血液を溶液と交換する。その循環システムが稼働し始めた。

この循環システムによつて体内にある血液、尿、消化変化物などは、きれいに洗い流されるのだつた。交換され、排出されて来るものには当然のことながら、血が混じつた。体内の残留物が外に排出されつつあつた。

それと共に、男の顔から次第に血の気が失せていった。

「生きたままエンバーミング処置をするのは、確かに、殺人行為には違いないが、なーに、気にすることはないよ。すべての責任はこのわたしにあることだ。ま、二度も死ななければならぬとは、この男も因果なことだが、こやつは罪業がすべてはなせる技、きみは殺人者でもなんでもないんだ」

根本助教授がエンバーミング・ポンプの一つに目をやりながら、傍らの宇野に告げた。

エンバーミング・ポンプの上部々分は透明のプラスチック製だから、内容液が一目で分かつた。薬液は循環しているの、攪拌された血が容器を通して見ることができた。

その間、宇野はたじろぎもせず、その場に立ちつくし、死刑囚・佐川洋次郎がこと切れる様を観察していた。

心臓が最後の力を振り絞つていた。とつくん、とくくつと不規則な脈が刻まれ、そこだけが生きているように脈打つた。

だらりと垂れた手の手首あたりの脈も急を告げ始めた。青い血脈が浮いて出た。

すべてが終息の状態を迎えつつあつた。やがて、佐川の全身から緊張力が失われて行つた。

「失血死つてことになるな。この男の正確な死因は。血が溶液に交換されて血の色が薄くなつて行くにつれ、こいつの心音は弱められてくつてわけだ。もう、間もなくだ。わたしが正確な死亡時刻を測定してやるよ」

こともなげに言い、根本助教授はわざわざ聴診器を手にし、男の裸の胸に当てた。

「午前二時十四分、完全に心臓が停止した」

間もなく、男の心音は途絶えた。

根本助教授が死刑囚・佐川洋次郎の胸から聴診器を外した。死亡を確認したあと、根本助教授が宇野に事務的な口調で告げた。

「いいかね。血管内の洗浄が終了したら、遺体保存のためのホルマリン剤の入った特別調査のケミカル溶液を体内の血管の隅々まで染みとおるようには、注入してくれたまえ。わたしが研究した末に作り上げたものだ。エンバーミング溶液とは違う。絶対に効果はあるさ。こいつの肉体は、われわれ医学に携わる者によって選ばれた意味ある肉体だ。普通の死体じゃない。この、死刑囚の肉体は聖なる医学用献体として生かされる。世に害毒を為した猟奇殺人犯が、世のため、人のため生まれ変わるといふ美談がここに生まれるんだ。きみだって、その名譽ある目的のために一翼を担う。誇りに思うことだな」

驕った口調で、根本助教授が宇野に告げた。エンバーミング・ポンプが、なお、ぶわわーんと、攪拌の音を立てた。

4

特別調査の腔用溶液が佐川の体内に注入された。この溶液は根本助教授が研究の末に開発したもので、防腐の目的の他に、筋肉細胞を固定する効用もあった。

注入の状況を確認してから、根本助教授は小休憩をとるために特別に用意されたオフィスのルームに入った。

そのあと、根本助教授は仮眠を取った。うっすらと、窓の外には朝明けの気配が忍び始めていた。

すっかり、夜が明けた頃、遅れ走せながら、矢萩助手がJエステーションに駆けつけた。

根本助教授は上機嫌で矢萩助手を迎えた。

「待望の献体は確保した。ついに、バーチャルマン計画の秘密プロジェクトはスタートした。アリア科学医療財団の期待にも答えないとな。その自信はあるよ。まずはお祝いだ。乾杯と行こう」

アリア科学医療財団は欧米では知られた財団で、これまでも、多くの医療チームに資金援助などをし、医学の発展に寄与してきた。

今回、バーチャルマン計画の素案が認められ、アリア科学医療財団でも、独自の研究チームを発足させ、根本助教授のチームの側面援助を行う取り決めが、両者の間には成立していた。

借り切ったオフィスルームに備えられた冷蔵庫から、根本助教授はブルゴーニュ産のロマネ・コンティの名のあるワインを取り出した。ワイングラスが二つテーブルの上に置かれた。

コルク栓を開けながら、次に、根本助教授はワインについての講釈にうんちくを傾けた。「ブルゴーニュのヴォーヌ・ロマネ村、わたしは行ったことがあるが、その小さなぶどう畑でのみ生まれるこれは世界の名品だ。あらゆる意味で完璧な酒と言われている。このワインは、ビロードの手袋をはめた鉄の手を持った者たちによって作られる」とも言われている。このワイン。今度のプロジェクトだってかくありたいもんだな。細心の注意を払って、そう、

完璧にやり遂げることが肝心だ。そのためには鉄の意志も必要だ。われわれ医業に携わる者としては。献体男に幸あれかしだよ」

そのあと、赤ぶどう酒がワイングラスに注がれた。根本助教授がソムリエを気取り、ワイングラスを鼻に近づける薫りを嗅いだ。

根本助教授に薦められ、矢萩助手もワイングラスに口をつけた。疲れた体にはワインは血の一滴の効き目もあった。

「先生、まだ、コンピュータ・グラフィックを使つての試作用のバーチャル体でしかありませんが、バーチャルマンのサンプル体と、応用ソフト案がアリア科学医療財団チームからインターネットを通じて送られてきました。いま、ごらんになりますか」

「ああ、いいね。上等のワインを嗜みながら、近々未来の医学解剖学の画像がわが目で確かめられるとは。それも、わたしの素案が採用されてのものだから、気分はいいね」

根本助教授は得意顔になり、頬を緩めた。それから、矢萩をねぎらうためか、饒舌になった。

「きみの、グラフィック・コンピュータの腕は大学でも評判だ。いまは、放射線医療科と言えば、大学病院でも最先端医療の部署に入る。コンピュータを手足のように操作できる能力がなければ務まらない。矢萩英輔はその部署の花形医師だ。そのきみにC・G化については協力してもらつての今回のプロジェクト、わたしは感謝しているよ」

一人、うまそうに、ワインを嗜みながら、根本助教授は満足そうに言った。

オフィスの隅に設置してあるパソコン機器を操り、矢萩助手が一枚のCD-ROMをセットした。そのソフトには、解剖バーチャル体と彼らが呼んでいる特殊な人体解剖標本が入力されていた。秘密プロジェクトで、バーチャルマン計画とそれは名付けられていた。

バーチャルマン計画は、広い意味で、医学界のこれまでの常識を覆すはずだった。

根本助教授が考え出したバーチャルマン計画は、これまでの解剖学を全否定するものとして学界の注目を集めるはずだった。

篤志家団体が推進する献体制度などのお陰で、医学を志す者は、献体者の人体をこれまで入手できた。実際に解剖をすることで、医学生たちは解剖実習を行ってきたのだが、問題点がなかったわけではなかった。

防腐処理などを行う準備期間が三ヶ月、解剖実習期間が通常三ヶ月から七ヶ月ほど必要という手続き上の問題の他に、実際の解剖では、一方からの解剖となることが多く、必ずしも、人体のすべての構造、内臓・組織などが、解剖の結果、明らかになるのでもなかった。また、場合によっては献体不足という事態を招くことも間々あった。

その点、バーチャルマン計画による人体解剖標本は画期的な学問的価値を生み出すはずであった。

標本体に、急速冷凍を施したのち、頭の前から足の先までを、特殊なスライス旋盤を使って、輪切りにし、それらを、一枚、一枚、デジタルカメラに収め、コンピュータ・グラフィック処理を行い、さらに、バーチャル体に組み替え、画像上に、その標本体を再現しようというとてもない計画が実行に移されることになっていた。

パソコンの画面上に、サンプル用のバーチャル標本体が映し出された。これはアニメーション処理されただけのものだったので、想像図にしか過ぎなかったが、それでも、根

本助教教授のチームが実行に移そうとしているものと画像そのものは大差はなかった。

人体を、横断面でスライス状にした線描画だったが、バーチャル標本体は連続動作を与えられたことで、画面上では生きている者のように動いた。

他に、医療ソフトの応用面での試作アニメーション何案かが付け加えられていた。

一通り、見終わったあと、根本助教教授が矢萩助手に言った。

「それで、コンピュータで計算したところでは、佐川という死刑囚に要するデジタル写真は何コマ必要となるのかね」

「身長が一メートル七十六センチ、大柄ですから、一ミリ単位のスライス断面写真を撮るとすると、一千七、八十枚前後の枚数を必要とすると思います」

「たいへんな作業だ。新しく製作したスライス旋盤機の性能次第だが、その、一ミリ単位の解剖体の断面を一枚ずつ、撮影、デジタル写真化し、この、サンプル体のように、組み合わせ、連続写真にすると、バーチャル標本体となる精巧なバーチャルマンが誕生することになる。このプロジェクトを完璧にやり遂げると、わたしの名前も協力をしたきみの名前も、一躍、世界の学会では知られることになるだろう」

根本助教教授はワイングラスを傾けながら、なお、上機嫌だった。

続いて、パソコンの画面上には、脳細胞の断面バーチャル画像が映し出された。

根本助教教授が大病院の病理解剖体から脳細胞を入手、このJESテーションに設置した特製冷凍機で脳細胞を急速冷凍したあと、同じく、スライス旋盤を使って、ミリ単位の裁断したものだ。こちらは、実物の脳細胞を数ミリ単位の切断し、一枚ずつ、写真を撮って、デジタル化をし、アニメーション画像と同様に、連続画像としたものだった。

今回のプロジェクトと同様の手続きを経て、これらは作成されたものだったが、脳細胞そのものが画像処理をされたものを見るのは根本助教教授は今日が初めてのことであった。

スライス体でしかなかった一枚一枚の脳細胞だが、実物を加工したもので、画面上で一つにつながると立体感も手伝い、この脳細胞標本体は、かなり、リアルな画像となっていた。

ひとわたり、目を通したあと、その出来具合に、根本助教教授は満足した表情を浮かべた。

「いいかね。わたしのテクノロジーが医学界を変える。わたしの恩師であり、きみの祖父である矢萩道太郎先生もきつと喜んで下さると思う。医学界は、日進月歩、まさに、この『バーチャルマン計画』は画期的なことだ。旧来の解剖学は見直されることになる。いやいや、これは矢萩道太郎先生の業績を全否定するような話だが、解剖医学に尽くされた先生のこれまでの輝かしい業績を全否定してこそ、先生もきつとお喜び下さると、わたしは思う」

根本助教教授が少し感慨深げに言った。矢萩英輔の祖父の道太郎は、日本の医学界では解剖学の権威として知られていた。かつ、根本助教教授は矢萩英輔に告げたのだった。そのへんをおもんばかり、根本助教教授は矢萩英輔に告げたのだった。

「ぼくもそう思います。C・G技術を駆使して、解剖スライス体をさらに自由加工をし、バーチャル化すれば、人体の内部が手に取るようにわかるようになります。医療ソフトの分野でも、その利用価値は無限の可能性を秘めています。祖父が営々とやってきた作業は尊いものだと思いますが、あくまで、あれは人体標本の一つです。手に取り、見るだけのもの、ぼくはもう過去の遺物だと思っています。今度のプロジェクトが成功すれば、医学牛16

だって、解剖実習も人体解剖だけでなく、バーチャル化された映像を通して、多方向から、立体的な内部構造の観察が可能ですし、内蔵部位なども、その各臓器の重なり具合まで確かめることができます。それに、まったくの新しい試みですが、手術などの際には、予め、各患者ごとの情報さえインプットしてやれば、今度の『バーチャルマン計画』のデータベースを元に、実際の手術のシミュレーション、手術方法の事前予測まで、そのバーチャル脳体を使うと可能になると思われませんか、これはもう驚きです」

「特に、脳外科などでは、多くの場合、手術の失敗は許されないから、待望久しい。きみの専門分野だが、コンピュータ・グラフィックが医学を変えつつあるのが現状、その点でも『バーチャルマン計画』は医学界に革命をもたらす」

「そうです。様々な方法でデータを自由加工すれば全く新しい医学ソフトの開発も可能です。二十一世紀の医学は遺伝子治療のバイオ技術の進歩と合わせて、この『バーチャルマン計画』の実現が大いに寄与することでしょう」

矢萩助手も興奮気味に語った。

二人の話はつきることがなかった。

もう、明け方に近い時刻になっていた。このオフィスの一室にだけは昼夜の知れぬ明かりが、いつまでも、こうこうと灯っていた。

5

血液交換、医学用ケミカル溶液の交換を合わせて、約四時間が費やされた。

別室で、根本助教授と矢萩助手が祝杯を上げているうちも、この作業は続けられた。

心臓を中心とした血脈の循環系統がポンプの役を果たし、動脈を通じて、静脈から毛細血管にまで薬液は滞りなく送り届けられた。

それらの死体保存処理をひとまず了えたあと、宇野はエンバミング・ルームの明かりを消した。ほぼ、真っ暗闇の状態になった。

一人頷いてから、宇野は注射器を手にした。何か、意を決することがあるようだった。

光を遮断する容器に入った《紫魂水》を、宇野はその注射器に取り入れた。

暗闇の中で紫色のオーラ光を確かめた。

注射器を使って、別に用意したエンバミング・ポンプの薬液タンクの一つに《紫魂水》を混入させた。

それから、佐川の腕や足、腰部の静脈にも、宇野は注射針を何回か刺した。仕事人らしく、この男は自分の仕事にこだわりぶりを示した。

エンバマーという職業は死体の保存をするだけではなく、死体の状態を美しく保ち、死顔を安らかに、かつ、美しくトリートメントするという使命が課されていた。

宇野がこの《紫魂水》の靈力に取り憑かれたのは、エンバマーとして、死に顔を美しくするトリートメント法を研究するうちに、《紫魂水》の存在を聞き知って、実際に用い、その効力を確かめることができたからだだった。

死刑執行場の処刑死体置き場のコンクリート床に発生する靈的物体《紫魂水》を採取する機会を得たことで、宇野はこの物質を使い、エンバミング処理法を行いながら、死

顔を美しく保つたための施術をこれまで実験的に試してきた。

その結果、生きている者のように死者の顔が生気を帯び、死者特有の気味の悪さが柔らげられることを知った。それ以来の、宇野の《紫魂水》への執心ぶりというわけだった。

宇野は《紫魂水》の入った注射器を手にした。エンバーミング・ポンプが回り、そして、静脈内に《紫魂水》が注入されていく内に、心なし、佐川の顔に血の気のようなものがさし染めた。土気色で強ばって見えた顔面が、何か、もの言いたそうに口元がほころび、柔らか味を帯びてきた。

そう見えたのは宇野だけだったかも知れないが、宇野は《紫魂水》の持つ、その霊的エネルギーを信じていた。

《紫魂水》が全身の血脈に送り届けられたあと、肌に生気が取り戻された。明かりの消えた暗い部屋だったので、死体の血脈の隅々にまで《紫魂水》が染み入っていく様子が見て取れた。クモの糸がそよぐような紫色のオーラ光が皮膚の表面に浮いて出た。まとわりつく感じで微かに揺らいでもいた。なよなよした草の芽が生え立って来るかにも見えた。

数時間後、死刑囚・佐川洋次郎の死体は生きている者のように蘇った。もう、見た目は死体のように見えなかった。

もつとも、それはエンバーミング術を施されたからのことで、この男の心臓が再び鼓音を打ち始めたというわけではなかった。

その首尾を見届けたあと、宇野はさらに仕事人らしいこだわりを見せた。陥没した眼窩の修復に取り掛かった。死刑執行場で根本助教教授が拾い集めた眼窩周辺の骨片を、宇野はビニール袋から取り出し、医事用の接着剤を使って元通りに修復した。

エンバーマーとしては、実際に交通事故による死者などに、これらの術は用いることがあったので、手慣れた作業の一つだと言えた。

それでも小一時間は要した。

宇野は熱心にそれらの骨片を張り合わせた。眼窩の奥に、飛び出した目玉もきちんと収められた。そして、両方の目は開けられたままの状態に保たれた。男の死体が白く眩い天井の一角に向けられていた。

一仕事を終えたあと、宇野は「ふー」と息を吐いた。仕事をやり遂げた充実感があつた。《その時、宇野は霊体現象に遭遇した》

幽体離脱現象（アスラル・プロジェクト）が起こり、もう一人の佐川がその死体から離れようとしていたのであつた。暗紫色の闇の中で、妖しげな光景が繰り広げられた。

足元から脳天にと、紫色の光を帯びた《気体の膜》のようなものが抜けて行き、そして、佐川の肉体からふわりと離れると、その《離脱体》は空間に浮いた。

サナギから孵化したばかりの昆虫のように、どこか、頼りない感じであつた。

その幽霊体は透けて見えていて、後ろの壁とも重なっていた。《幽霊男》は宇野の方を恨めしげにじつと見つめた。眼球部分は修復したはずなのに《幽霊男》の片目は潰れたままで、その一部は垂れ下がっていた。眼球部分はこぶし大に腫れ上がっていて、黄色の燐光のようなものを放っていた。

傷ついていない右の目だけが大きく見開かれており、何かを探るように、その目はじろりと回りを見回した。

しかし、佐川が変身した《幽霊男》の全身の動きはまだ弱々しかった。まだ、完全な幽霊体になり切っていないように見えた。

《幽霊男》の足元は白っぽいねばねばした気化物のようなもので隠されていた。いわゆる《エクトプラズム》と霊体現象では言われている霊物質で、それは幽霊体をかたち作る元素とも称されていた。

やがて、その霊物質は佐川の幽霊体と一体化した。佐川の幽霊体がすーと紫色に染められて行った。

別段、宇野は驚いた様子は見せなかった。暗紫色の闇の中で《幽霊男》と対面した。

幽霊現象が起き、幽霊体が生まれる条件として、これまで宇野は《幽体Ⅱボディ》《精神体Ⅱフィジカル・ボディ》《幽体Ⅱアストラル・ボディ》の三つがあると考えてきた。それに、プラスして、霊的エネルギーを持つ《紫魂水》の存在を知ったことで、宇野は霊現象を人為的に作り出す機会が得られると、考えた。そのための試みの一つとして今回は死刑囚佐川の肉体をその対象としたのだった。「《紫魂水》の霊的エネルギーが功を奏したようだ」

一人、満足げに頷き、宇野がひとりごちた。「俺様はお前のお陰でこの世に生き返ったようだな。お前に礼を言わなくちゃならないが、人間の体とやらは、どうやら、まだ、俺様には備わっていないようだな」

生気に乏しい声で《幽霊男》がしゃべった。透けた幽霊体は、いまにも壁の向こうに消えて失くなりそうだった。

その時、宇野の体に異変が起きた。

ゆっくりとではあったが、幽霊体が宇野の肉体と合体し始めた。何重ものオーラ光が瞬きながら、宇野の肉体を飲み尽くすように重なっていった。《同一体》が誕生しようとしていた。

同時に、宇野は全身を激しく震わせ、

「うーむ」

と唸ると白眼を剥いた。

宇野は手足を宙に向けて差し出し、そして、口からはだらだらとヨダレを垂れ流した。

「こいつは、したりだ。宇野なんとやら、お前と俺様まは似た者同士、どうやらお前の心と俺様の心はどつかで相通じるところがあるようだぜ。それも、《悪しき心の部分》でな。俺様に分かったことを、お前に教えてやろうか。人間にはそれぞれ、星座の輪光《輝度オーラ》というものがあって、そいつは、星の数ほど種類があるらしいが、俺様とお前とは、同じ星の下に生まれた者同士、その確立は万分の一らしいが、ぴたっとお前とはその《輝度オーラ》が合ったようだ。俺様はお前の肉体を、ひとまず借りて、念願通りにこの世に甦りを果たすことにした」

にたっと、《幽霊男》が笑った。

「ふっふっふっ」

と声を漏らし、なお、宙を泳ぐようにしながら、合体運動を続けた。

横たえられた宇野の体は二重、三重の輪状のかたちになり、宙に半ば浮いた。全身はだらりとしており、もう、心ここにあらずといった状態を宇野は強いられていた。

その宇野の体に《幽霊男》は両手を差し出し支えようと、宇野の上体を自分の方に引きつけた。大きく《幽霊男》は口を開いた。長い舌をよろりと出した。その開いた口腔と

舌先からも透明色に透けた紫色のオーラ光が放たれていた。何かをしゃぶりつくすそうとでもするように《幽霊男》の舌が宇野の顔をひと舐めた。

と、舌先に搦め捕られたのか、宇野の顔がすーと消えた。その瞬間、宇野の顔が佐川の顔のものになった。

時を同じくして、宇野の肉体は完全に《幽霊男》の《幽体》と一つになった。宇野の姿かたちはそのまま《幽霊男》に変身した佐川と同一物となった。完全に、宇野の肉体は佐川の幽霊体に憑依され、佐川自身を表す《幽霊男》に変身していた。

その場から《幽霊男》は立ち上がるうとして、しばらくの間、手足をばたばたさせ、もがいた。

《生命エネルギー》が付与されたのか、紫色の輪光（オーラ）が全身から強く立ち、そこに、新たな生命体が生まれようとしていた。

と、その時、オフィスにいた根本助教授と矢萩助手が作業の進行状況を確認するために、このエンバミング・ルームを訪れた。

エンバミング・ルームの扉が急に開けられた。外からの光が、真つ暗闇のエンバミング・ルームに一筋、射し込んだ。

途端に、宇野に取り憑いていた《幽霊体》はその外光に邪魔され消滅した。

その場には、ぐったりとし、タイルの床に横たわっている宇野がいた。まだ、気を失ったままだった。

「長時間の作業だ。疲労が限界に達したのだろう。一時的なものだと思うが、おい、矢萩くん、この男を介抱してやれ」

と、根本助教授が矢萩助手に命じた。

わざわざ、診察するまでもなく、直ぐに、宇野は回復し、うつすらと目を開けた。

自分に何が起きたのか、まだ、分かっていないような顔付きをしていたが、宇野は正気に戻り、自分で立ち上がった。

「エンバミングの作業工程は全部終了したのか？終了したのなら、直ちに、この男の死体を冷凍庫のある室の方に運んでくれ」

根本助教授が言い、宇野が頷いた。

オペレーション・テーブルの上に横たえられているのは、まぎれもなく、死刑囚佐川洋次郎の死体であった。欠けた眼窩部分も修復されていて、見た目は、その死体の顔はきれいな状態を保っていた。肌の色も生色に近く、顔は穏やかな表情をしていた。

「ここまできれいにやれるとはエンバミングの技術も大したものじゃないか。この男、まだ生きてるように見えるよ。われわれの献体目的にもこれなら十分に適合しそうだな」

移動用のチャータートラックの台の上に、宇野が死体を乗せ替えた。死刑囚佐川洋次郎の死体は特別に用意した遺体収容冷蔵庫に収められた。

急速冷凍装置付きの冷凍庫で、三日後に死体は取り出される予定となっていた。

そのあとには『バーチャル一号計画』のプロジェクトが待っていた。

それまでの三日間、死刑囚佐川洋次郎は零下十五度の寒さの中に身をさらすことになった。しばしの間の眠りに就いたのであった。

第二章 愛の陰影

1

「わたし、何だか、淋しいわ。ここがすべて、撒収されてしまうなんて。色々な思い出があるんだもの。この場所には小さい頃、わたし、足を踏み入れて……。でも、初めて中に入った時はとっても驚いたわ。あの時はたまたまこの地下室の扉が開いていたのよね。それで……」
羽村愛香があたりを見回しながら矢萩英輔に言った。二人は矢萩家の敷地内にある解剖資料館に向かっていた。

この解剖資料館は、数ヶ月内に撒収され、標本類の一部は東上大学の医学資料室に収められる手筈となった。それで、往時を懐かしみ、愛香の申し入れで、この日、二人は解剖資料館に足を踏み入れることとなった。

愛香はいつもは地味なブラウン系の口紅なのに、今日の口紅はラメ入りのモーブパール、愛香の唇は鈍く光って見えた。

ちらと、横顔を窺った英輔の目には、愛香の服装の方も気になった。

この日は、黒の羽毛で襟元が飾られたボア仕立ての黒いロングドレスを愛香は着ていた。シルエツトはぴったりのボディ・コンデンシヤスで、黒い水玉の小さな地模様がその生地にはあしらわれていた。

そして、ロープタイプの、長い真珠のネックレスを愛香は着けていたので、英輔は、いつもと違う印象を愛香に対して持った。

おしゃれの中に、自己主張が秘められているような黒を主体にしたコスチュームだった。英輔を寄せ付けられない何か内に秘めたものを、愛香はこれらの装いで表現しているか

のようだった。どことなく、愛香にはよそよそしさの感じがあり、英輔はそのことを敏感に感じ取っていたのだった。

それに、わざわざ持参し、愛香が手にしている一輪の白ユリの花のことも、英輔は気になった。今から、解剖資料館に足を踏み入れようというのに、その花は不用のものと、英輔の目には映った。

二人の間では、白ユリの花を愛香が持参したことで会話はあったのだが、愛香は小さく鼻先で笑ってみせただけだった。

深い秋の気配が忍んでおり、屋敷の枯れた芝の上に、細い枯れ枝の影がいくつも伸びていた。二人は庭の隅にある解剖資料館の階段口の前に立った。

上着のポケットから鍵を取り出したあと、英輔は背に添うようにして立っている愛香を振りかえった。愛香の視線は遠くに投げられているようだった。それも、少し、眠い感じで、虚ろさが表されていた。

どこか、甘やいだ表情にも見えた。

英輔はやはり、普段とは違う印象を持ったが、声が掛けられず、そのまま、カンヌキ錠の鍵穴に鍵を差し込んだ。英輔の背に、ひっそりと愛香は従っていた。

鉄扉を開いたあと、二人は館内に入った。

一つだけある採光窓からの明かりが、地下室内を薄ぼんやりと映し出していた。その窓は地上に通じる階段に面して作られていた。

もの言わぬ空間―地下室に展示・保存された解剖標本類がほこりをかぶった飾り戸棚の奥でいまでも眠っていた。

壁面に沿って、およそ、数百種の医学解剖標本がこの場所では保存されていた。ここは英輔の祖父で、解剖医として知られた矢萩道太郎が個人で構えた『私蔵標本館』であった。その業績を表す貴重な標本類が数多く集められていた。

持参した一本の白いユリの花を、愛香が傍らにあった陶磁の花瓶を見つけ、一輪差しにして活けた。細くて、美しい愛香の手指がひらめくように動いた。

大輪な上に、薄い明かりだけの場所だったので、一際、その筒型の花瓶に差された一輪の白いユリの花は映えた。

「……水がないんだから、そのままじゃ、ユリの花、涸れてしまうよ」

と、英輔が控えめの口調で言った。

「あら、いいのよ。だって、ここは、死者たちが眠る墓場、涸れた花がお似合いかも知れなくてよ。きれいなお花と言っても、やがては涸れていく運命にあることだし、そう、こうやって、つかの間、ぱっと大輪の花を咲かせるのも、いつときの夢を見ているようで、いいんじゃない。わたしはそう思うようにしているの」

愛香の言葉の意味を、英輔は図りかね、頭の中で反芻した。その言葉の意味合いに相応しい場所であることには違いなかった。

これまでの愛香との付き合いを通して、英輔は愛香の性向のいくつかを見てきた。自分の美しさに酔い痴れているようなところもあり、愛香にはナルシスト傾向があった。そのことは、愛香自身も認めていて、自ら、愛香はナルシストであることを口にしたこともあった。白いユリの花に自分をなぞらせるのも、その性向の一つかと、英輔は思った。

ちらと愛香の横顔を盗み見ると、モーブパールの口紅が鈍く光った。パールの色合いの部分だけが浮き立ったようだった。どこか、愛香の横顔は英輔には妖しくも見えた。

二人は、黙ったまま、歩を進めた。

かび臭さに混じって、どこかからか、ホルマリン臭の匂いも伝わってくるかのようだった。特に、道太郎は乾燥標本作りに心血を注いだので、愛香の涸れた花云々の文句にもそれなりの意味はあったのである。

乾燥標本とは、肺臓組織、脳組織、肝臓器、脾臓器、脾臓器などの各内蔵部を、ホルマリン処理をしたあと、軟部組織を時日をかけて、乾燥物としたもので、医学標本としては貴重なものだと言えた。

乾燥した分、各組織は萎縮しており、黄色味を帯びていたが、人体標本であることには変わりはない。

道太郎は生体に近い色とかたちを医学徒たちの教材として残すために、それなりの工夫をした。標本となった軟部組織の血管洗浄をし、化学溶液、色素の注入作業を経て、実物に近いものにするために、標本の一部にはペンテイングを施した。

また、乾燥標本では表面だけしか観察できないので、道太郎は合成樹脂を用いて、各臓器を横に切断する水平断仕掛けの精度の高い標本も作った。

溶かした合成樹脂を膜にして、切断面の臓器を密封する方法だった。これだと内部の血管組織、神経組織なども、観察可能なので当時は学界でも評判となった。

ふと、一步、二歩、先を歩いていた愛香が振り返り、英輔に言葉を掛けた。

「わたし、英輔のおじいさんと、とても仲がよかったのよ。いまでも、初めて、この地下室に入った時のことを思い出すわ。あれはたまたまのことだったんだけど、この部屋の扉が開いていて…」

前にも愛香から聞いた話を、往時を懐かしむように、愛香が英輔に語り始めた。

愛香が五歳で、英輔が八歳、今から十八年前の時の話である。隠れんぼをしていた二人は、英輔が鬼役、愛香は隠れ場所の一つに地下にある標本室を選んだのだった。

この場所には、ホルマリン浸けにされた臓器類が大口の硝子びんに収められて保存されていた。それらのいくつかを、その時、愛香は目にした。

英輔も愛香がこの秘密の場所に足を踏み入れたと知ったが、そこは禁断の場所、両親からは祖父が仕事中は地下室に入らないと言われていたので、英輔はその時は愛香を探すのを止めた。

祖父はこの時、人の気配に後ろを振り向いた。愛香が怖がってはいけないと思い、祖父はやさしく愛香に声を掛けた。「お花だって涸れるだろ。きれいな花を咲かせていても、花だって小さな命をいつか終える。それじゃ可哀想だから、いまは、次のきれいな花を咲かせるために、わたしが花の種作りをしているんだよ。ほら、お花の種だって、人間の種だって同じことさ。わたしはきれいな花を咲かせるのが仕事でね。いまは一度涸れてしまった人間をもう一度生き返らせてあげようと思って、次の花を咲かせるお仕事をしているところなんだよ。どうだ？いい仕事だとは思わないかね」祖父はそのようなことを言い、その時の愛香の緊張感を解くよう努めた。

うる覚えの話だが愛香はおおよそ、そのような出会いのヒトコマを記憶していた。それから、何度か、この地下の仕事場に英輔と愛香の二人はこっそりと顔を出すようになった。幼い二人だけのちよつとした《秘密話》を二人は大事にしてきた。

将来は医業に就くであろう英輔のためにも、道太郎は少し得意気にあれこれと標本類についてうんちくも傾けてみせた。そのうちのいくつかの話は愛香の脳裏にも刻み込まれた。

「あれがわたしのお気に入りのお気入りの標本、英輔もよく知っているコノハズクちゃん」
愛香が薄暗い片隅を指さした。

横板だけが組まれた標本棚には雑多なものが乱雑に置かれており、その空きの場所に体長二十センチほどの一体のフクロウの剥製が飾られていた。

つかつかと歩み寄り、愛香が久しぶりの対面を果たした。

コノハズクの幼生で、褪せてはいたが羽毛が黄褐色で特徴があったので、このフクロウのことは英輔もよく覚えていた。外光がぼんやりとはあったが、一筋漏れ入っていて、コノハズクの姿を映し出していた。

林の中でハヤブサに襲われ、傷ついた、生まれて間もないフクロウの子供を、祖父が見つけた手当をしてやったのだが、結局、傷が深くて死んだ。これらの経緯については英輔も知っていた。

愛香と二人で介抱をしたことがあったのだ。愛香が余りにコノハズクの死を悲しむものだから、祖父が得意の技を用い、その時、コノハズクを剥製にしたのだった。

「わたしの心の中では今も生き続けているのよ。コノハズクちゃんは、とっても可愛いフクロウの赤ちゃんだったのだから。剥製になってからだって、わたし、何度も、胸に抱き止めて、わたしの体温で暖めたりしてあげたんだから。それでね。クロロホルムの匂いも少しはわたし、好きになったのよ。それから、正直な気持ち进行を言うからね。コノハズクちゃんが元氣になって、大きくなってしまったら、森へ帰ることになるのかしらと、わたし、心配してたの。おじいさんが剥製にしてくれて、その心配はなくなったけれど」

愛香は手を差し伸べ、その小さな剥製を手元に引き寄せた。

目の水晶体部分の代わりに、特別に作らせた模造品の眼球が剥製には嵌め込まれていた。黄色の眼球体に黒目部分が点じてあり、この剥製品は本物そっくりの出来だった。

往時を懐かしむように、愛香はしっかりと、自分の胸でコノハズクの剥製を抱き締めた。うっとりとした顔付きになり、

「ふ、ふう、ふっ」

と、甘いだ声を出し、羽毛に頬を擦り寄せた。しばらくはこの剥製品と愛香は戯れた。一種のエクスシーを感じ取っている顔で、英輔には愛香の仕草は少し異様に思えた。稚なさも、その行為にはあるのだが、うっとりとした顔つきには大人の女の表情も窺えた。

それに、もう一つ、英輔が不審に思ったことがあった。この地下室にある標本類にはもう何年も手を触れていない。それで、ほこりが溜まっているはずなのに、コノハズクを愛香が手に取った時、あたりにはほこりが立なかった。いちばん、英輔が心を配ったのは、愛香が着ているロングドレスの胸のあたりが汚れないかということだった。

だが、愛香は気にしているふうではなかった。愛香が立っている場所のあたりには、

一筋、こぼれ入った明かりが漏れていたが、コノハズクからの埃は立っていないかった。
(もしかしたら愛香は前にも、一人で、この場所に入ったことがあるのか?)

英輔がそう思ったのには、それなりの理由があった。今回、標本類が他に移管されることを知らせた時もそうだったが、前々から愛香は『私蔵標本館』には興味を寄せていて、データの最中でも、『私蔵標本館』の標本類については何回か話題となったことはあった。

今回の移管をいちばん残念がったのも愛香だった。それから、この剥製品に似合う保管場所を探してくれと、英輔に依頼してもらった。

「ね、いいでしょう。移管場所が見つかったら、そこに、コノハズクちゃんの剥製は送ってくれる?後日、その件については連絡するわ。再会するまで、コノハズクちゃんとはしばらくはお別れ。それじゃ、コノハズクちゃん、ちよつとの間だけ、さよならね。いい子しているのよ」

そう言い、愛香はコノハズクに軽く口づけをした。ロープタイプの真珠のネックレスが愛香の胸のあたりで揺れ、鈍く光った。

「愛香は小さい頃から、そのコノハズクが好きだった。いまも好きっていう気持ちはわかるけれど…」

「あら、コノハズクちゃんも、死体の一つには違いないけれど、いつまで経っても、この可愛さは変わらないわ。いまだって、大好き。ね、一つだけ、わたしの秘密を教えてあげましょうか?何回か、わたし、大きくなってからも、一人で、ここには入ったことがあるのよ。どんなきっかけか、忘れたけど…。そうそう、あなたのおじいさんに、遊びに来たい時はいつでもおいでって、鍵をもらったつんだった。それで、鍵をわたし、大事に保管していて、こつそり、何度か、ここには遊びに来たことがあるのよ」

「…それって。何だか、変だよ。そんな秘密って。ぼくの知らないことだ」

「秘密って?わたし、コノハズクちゃんに会いたかっただけ。それだけのことよ」

愛香はそう言うのと、元来たルートをたどり、歩き始めた。左右の壁に沿って、脳組織標本や臓器標本、それに、一部にはアルコール浸けにされた人体部分の標本類も置かれていた。

愛香の一步ごとに、場所によってはほこりが立った。英輔にはそのように見えた。さつき、白いユリの花を飾った一角で、一旦、愛香は足を止めた。

明かりが吸い込まれているそこは落ち込んだように暗くなっていて、ユリの花だけがその存在感を示した。

「やっと、ユリの薫りがしてきたわ。どこか、青臭くて、この、薫りって刺激的だと思わない?わたしだけのこれは思いたかな?」

そう、謎めいた文句を口にし、愛香は少し小鼻を鳴らせた。英輔もユリの薫りを嗅いだ。青臭いというよりは、匂いばかりが強烈で、英輔は余り、ユリの花は好きではなかった。

甘く腐ったような匂いも含まれていて、清純さのイメージがある割りには、存在感ばかりひけらかす花のようなにも、英輔には思えた。

愛香の横顔を英輔は盗み見た。
すっと通った鼻は小鼻の分整っていた。長いまつげがびくびくと震えた。
すぼめた口元にはやさしさがなく、口の端がきゅっと締められていた。
直ぐに、その場から愛香は歩き出した。英輔も愛香の背についた。

振り返った英輔の目に、暗い場所で一輪だけ咲くユリの花が見えた。残像を残すように、白い花弁が微かに開き立ち、一瞬、匂い立った。

何度か降り返る度に、白いユリの花は英輔の視野から遠ざかっていったが、その存在感だけは、はつきりと示して見せた。

何か、妖しい光景を、この時、英輔は見た思いがした。死者への飾り花？そんな文句が頭に浮かんだ。その分、英輔の歩みは愛香に遅れた。

花瓶には水がないのだから、ユリの花は直ぐに涸れるーそういう思いも重なった。

愛香のこの日の言動に英輔自身が惑わされているようなところもあったのだが…。

やっと、愛香の背に英輔は声を掛けた。

「ちよつと話があるんだ。おれの部屋に寄つて、二人でブレイクタイムつてことにしないか」
気の進まぬふうだったが、愛香が同意した。

2

英輔の部屋からは庭先がよく見えた。秋も終わりの季節であった。『私蔵標本館』のある近くに数本のビワの樹が植えられていた。

初夏に実をつけるのに、今頃、花をつける珍しい樹で、綿状の花芽をわずかに青黒い葉の間から覗かせていた。こんもりと、盛り上がるように葉は茂っており、折からの風に樹木全体がわさわさと揺られていた。

「穏やかではない話だけれど、死刑囚の献体が届けられてさ。献体を手したこと、秘密のプロジェクトが開始された。ぼくなりには、コンピューター・グラフィック操作の得意技を發揮できる場が与えられたんだ」

「その話なら、この前の時、聞いたわ。この前の話の続きがあるの？」

ソファに愛香は横座りの姿勢で座っていた。ロングドレスなのに、愛香の膝はしっかりと閉じられていた。

愛香の好きなシナモンティーが用意されていて、細い指先にカップの縁がからめ取られていた。目を見張るようにし、口元にカップを寄せると、愛香のふくらとした唇の真ん中あたりが盛り上がった。

そんな、愛香を見ているのが、英輔は好きだった。気品が備わっているので、一つ一つの動作がとても優雅に見えるのだった。

男と女のことに関しては、控え目な二人の関係がここでも示されていた。幼なじみで、二十七歳と二十三歳のカップル、まだ純なままの関係を保っており、この点では二人は少し世間の間合いから外れているようなところがあった。

「その秘密プロジェクトのことだけれど、わたしには秘密にする意味がよく分からないのよ。医学的に役立つ話で、それに、いずれは医学界に発表することなんでしょう。秘密にする意味がないように思えるけれど」

「それはさ。やはり、興味本位で世間からは見られたくないという根本助教授の意向が働いているんだとぼくは思うよ。それに、根本助教授は以前に医療ミス事件に関与して、大学内では、出世の見込みがない立場、どうしても、名誉回復の場が欲しいという事情もあ

り、今回は秘密行動をし、何というか、世間をあつと言わせたという気持ちもあるみたいなんだ。このプロジェクトが完成したあとは、アメリカのアリア科学医療財団にデータを提供し、提携して、その後の医療ソフト面での応用研究をする話もあり、プロジェクトが成功した場合は、ぼくもアメリカで研究生生活が出来る可能性もありなんだ」

「アメリカのアリア科学医療財団？わたしも、それって、一緒に行く可能性ありなの？」

「まだわからないさ。先の話だし。多分、そうなると思うけれど」

「それ、そう言うこともあるかも知れないって話なのね。わたし、一人きりにされてしまうこともあるんだ」

と、言つたと、愛香はちよつと考えるふうに、小首を傾げた。

やはり、ぼんやりした視線を宙で泳がせた。

秘密プロジェクトの理由説明をしたあと、そのプロジェクトの進行について、英輔が話を始めた。愛香には部分的だが『バーチャルマン計画』のことは前に告げてあったので、話の概要はすでに、愛香は英輔から教えられ、聞き知っていた。

「問題は一ミリ単位の精度の高さを保持できるかどうかなんだよ。いくら冷凍してあると言っても、やはり、人体だからね。各組織、骨格など、人によっても違うし、何しろ、初めての試みだから、冷凍体の切断作業をする時、失敗しないとも限らない」

「医学に身を捧げている英輔のこと、嫌いじゃないけれど。でも、生身の人間より、臨床解剖とか、今度のプロジェクトとか、死体と付き合うほうが、英輔は得意みたいで、わたし、嫌だわ」

「と、言われても、ぼくには…」

「いいの。気にしないで。そんな英輔って、素敵でもあるのよ」

「ぼくは医者だからね。それに今度のプロジェクトはぼくにとつてもチャンスさ。死刑囚の献体ということは、生体に近い状態の献体が入手できるわけだから、これは滅多にないことななさ」

「生体に近い死体ってどういう意味？」

「このへんも事情ありさ。アメリカなんかでは極く常識になっているんだけど、向こうでは葬儀の際には、死体をなるべく生前に近いかたちに戻すというエンバーミングという施術が行われていて、死後経過時間が短いほど、元の状態を保つことが可能なんだよ」

英輔は隣室のパソコンルームに愛香を誘った。放射線医療科では、コンピューターを駆使して、医業に就いているので、プライベートルームにも、一通り、パソコンや、その周辺機器が取り揃えてあった。

厚い茶封筒を手にとると、英輔はそこからエンバーミング施設の写真なども入った一枚のパンフレットを取り出した。英輔に取っては何の変哲もない資料だったかも知れないが、医学関係者でなければ、余り、見たくはない写真なども示されていた。

一部には、死顔も写っていて、首の静脈に管が突き刺されているものもあった。

が、愛香は余り動ずることなくその写真に目を通した。考えてみれば、ついさつき、医学標本室を訪れたばかり、話している相手も医師の英輔、これらの資料は愛香には特別の意味を持っていないかのようなだった。

「こういう施設があるのね。ほら、このパンフレットにはエンバーミングの目的は、

い出のひとこま(メモリー・ヒクチャー)を作るためにとあるわ。死者の美しさを演出することができるとも書かれているわよ。これだと、誰でも永遠に美しくいられるわけね……」

そのパンフレットの内容に興味があるのか、感心したふうに愛香が言った。無機質な施設の写真や、施術例の写真などに、ひとわたり、目を通したあと、愛香は何気ない顔に戻り、パンフレットを英輔に返した。テーブルの上に、英輔がパンフレットを置いた。

(愛香はエンババーミングのことにも、関心があるのか)

意外な気がし、英輔はそのことを、愛香に問い質そうと思った。

が、この時、英輔宛てに電話が入った。

もう一度、その間に、愛香は封筒の中身に目をやった。

電話の相手は東上大学の根本助教授だった。「はい。明日なら時間は空けておきます。はい、あ、そうですか」

しばらくは、英輔は電話を通して根本助教授と受け答えをした。予定事項の復習をしているようだった。

その間、愛香はひとわたり英輔の部屋を見回した。窓外の風景と、部屋の中の近い光景、そんなものを、交互に、ぼんやりと、愛香は眺めていた。かつたるように、視線を泳がせ、何度か、髪の毛を梳くようにし撫でた。

部屋全体の印象はどちらかというとな無機質だった。それから、つと、愛香は立ち上がると、元居た部屋に戻った。

部屋の隅に置かれている陶磁壺に無造作に投げ込まれたドライフラワーのバラの花束の中からその一本を取り出し、手に持った。このドライフラワーは、愛香が造り、英輔に贈ったものだった。

赤い色だったが、くすんだ暗赤色で蕾みのたちをしていた。その匂いを愛香は嗅いだ。何も匂いはしないということ確かめるような仕草だった。

やっと、英輔が電話を終え、こちらの部屋に戻って来た。やはり、浮かぬ顔で愛香は英輔を迎えた。

だが、そんな愛香のかつたるそうな目付きや、仕草には英輔は気がついていないようだった。少し、意気込み、電話の内容を愛香に熱っぽく語り掛けた。

「急速冷凍期間が終了して、いよいよ、断面のスライス作業が始まることになった。そろそろ、おれの出番さ」

「ふーむ、そういう話」

愛香は英輔の話には気乗りしていないふうの答えを返した。何か、別のことを考えているようだった。ソファの隅に座っていたが、愛香は居心地が悪そうだった。さつきから手に持っていたドライフラワーのバラの花をくるくると動かして見せた。

「それ、愛香がぼくのために作ってくれたドライフラワーだ」

「そうよ。深紅のバラの花束を、いつか、わたしのバースディプレゼントに英輔が持って来てくれた。そのまま、漉らしてはお花が可哀想だから、わたしがドライフラワーに仕立て直して上げたのよ。これはそういうお話し」

その話にも英輔は頷きを返しただけで、そのあとも、自分本位の話が続けた。

冷めたシナモンティーを愛香はただ見つめていた。それから、わずかに、口元で笑

つてみせた。気掛かりになつてゐるのか、もう、一度、愛香はコノハズクの始末について念押しをした。それから立ち上がる気配を見せた。「わたし、もう、帰るわ。リーダーの英輔が忙しそうだから、今夜は、いつものレッスン場で、誰か、リーダーを務めてくれる人を見つけて、気分晴らしのレッスンをしてくるわ。息が合えばいいけれど」

「そんなの。息が合うわけがないよ」

と、英輔が困り果てた顔で答えた。

「それから、明日は、一時間だけ、わたしに付き合つてくれるって、約束よね。瀬尾レオの動物写真展開催の招待状、これ、英輔の分よ。渡しておくわ」

ハンドバッグを開け、愛香は一枚の招待状を取り出すと、テーブルの上に置いた。

「ああ、わかつた。車で迎えに行くよ。それから…」

と、英輔が言い掛けた時、折悪しく、また、根本助教から電話が入った。本当は、ダンス競技会の地区予選の出場話は、現段階では無理なので、そのことを英輔は伝えようとしたのだが、気が重く、つい、言いそびれてしまったのだった。

電話の応対のために、やむを得ず、英輔は席を立ち、隣室に消えた。

その間に、愛香は一人、部屋を出で行った。いまは、誰もいない部屋のテーブルの上に、ドライフラワーのバラの花が、一本、所在なげに置かれていた。

3

明日からの予定では、英輔にはハードスケジュールが入つてゐた。しばらくの間は秘密プロジェクトの仕事中心で日々を過ごさなければならなかつた。

部屋に戻ると、愛香の姿はなく、英輔はがっかりした。ソファに所在なく座つた時、やつと、ドライフラワーが置かれてゐることに気づいた。手にとつてみたが、愛香が何かを訴えるために、その場に残した物とは、とてもものごと、思えなかつた。

テーブルの上に英輔は燻んだ色のバラの花を置いた。そのままにし、放置した。ひとまず、無関心を装つた。

「さよなら」の言葉もなく、部屋から出で行つた愛香の仕打ちに、英輔の気持ちは揺らいだ。何か、漠然としたものではあつたが、不安な気持ちにもなつた。

時刻を見ると、午後六時少し前だった。

晩秋の日が暮れるのは早く、西日がすくと落ちて、庭先にはもはや暗さを含んだにび色の光が忍んでいた。ふと、視線を泳がせた時、『私蔵標本館』のあたりに一塊り、群生してゐるビワの樹々が風に揺らいでゐるのが目に止まつた。

館の中に封じ込まれたままのあの白いユリの花のことが、英輔の頭を掠めた。

(あのユリの花は今も暗い地下室で妖しげな風情のまま花を咲かせてゐるのだろうか。愛香はなぜあんな場所に洩れてしまう花を持ち込み、わざとらしく飾り立てたのか。今日の愛香はどこか変だつた…)。

英輔は一人呟いた。愛香の真意がつかめず、英輔は部屋の中をあちこちと歩き回つた。

(拗ねているような態度を示すことは、これまでにちもあつたが、今日の愛香は妙によそよそしい態度を取つた。何を、ぼくに訴えようとしたのだろうか?)

ぼんやり、考えているうちに、二人が少年、少女の頃の日々のことが、ふと、頭の思い浮かんだ。もう、十年ほども前の、それらは出来事だった。

『私蔵博物館』の建物の陰で、愛香が十六歳の時、英輔は愛香の肩にそっと手を掛けたことがあった。

誰もあたりにはいない暑い夏の一日のことだった。八月の風が愛香の黒髪をくすぐった。前髪が愛香の額に掛かった時、英輔が手を差し伸べ、髪に触れようとした。

初めての、英輔からの愛のキスが実行に移されようという瞬間だったが、愛香はするりと身を交わした。

その時、愛香は咄嗟に英輔に告げた。

「ごめんなさい。汗臭いなんて。わたし、こんなじゃだめよね」

と、恥かしそうに言い、愛香は英輔を避けた。それから、同じようなことが続いた。

口づけの行為を避けるというのではなく、不用意な自分の姿を、異性の前でさらすのを避けるよう仕草を愛香はよく見せた。

余りの美少女ゆえに、いつも、周囲の者に注目されている自分に対して、愛香は過剰反応を示しているようなところもあった。

英輔が何となく愛香に近寄りがたい思いを持ち始めたのも、思春期を境にしての、この時期の頃からのような気もした。

学生時代から、何回かダンスレッスンのために、合宿気分でホテルで二人は同宿したこともあったが、そんな場合も、英輔は愛香に愛の気持ちを強く訴えることはできなかった。

いつか、そんなことを繰り返すうちに、不満の思いを示すためか、愛香が予約をキャンセルして、一人、ホテルを後にしたことも何度かあった。

恋人同士から、親も認めた婚約者にと、その後、二人の仲は進展したが、この関係は変わることはなかった。

男の欲望については英輔は医師だから、それなりに自分を分析する能力はあった。

一つは女性の体臭について、潔癖症とはいかないまでも、多少気にするところはあった。

よくない考えなのだが、英輔は性器特有の匂いとか、その形状の複雑さにかかなりのこだわりを持っていた。解剖学実習では、実際に死体のその一部を教材としていたので、余計に医師なるがゆえの特別の思いも手伝っているようだった。ある種のおぞましさの思いも頭のどこかにあった。

もう一つは、やはり、愛香のナルシストぶりに、愛香自身を英輔は美化して見てきたようなところがあり、そのことも、二人の接近を妨げている原因にはなっているようだった。

その点では、英輔自身、大人の男になりきれしていない部分も持ち合わせていた。

世間でよく言われる、いわゆる「大人になりたくない症候群(アドルトチドレン)」の英輔も若者の一人なのかも知れなかった。

そんな日常を過ごすうちに、英輔はいつかバーチャル世界で遊ぶことを覚えた。アニメーション作画された女ではない美少女をパソコンの画面に映し出される《仮想空間》で捉え、そして、自由に操ることで、自分だけのものにする楽しみを英輔は見つけ出した。

不安定な心理状態にある時は、特にゲーム感覚のその想像空間で英輔は遊ぶことが多かった。

この日も、愛香の唐突な行動のせいで、英輔は所在ない気持ちのままにパソコンのデスクの前に足を運んでいた。

しばらくは心を決めかねていたが、パソコンをONの状態にし、立ちあがり待った。

ホーム・ページのメンバーサイトに、パスワードを打ち込んだ。やがて、ダウンロードされた画面には、バーチャル少女「MIHANAちゃん」の見慣れた笑顔が映し出された。

インターネット配信によって、このところ、急速にファン層を拡大したSHADEもので、作画されたゲーム美少女が様々なポーズをとって、ユーザーの求めに応ずるという未来型のソフトプレイの一つであった。

全体の動きはパソコン画像なので、やや、ぎごちないところがあるが、それでも、画像には、かなりの現実感が用意されていた。

画面では「MIHANAちゃん」が英輔に視線を向けた。枯葉が散った公園の片隅にあるベンチに彼女は座っており、膝の上に一冊の英文字の本が置かれていた。

読書の手を休めて、彼女は英輔に視線を向けるとにっこりと笑った。

とつてもキークートな体型で、その上半身は黒いニット編みのドレスに包まれていた。

きらきら光るティアドロップ型の首飾り、ボトムは白いボーダー入り、パンツの裾野部分はレースアップされていた。すらりと伸びた細い脚先には黒のストレッチ・ブーツを履いていた。

「エイスケさん。MIHANAよ。また、二人きりで逢えるなんて夢みたい」

と、バーチャル少女が英輔に語り掛けた。この自分の名前を相手に記憶させるテクの操作は英輔自らが行った。肉声とはいかなかったが、自分の名を呼ばれることで、呼び掛けの声にはそれなりのリアリテイがあった。

小顔系の顔の造りで、一杯に、見開かれ強調された瞳、すつと通った鼻筋、そして、小さな目の唇、その可愛い唇にはベビーピンクのラメ入りの口紅が塗られていた。

そして、前下がりのベリーショートの髪型、どこか、その印象は愛香に似ていた。

もちろん、ビジュアル系の美少女に造りあげてあったから、現実感はやや欠いていたが、英輔にはバーチャル美少女は愛香にも見えていた。その《仮想空間の少女》を英輔が好きになったのも、多分、愛香に似通ったところがあったからであった。

笑顔を見せた時に、右の頬に浮かぶ片エクボもMIHANAの売り物の一つ、その点でも、愛香にそっくりであった。

MIHANAの履歴は、

さそり座、B型、ひとりっ子、文化系、習い事はモダンバレエ、身長は一五七センチ、サイズは八〇、五五、七九というのが紹介されているMIHANAの体型であった。

その体型、趣味や、そして、生まれ月の星座なども、愛香とはほぼ一致していた。

次のシーンにアクセスすると、彼女は一人部屋のダイニングルームで、英輔を迎えた。

赤いセーターに着替え、サンシャインイエローのエプロンを着けた彼女はかいかいしく見えた。食卓の上には、二つのワイングラス、重ねあわされた二枚の大皿が数組置かれていて、これからの二人だけのダイナーの時間が用意されていた。テーブルには装飾用のロー

ソクも飾られ、愛の灯がほのめいていた。

バーチャル世界に住む美少女に英輔が人知れず恋をするようになったのは、愛香との仲が兄と妹のような感情があり、大人の恋に発展しないせいもあったが、直接の動機は英輔自身がコンピュータ・グラフィックの専門家で、臨床解剖の臓器や、人体解剖図などをコンピュータ処理を行い、記憶保存する仕事にも従事してきたことで、いつか、精巧化した作画手法に注目、そのテクを採り入れるようになったこととも無縁ではなかった。

もちろん、この手法を学んだことが、今回の『バーチャルマン計画』の実施にあたり、英輔には大いに役に立った。

送りの誰かが、一週間に何度か、気まぐれではあったが、バーチャル美少女の映像をユーザーのためにアップロードしていた。本日の「M I H A N Aちゃん」の全画像を英輔はダウンロードし、メモし了えた。記憶させた画像は、マウスを自由に操作すると、自分好みの画像に作りかえることも可能だった。

英輔はしばらくの間、バーチャル美少女と食事タイムを楽しみ、そして、何回か会話を交わした。美少女はほとんど食事は口にせず、英輔のために笑顔を絶やさず奉仕してくれた。

画面は一変し、M I H A N Aは、眩い光芒の渦が巻く背景をバックに、とても、大胆なポーズを取った。メタリックシルバーのタンクトップの胸の谷間は、涙の雫のかたちに繰りぬかれていて、ちらと、胸のふくらみが見えた。左手には、花模様のついたシルバーのハンダール、へそだしルックで、黒いレザーのショートパンツを着用していた。とても、大胆なポーズで、男心を誘った。

次に、くると、後ろを向いた時、画面は一転していて、へそ出しルックのまま、M I H A N Aの下半身は縁をレースであしらわれたTバックスタイルのタンガに変わっていた。切れ込んだ股間のラインが強調されていて、とても、セクシなポーズだった。

英輔は息を殺して、画面に見入った。

そして、いつか、《着せ替えタイム》がやってきた。クリックを何度か、操作すると、お望みの画像が再現された。これらの画像は英輔の胸がいちばんトキめく、一瞬であった。

シャワールームに美少女は誘われた。脱衣所の大きな鏡の前にM I H A N Aは立った。

バーチャル少女は気を持たせるように、その身に着けているものを、一つずつ、とても、おしとやかな仕草で取り払っていった。やがて、均整の取れた少女の裸身が画面上にさらけ出された。

が、不用意な肢体をさらしている美少女の裸身は見るに憚りせず、英輔はその瞬間は、目をつむった。

浴室の擦りガラス越しに、英輔はぼんやりした視線の中で、美少女の裸身をそつと、覗き見をし、息をつめた。しなやかな脚線がシャワー音と共に、微かに動いた。三分ほど美少女のシャワertimeを楽しんだあと、英輔は次のお楽しみ画面に自分を招待した。

柔らかな光に包まれたベッドルームが、次に画面上には用意された。白いカーテンが窓際に掛かっていて、ふわりと風を含んでいそうだった。白い枕が二つ取り揃えられたベッドの上にはまだ誰もいない。サイドテーブルには、淡いクリーム色の傘のスタンドが置かれ、ピンクのガーベラの花が一輪挿しの花瓶に活けられていた。英輔はスタンドの明かりをパソコンを操作しパワーアップした。バーチャル美少女をこのベッドルームに招くために…。

少女らしい淡いピンクの胸元の抉れたネグリジェを身に着けたバーチャル美少女「MIHANAちゃん」が、未来空間から現れたように、数秒後、ベッドの上に斜め掛けのポーズで座った。

「エイスケさん、わたし、とつても会いたかった。MIHANAのすべてはあなたのものよ。わたしをエイスケさんの好きなようにして」

「ああ、わかったよ。ボクはMIHANAちゃんが大好きさ。MIHANAちゃんは、ぼくが考える理想の恋人さ」

その文句は独り言だったが、英輔は、そのバーチャル少女の虜となっていた。

「MIHANAの、もっと、キレイなバディも見てえ。エイスケさん、MIHANA、もう、脱いでもいい？」

「ああ…」

画面の上だけに存在する自分の恋人に、英輔は声を返した。

ネグリジェの胸ほどの紐が解かれた。まだ、女になり切っていないふくらみを保った乳房がこぼれ出た。だが、きちつと造型されているので乳房には固い張りがあった。ピンク色の乳輪だけは丸く描き取られていて、その輪郭はそこだけが、縁取られたように盛り上がって見えた。

「エイスケさん、わたしを好きなようにしてえ」

同じ文句を美少女が何度も口にした。

次の場面では、バーチャル美少女はふんわりとした質感のベッドの上に膝を折るようにして座ると、にこつと笑い、そして、しなやかに伸びた細い脚を内側にすぼめてみせた。これからが、《着せ替えタイム》の本番となるのであった。パソコンを操作し、カメラパレットを開いた。四分の一に切られた画面の左隅に、英輔は何種類かの下着を選択、表示をした。前部分にチャックのついたベイビーピンク色の刺繍入りのショーツを英輔は着衣データの中から選んだ。マウス機能を器用に操るとバーチャル美少女の下着は英輔が指定したものに変わった。

「エイスケさん、エイスケさん…」

とだけ、バーチャル少女MIHANAが、英輔に声を掛けた。大きく見開かれた瞳がキラリと光り、小さな口元がすぼまった。いかにも作画的だったが、それなりの臨場感があった。英輔は次の刺激的な遊びのステップに入った。直接に手を下さないのに、マウスの操作だけで下着がふーと消えた。翳ったように薄く描かれたアンダーヘヤーの三角地帯がそこには表示された。英輔はその少し嫌らしく見える翳りの部分をマウスの操作でフェードアウトさせ、アンダーヘヤーをすべて、除去した。無毛地帯がそこには示された。

そのあとには、縦筋だけが印されたピンク色の割れ目だけが示された。しばらくは、そうやって、咲き切れぬままのツボミのかたちを確認したあと、「ふー」と、大きく息を吐き、英輔はインターネットを切った。

いつも、英輔の遊びはそこまで終わった。

もっと、過激なプレイが画面上では繰り広げられることは知っていたが、英輔にはこれ以上のバーチャル画面は不要であった。

美少女のまま、手つかずのまま、バーチャル美少女MIHANAと英輔は接してい

たかった。MIHANAは英輔の思いのままになるバーチャル少女だったのだ。

その想いは愛香との付き合い方ともどこかでつながっているようだった。これらのことが現実感を欠いていることは、彼自身にもわかっていたが、男として、成長しきれぬまま、英輔は今日まで来てしまったようだった。

女性に対しての臆病な気持ち、それは、愛香の美しさを犯すことのようにも、英輔には思えている面もあったのだ。

カーテンを閉めようとして、英輔は窓の外を見た。とっぷり暮れて、『私蔵博物館』のあたりも、すっかり、闇に包まれていた。

やはり、闇の中に閉じ込められた一輪の白いユリの花の残像のことが、英輔の頭を掠めた。英輔は「ふー」と息を吐いた。

4

二時間だけの約束だったが、英輔はこの日、愛香に付き合った。瀬尾レオの動物写真展に向かうため、東京・銀座の画廊を二人は目指した。英輔が車のハンドルを握りながら、愛香に何かと話し掛けた。

「今度の冬の山ごもり前に、瀬野レオは写真展を開いたってことなのか。と、言ことは、また、今年の冬も彼は雪山にこもるってことになるんだ」

「そうよ。昨日の夕刊の記事に、峻厳な冬山に取り組む瀬野レオって紹介が出ていたわ。可愛い動物写真がこれまでは売りだったけれど、結構、世界でも評価される作品もあるのよ。きつと、英輔もそんな彼の写真に心を引かれるかも知れなくてよ」

瀬野レオは中堅の動物写真家として、マスコミでも少しは名を知られていた。名が出たのはここ数年前からのことだが、その頃から、愛香は冬山を背景に撮られた小動物の写真が気に入りに、すでに、何枚もの写真を手に入れていた。

それらの何枚かは英輔も目にしてた。

実際に展示会場に足を運ぶのは今日が初めて、英輔はこのところの付き合いの悪さを何とかしたいと思つて、この日は愛香に同行した。車を駐車場に停めてから、二人は少し、銀ぶらをし、裏辻にある展示会場に向かった。

「動物写真のよさつて、わたし、二つあると思うの。可愛い表情の写真と、普段では見れない瞬間、瞬間の動きの写真、どちらも、わたしは好きよ。特に、最近、瀬野レオは新聞でも紹介されているように、とても、厳しい状況で、いい作品をものにしてるのよ。そんな先生って素敵だわ」

「作品を見てから、ぼくの意見は言うよ」

一人、生き生きしている愛香に、英輔は戸惑った。口紅は今日もラメ入りのモーブパールで、パール色が目についた。それに、愛香があまり褒めるものだから、瀬野レオという人物に対して、英輔は嫌な思いもあわせて持った。

展示会場のあるビルの一室を二人は訪れた。やや奥行きのある会場の両側の壁に、およそ、三十枚ほどの写真が展示されていた。

会場には、五、六人の訪問者がいた。

「新しい作品を見る時って、胸がどきどきするものなのよ。先生の新しい魅力が発見できそうで」

ここでも、愛香は心を弾ませるような文句を口にした。

愛香が知ったふうに英輔にいくつかの作品の解説を試みたが、英輔は生返事をしていただけだった。

「先生に紹介しましょうか」

「いや、いいよ。そういうのぼくは苦手さ」

英輔は愛香の申し出を断った。それで、愛香は英輔を残し、受け付け裏に用意された小休憩場に一人向かった。会場からも見える場所で、何人かが、瀬野らしき人物を取り巻いて談笑していた。

ちらと、英輔は視線を投げたが、無関心を装い、動物写真に目を転じた。

全紙版の横長サイズにトリミングされたフクロウが翼を一杯に広げて飛翔している白黒写真に、英輔は対した。まん丸の顔に、大きく開いた目、そして、横にほぼ一直線に伸びた翼とても、迫力のある写真だった。一瞬を捉えた極限の作品とも言えた。

連作作品の中にも優れた写真があった。白い雪野に記された野ウサギの点々とした足跡が、手前から奥へと伸びていて、途中で、二つに分れていた。解説がついていて、敵から身をくらませるための『止め足』で、ぴよんと横っ飛びして別の足跡を作る野ウサギの知恵と、その足跡のことは記されていた。

アップ写真では、野ウサギが餌を求めて、木の新芽を貪り食っている写真とか、利き足の後ろ足を蹴って、小さな崖を巧みに、ジャンプして越えようとしている姿などが捉えられていた。愛香の言う通り、かなりの時間と、ねばりの精神が発揮された結果の、これらは作品と言えた。

一通り、見終わった時、英輔は小休憩室の方をみやった。背を向けた愛香と、こちら側に顔を向けている瀬野の二人だけが、ソファで向かい合っていた。気のせいか、瀬野の視線は英輔に向けられているかに思われた。サングラスにあごひげ、山男の印象はあったが、いかつい感じはなかった。

（うん？どこかで見掛けたような顔だ）

ほんの一瞬のことだったが、英輔はそんな感想を持った。

誰とはこの場では思い浮かばなかったが……

親しげに話し込んでいる二人に遠慮をし、英輔は一度見た作品を見るために、二人に背を向けた。だが、英輔には二人の関係が気になった。ちよつとした嫉妬感情もあって、何となく、気持ちが悪く着かなかった。

数分後、やっと、愛香が会場に戻って来た。新たに、何人かが会場を訪れた。

やや、込み合ってきたので、愛香も瀬野のそばを離れたようだった。

結局、英輔は瀬野とは、直接、口をきくことなく、会場をあとにしたが、去り際に、瀬野がサングラスを上げるようにして取り、会釈ともつかぬ仕草をし、英輔と愛香を見送った。目線と目線で、愛香と瀬野は挨拶を交わしたようだった。

が、その時、英輔は瀬野の眉間に一筋、刻まれた立て皺に気づいた。やはり、どこかで見えた顔だと英輔は思ったが、即座には答えは出てこなかった。ただ、英輔は首を傾げた。

そんな英輔の関心をそらすためか、会場を出た時、愛香が英輔の背に語り掛けた。

「いちばん、英輔の心に留まったのはどの作品？」

異常なほどに、愛香が浮き浮きしているのが、英輔にはわかった。声に張りがあった。

「ああ、あの、フクロウの翼を一杯に広げた作品かな」

「そうよね。あんな写真、ふつうじゃ撮れないわ。ほんの一瞬のシャッターチャンス、あれって奇跡に近い写真よね。凄いことだわ」

「一冬、山にこもっていても、あれだけのものは撮れるとは限らない」

「あの作品が、今回はいちばん、評価されたみたいよ。わたし、瀬野レオの違った一面を見たような気がしているの。とつても、あの人、魅力的だと思わない？」

「ぼくとは別の世界の話だけれど、一枚、一枚の作品はそれなりに素晴らしかったよ」

二人はひとしきり写真評をしたあと、駐車場に向かった。英輔は大学病院に勤めに出るので、このあと、愛香を家まで送る予定にしていたが、愛香は車には乗らず、一人、銀ぶらをしながら帰ると言い出した。

それから、別れ際に、英輔に不満をぶつける文句を、愛香は口にした。

「わたし、英輔が忙しそうだから、一人で、あれこれと楽しむためのプランを立てているの。これからはお買い物、それから、わたしの得意な山スキーにも、この冬は挑戦したいし、その手配もしなくちゃ。ね、英輔、山スキーの方も、わたしと付き合ってくれる暇はないんですよ。でも、わたしは平気よ」

それだけ言うと、愛香はその場から、踵を返した。車に乗り、エンジンを掛けた状態だったので、英輔はそのまま愛香を見送った。

その日が、愛香と会う最後の日となることも知らずに…。

運転席から、英輔は手を振ったが、愛香は振り向くことはなかった。ちらと、英輔は愛香の後姿を目に止めただけだった。

5

J E ステーションの特別室では、今日も「バーチャルマン計画」の細密な作業が行われていた。冷凍体は首から上と、胴体、そして、下半身の三つに裁断された。

そのあと、特殊旋盤で一ミリ単位で輪切り状にされ、透明の亚克力製の固定板に封じ込まれた。また、断面部の隙間部分には青いゼラチンが流し込まれていた。これはデジタル写真化をする時、青いゼラチン部分が抜けて空洞となるので、その作用を利用したものだ。撮影可能な状態にしてから、デジタルカメラで一枚ずつ撮影をする手順が取られていて、この撮影作業に、矢萩英輔は携わっていた。

全部で一千七、八百枚、気の遠くなるような作業量であった。冷凍体のスライスされた断面は、それぞれが各部位によって違ったが、大小の差こそあれ、おおむね、赤い肉の部分と、白い脂肪部分とに別れていた。

英輔は流れ作業の一つとして、自分の仕事をこなしていた。亚克力ボードに閉じ込められた一枚、一枚の標本体は、いまの英輔には無機質な物体でしかなかった。

午後の時刻、英輔宛に、愛香から電話入った。わざわざ、この秘密の作業場に連絡

を入れてくるのは愛香としては珍しいことであった。この前、瀬野レオの写真展に二人で出掛けてから、三日が経過していた。

「取り込み中だよ。でも、愛香の声が聞きたくなっていた頃だ」

「お邪魔よね。きっと。英輔に頼んでおいたあのコノハズクちゃんの話だけれど、英輔のいるJESテーションに、わたし、コノハズクちゃんを預けようと思ったのよ。いい、アイデアでしょう。そこだって、言ってみれば、死体保管所のようなものだもの」

「それはいいけれど、ここは、博物館でも何でもないよ。どうかな」

「でも、剥製の一つや、二つ、展示しておいたところで、別に邪魔物扱ってことにはならないでしょう」

「だと思っけど、ここの責任者にも訊いてみなくちゃ何とも言えないよ」

「一時預かりでもいいわ。この前、英輔の部屋に行った時に見せてもらったけれど、あのパンフレットだと、そこはきれいなところに見えたわよ。あの暗い標本館よりはいいんじゃないかしら？」

「涸れたユリの花みたいになっちゃ、可哀想なものな。あの花はどうなったんだろう」

「何なの？英輔にしては珍しく、こだわっているのね。わたしのこだわり作戦、少しは成功したのかな」

「何がだ？こだわり作戦って何のことを言っている？」

「いいの。いいの。わたし、本当は変わったことをするのが元々、好きだったのかも知れなくてよ。コノハズクちゃんをいつまでもわたしが好きって言うのも考えてみれば変よね。よくはわかんないんだけど、あれもこだわりの一つかもね。ああ、それから、瀬野レオの写真展に行ってから、わたし、ちよつと耳にしたんだけど、英輔が気に入ったあのフクロウの写真にも、もしかしたら、からくりありなのよ。その、撮影方法でね。どういうからくりかはまだわからないんだけど。ね、こういう話って、面白いとは思わない？」

「おい、何を言っている？そんなこと。それで、愛香は何をするつもりなんだ？」

「別に。でも、ちよつと、興味を持っているところ。撮影方法のトリック、それがどんなものか知りたいと思っっているの、わたし。探ってみようかな。わたし、ヒマな人だし、時間はたっぷり、あるんだものね」

「馬鹿なことを。そんなこと、愛香がまじめに取り組むことでもないよ」

「それとは関係ない話だけれど、あさってには、わたし、山スキーに出かけるの。二人分、予約してあるから、よかったら、湯沢グランドホテルのいつもの部屋に、あなたも来ない？絶対、無理って答えが返ってきそうだけれど」

「うーん、無理を言わないでくれよ。どうも、ぼくがダンス競技会をすっぽかしてからは、愛香は意地が悪いな」

「ふふ、少しはね。それじゃ、コノハズクちゃんをよろしく。それを言うために、本当は電話をしたのよ。それじゃ、しばらくさよならなら」

「おいおい。さよならって何を言っている？」

「いいの。いいの。サ・ヨ・ナ・ラ」

意味ありげなしゃべり口で、さよならの言葉を告げたあと、愛香は一方的に電話を切った。受話器を握り締めたまま、英輔はしばらく呆然としていた。頭の中でサヨナラの意味

を探ろうとした。このような直接表現のかたちで、愛香が英輔に対したことはこれまでなかった。やはり、愛香の英輔に接する態度には変化が現れているようだった。

だが、いつまでも、愛香のそんな態度にこだわっている暇は英輔にはなかった。

その時、根本助教授がJ Eホームにやってきた。進行状態を聞き、作業スピードを早めるように、英輔に指示をした。

根本助教授はこのJ Eステーションの責任者でもある宇野にも細かい注文をつけた。

いつもは、英輔も宇野もほとんどの時間はそれぞれ別室で作業をしているので、顔を合わせることはなかったが、この時は二人は顔を合わせた。

宇野に対する英輔の印象だが、いつも、黙々とプロ意識に徹して仕事をしている男というイメージが英輔にはあった。

(どこかで見たような男、そう言えば、あの写真展で会った瀬野レオにも似ているところがあるようだ。額に刻まれた縦筋、宇野は仕事に熱中している時は、特に、その縦筋が深くなるように思える)

だが、姿かたちは似ていたが、宇野にはあごひげはなかった。それより、死体相手の陰気な仕事人という印象の方が強く、英輔は宇野に対しては、この時は、それ以上の特別の感情は持たなかった。

この宇野と英輔の二人は、これからの物語では、ともに、敵対する仲となるのだが、今の段階では、二人の間には、それらしき接点はなかった。

立場は違うが、同じ死体を扱う者同士、それを仕事にしているのが、今のところの二人の共通点となっているだけだった。

第三章 幽体復讐鬼

1

「月にむら雲が掛かっかけていて、どことなく生ぬるい風が吹いている。こんな夜は決まっていやなことがあるんですよ。仕事とは言え、やはり、執行場に行くには、いつも、気が進みませんね」

山浦看守長がぼそりと言った。

死刑執行場があるコナラの林を、山浦と、宇野俊光の二人が肩を並べるようにして歩いていた。枯葉も今夜は風に吹かれていず、枯木の枝先もそよとも動かなかった。

いつか、雲間から月が顔を出した。

暗い林がうつすらとした影を視野の先に広げた。一步、一步を進めると、二人の背後からのっそりと、影のようなものが、忍び寄った。地から湧いて出るのか、二人の影に寄りそうようにふつふつと、二人の一步ごとに、そのかたちを露わにしていた。

いつか、二人の人影と重なった。わずかだが、暗紫色のオーラ光がその人影から放たれた。長く、長く、影は伸び、一步ごとに、その影はいびつなかたちになった。

そのことに、二人は気づいてはいなかった。何者かの意志を示すように、その影は伸びたり、縮んだりした。

「死刑囚どもの生に対する執念というか、奴らは本当に《紫魂水》の効力を信じているのですよ。あなただけじゃない。妙な新興宗教の連中まで、その蘇りの霊水に興味を寄せて、何度か、この死刑執行場に足を踏み入れようとしたみたいです。そりゃそうでしょう。一攫千金、《紫魂水》が手に入れば、死人だって、蘇るかも知れないですからね。応分のもの、よろしく願いますよ」

いつものように、山浦が宇野に報酬を要求した。微かに、宇野が頷いた。

「それはそうと、あの献体になった男ですが、最初の目的通り、スライス状にされて、医学標本とやらに、生まれ変わったんですかね」

「ええ、そのように話は聞いています」

と、宇野が最少必要限のことだけを答えた。

「死んだあとまで、全身を切り刻まれるとは。しかし、この世に生まれ変わり、人間様の役に立てる分だけ、いいことをしたことに、あの男はなりますよ。もともと、あの男の罪状を考えると、何度、殺しても殺し足りませんがね」

山浦が平気で言い放った。

死刑執行場の建物内に二人は入った。暗紫色の人影も二人に寄り添うようにして忍び入った。

懐中電灯を頼りに、山浦が宇野を案内した。

直接、二人は執行場の地下室に足を踏み入れた。暗い地下室内のコンクリート床には、紫色の妖しい発光物体が煙のように這っていた。そのオーラ光は、二人の足元にまで漂って来た。じゅくじゅくと、液体様の霊水が沸き出していた。《紫魂水》を採取するために、宇野が注射器を取り出した。その宇野の顔が暗紫色のオーラ光に染まった。

首吊りの踏み板のある天井のあたりで、その時、「ごとつ」と、小さな物音がした。

幽霊現象でいうところの幽体が現れる時の叩音（ラップ）だったが、地下室にいる二人はまだその物音は聞きとっていなかった。

真つ暗闇の一階部分の空間では、その時、異変が起きていた。

生ぬるい風がどこからともなく吹き、執行場の高い天井からぶら下がっている首吊り用の締め縄がゆらゆらと揺れた。いまは、用がないその首を懸ける輪の部分は高い位置に止まっていたが、ロープの揺れとともに、するりと滑り落ちそうな気配をみせた。同時に、「ぎぎーつ」と、天井下にぶら下がっている滑車がこすれの音を発した。

異変は別の場所でも起こっていた。

まわりのコンクリート壁は暗い空間に呑まれたままだったが、暗紫色の影のような

ものが、微かに、投影し、その一面の壁で、何者かが、しきりに、蘇生するためのエネルギーを求めてか、横面の線状の影を何重にも重ね、その場所から何者かを生み出そうとしていた。

「ふおっ、ふおっ、ふっ、ふっ…」

風を呑むような、息を吐くような奇妙なノド声が発せられた。時折り「きし、きしっ」と、もののこすれを思わせる音も混じった。

そのモワレ状の影は、細胞が限りない増殖活動を繰り返す時のように分裂しながら、何かを食いつくし、そして、その動きを繰り返すうちに、次第に、その姿かたちを、露わにしていた。

初めに、黄濁色の光を放つ物体が、組成された。だらりと垂れたひも状のものの先に、その眼球と思われる濁りを帯びた黄色の物体が、ぶら下がっていた。左顔面とおぼしきあたりから、垂れているのは、目玉をつなぎ止める内直筋で、眼球はその先でつなぎ止められていた。いまにも、下に落ちそうな危うい感じで、影全体が揺れる度に、右に左に黄濁色の潰れたかたちのものは揺れていたが、そのうち、はつきりと、そのかたちを露わにしていた。ぶらぶらと、揺れているその気味悪い眼球を支え持とうとしてか、今度は両手のようなものが、壁からそろそろと、伸びてきた。手のかたちはしていず、暗紫色のそれは、やはり、輪切りの線状の物体で、一見したところでは、手とは判断はできなかつた。

「ふふ、ふあ、ふあ…」

息を吸い、吐き出そうとしているのか、先ほどから、しきりに、のどにつかえたような声を魔物とおぼしき者は発していた。

が、その声も、次第に、はつきりとしたものになった。それにつれ、壁に写っていた人影が壁から抜け出るように、暗闇の空間に、ふあーと浮き出てきた。次ぎに、片目が潰れた恐ろしい形相の男の顔が現れ出た。

やがて、人型全体もすーっと、壁を離れた。なよなよした感じではあつたが、明らかに、それは「幽霊体」を持った男であることがわかつた。四角い顔の輪郭で、あごの張つた男、右目はぎよる目で、凶悪犯の顔つき、間違いなく、その「幽霊体」の男は、死刑を執行された佐川洋次郎であつた。

数分後、「幽霊男」は、垂れたままの左目を眼窩に収めようとした。が、ぐにやぐにやした内直筋も、それにつながつた眼球も「幽霊男」の意のままにはならず、顔から垂れ下がった状態で、「幽霊男」は一步を進めた。

幽体（アストラルボディ）だけの人影だから、背後の壁や、建物の柱、首吊り道具なども、透けて見えた。

「俺様は生き返つたようだな。ふわふわしていて、どうも頼りない感じだが、この世とやらにいるのはどうやら間違いはないようだ。これはしたりだ」

「幽霊男」が嘯うそぶいた。

ゆつくりと、天井に顔を向けた。

潰れた左目と、もう一つの目を交互に動かし、「幽霊男」は自分が首を吊られたその首吊り用のロープをひとわたり見回した。手が動き、滑車から伸びたロープの一端を「幽霊男」はつかみ取つた。加重を掛けるおもし台と、そのロープはつながっていた。首を吊られ

た時のことを思い出してか「幽霊男」の口元がゆがんだ。あたりを見回したその目には、残忍な光が宿した。

「幽霊男」の目の先に、二つの足型が記された踏み板があった。一回転すれば、奈落の底、「幽霊男」は自分が死刑執行をされた時のことに思いを投げたあと、可細い手で首のあたりを撫でた。一步を進め、その踏み板の上に立った。

しかし、「幽霊男」の体重はゼロに近いのか、踏み板は回転せず、わずかに、上下に揺れただけだった。

だが、地下室にいた二人には、踏み板が揺れたのがわかった。何者かが踏み板の上に立った気配を二人は敏感に感じ取った。紫色の影とも光ともとれる何かが、すーと、天井の踏み板の隙間から届けられた。

ぎくつとし、山浦が踏み板のあたりに目をやった。この地下室に出入りしていると、何度か、このような異変には遭遇していたので、山浦は動じないふうを装った。

宇野はちらと踏み板のあたりに目をやったが、「紫魂水」の採取に余念がなく、すぐに、この現象を無視した。

「お前ら、俺様をわざわざお出迎えとは、ごくろうさまなことだな」

二人の頭の上から、押し殺した低い声が聞こえてきた。踏み板が、今度はぐらぐらと揺れた。姿かたちは見えないのに、その踏み板の上に誰かが乗っていることだけは一人にはわかった。

「俺様だと？誰かは知らぬが、この世に迷い出たな。ナムアムダブツ、ナムアムダブツ……」
山浦が必死になり経文を唱えた。

今度は、地下室内に異変が起きた。

外の風が吹き入ったように、地下室入り口の木製扉が勝手に開いた。

「ぎいーっ」

とだけ、音がした。

冷たい空気があたりに充ち、俄かに、コンクリート床の《紫魂水》が風になびくように、その扉の方向に向けて、紫色の炎を立てた。

ふーと、ローソクの灯が消えるかのように、《紫魂水》が吸い取られた。

地下室内が、真の真つ暗闇になった。

その時、何者かが、ふーと、扉に重なるようにし、その姿を現した。

2

「おい。俺様だあ、婦女暴行凌辱犯、世間ではちーと知られた佐川洋次郎のことよ」
弱々しい声ではなく、今度はしっかりと口調だった。

驚いて、振り返った山浦と、宇野の背後に、左目が潰れ、眼窩のくぼんだ怪異な面相の「幽霊男」が佇んでいた。空中に漂っている《紫魂水》を吸い込もうとしてか、「幽霊男」は大口を開け、胸一杯にこの場の空気を吸った。

なお、「幽霊男」の姿かたちがはっきりとしてきた。どうやら、《紫魂水》には賦活の力が備わっているらしい。そのことを「幽霊男」は知っているようだった。コンクリート

床から《紫魂水》が、吸われたこととも、この状況は関係がありそうだった。

「き、きさまあ、今頃、何を、血迷っている?」「へへ、ここへ迷い込むたあ、俺様もお前たちとは、縁があるってことよな」

「幽霊男」はにっと笑い、親しげに片手を差し出す仕草をしてみせ、動作の途中で、ぶらぶらと揺れている潰れた左目の黄濁色の目玉を握ると、その鈍く光る目の玉部分を山浦の目の前に突きつけた。

「うへえ、へえっ」

身をかわずようにしながら、何とも奇妙な声を山浦が発した。

「お前の下手な首吊り作業のお陰で、みろ、このざまだ。どうしてくれる?」

「どうしてくれると言われてもな。そのようになったのは、その、何だ。首吊りの重しを少し加減した。それもこれも所長から命じられていたからだ。お、おれのせいじゃない」

「それじゃ、聞か、誰のせいだ?」

「そ、それは、お前を献体にしようとした連中の、その、企みのせいというか…」

「名前を言え。俺を薬漬けにして殺したあの立会人の医者野郎か」

「そう。東上大学助教授の根本とかいう男だ。恨みがあるなら、そいつに言え」

山浦は、逃げ腰の姿勢のまま、「幽霊男」と、対していた。

その山浦の態度と対照的なのが、宇野だった。この執行場に「幽霊男」が現れた時はさすがに、びつくりした表情を見せたが、いまは、落ち着いた顔つきで、宇野は「幽霊男」の、言動を観察していた。

J Eホームで、宇野はこの「幽霊男」の死体に《紫魂水》を注入した張本人。佐川が「幽霊男」に変身したことには、宇野のこの行為が何らかの効用をもたらしていたのは事実だった。

初めて宇野の存在に気がついたように、「幽霊男」は、黄濁色の潰れた目を宇野に向けた。「俺様の分身、宇野俊光だな。いまは、この地下室にある《紫魂水》をわが幽霊体に吸収して、幽体を俺様はかたちづくっている。そのうち、お前の肉体も借り受けようと、俺様は思っている。そうだ。この機会に、わが幽霊体誕生の秘密をお前に解き明かしてやろうか」

「幽霊男」は、暗紫色の闇の中に立ちつくしたまま、その間の経緯を語り始めた。

透けた幽霊体の向こうに、開けはなれたままの扉が写っていた。風もないのに、蝶番が外れた扉のように、入り口の扉はばたんばたん開け閉めを繰り返した。

「それじゃ、恨み言を言わせてもらおうか。へへ、よくぞやってくれたよ。俺様の凍った死体はスライス旋盤機のノコギリ鮫の歯のような切断歯で、ものの見事にスライスにされた。

それで、その裁断面はご苦労なことに、一枚、一枚、写真撮影をされて、別に、俺様が望んだことでもないのに、医学標本とか言って、バーチャル体標本にされちゃった。馬鹿な話よ。確かに、佐川洋次郎はこの世に蘇ったが、百七十本余りのスライスラインの積み重ね人間、バーチャル人間にされて、空中に漂っているだけで、どこにも俺様自身は存在などしてない。あれは、医者どものオモチャだ。それこそ、バーチャルなんて、幽霊そのもの、ふわふわ空中に浮いているだけ。いい気なもんさ。好き勝手に首を吊られて、挙句に、スライス人間か。あんなものとは、俺様は関係ない。おあいにく様だ。俺様はほんものの幽霊に生まれ変わることができた。あらためて、この場を借りて、宇野に札を言わせてもらおうよ」

握手を求めるつもりか、「幽霊男」が宇野に右手を差し出した。尖った爪と、いびつな手のかたち、ゾンビそのものの気味の悪い手だった。宇野は手こそ差し伸べなかったが、口元に意味不明の笑みを浮かべた。「幽霊男」を恐れている様子は宇野は見せなかった。

「幽霊男」が話を続けた。

「人間様の体は三つの霊的物質から成り立っている。ま、これは宇野の頭の中にある考えを借りただけのことだが、一つは《幽体アストラルボディ》これは見ての通りの幽霊様の薄ぼんやりした体のこと。それに《心体フィジカル・ボディ》、これは読んで字のごとし、心そのもののさ。それから《肉体ボディ》これがなけりや、本当に人間様に生まれ変わった実感なんてなにもない。それで、もう一つ、肝心なことをもう一度、宇野には聞かせておくぜ。その何だ。俺様と宇野は心のどこかに似通ったところがあつて、一脈あい通じる部分があつてさ。《輝度オーラ》がびったり合つた。もしかしたら、多重人格とやら言う性格の一部を俺様と宇野は心のどこかに、隠し持っているのやもしれんな。もつとも、俺様には何も隠すものなんてない。隠しているとしたら、きつと、宇野だろうよ。お前の人間性とやらは、かなり、複雑なようだからな。おい、宇野、お前は一体、何を企んでいる？お前と一体になったことで、少しは俺様はお前の心の動きが読めるのよな。ま、その何だ。俺様と、お前は一心同体、お互い、これから運命を共にしてもらふことになるやも知れんな」

「それでお前は…」

と、宇野が口を挟もうとした時、いつかのように、半白の目を剥き、全身をけいれんさせると、宇野はその場に倒れ込んだ。

「ふふ、お前の肉体をしばらく借りるぜ」

「幽霊男」がそう告げた時、宇野は「幽霊男」に、憑依され、しばし気を失った。

「今度はお前たちの番だな。貴様も、あの、傲慢な玉木所長も、俺様の復讐を受けることになる。どんな方法がいいか、いま、考え中だが、お前はどんな恐ろしい処刑法がいい？下っぱ野郎だから、もし、望みがあるなら、聞いてやらんでもない」

「い、いのちだけは…」

「へへ、やっぱり、命が惜しいか。ま、しばらくはお前は生かしておいてやるよ。お前の生き血を吸うと、俺様の幽霊体が元気になるそうさ。その生き血の適合性とやらは俺様の幽霊体とはばつちり、他の奴とは違うようだ。お陰で、しばらくは、お前は命拾いができそうだつてことよ。《紫魂水》はお前の生き血にも含まれているのさ。俺様のエネルギー源として、生かす殺さず、お前は生かしておいてやるよ」

「は、はい。どうか、命だけは…」

「よし。それじゃ、この場に、あのけんつくばった死刑執行責任者を呼べ」

命じられた通り、山浦は携帯している非常呼び出し器のベルを押し、拘置所所長を呼び出した。

「執行場に異変あり、所長だけ来て欲しい」

と山浦は玉木に告げた。

「また、他愛もない幽霊話か。君のそのうろたえぶりからして、何を見たのかぐらいはわかるよ。わたしが一喝してやる。そのバケモノに言っておけ。いいか、所長が来るまで消えるでないとな」

相変わらず、強気な玉木所長のダミ声が闇の向こうから返ってきた。

3

「お前の顔を見たさに、俺様はこの世に舞い戻ってきたのよな。どうだった？この執行場につながる地下トンネルを一人で歩いて来る時の心境は？もしかしたら、もう、戻れないかも知れないなんてことは考えなかったのか？」

「馬鹿な。わたしは拘置所所長だ。死刑執行者のあの世行きの後始末にまで付き合っている暇はないんだよ。いいかげんにしろ。わたしに睨まれて、そのまま、消えた未練野郎は数知れずだ。わたしの目をみなさい。この生きている者の眼力に敵う者はいない」

さすがに、拘置所所長だけのことはあり、玉木所長は肝が据わっていた。

目の前には、見るからに恐ろしい「幽霊男」が立っていたが、玉木はかーっと、両目を見開き、「幽霊男」を見返すと、睨みつけた。

「そんな目をして威嚇してもだめだぜ。俺様の目ん玉はごらんの通り、ここの処刑台で、ひどい扱いを受けたものだから、片目が飛び出してしまった。貴様の眼力とやらも、ま、半分ぐらいしか通用しないってわけよ」

そう言うのと、「幽霊男」はへらへらと笑い出した。

口元がモワレ状になり、その残映を重ねながら、飛び出すようにして動いた。

ぽっかり空いた眼窩、そして、そこから垂れ下がっている潰れた左目、黄濁色の目玉が胸のあたりで、強い光を放った。

残忍そのものの目になった。

「さあ、処刑台がどんなものか、執行責任者としては一度は体験しておかなくちゃな。いい機会だとは思わないか。俺様が案内してやってもいいが、自分の足で処刑台に立つほうが、身のためでもんだ。その扉を抜けて、この上の処刑室に行けよ。付き添いが必要なら、同じ仲間の山浦をお供にしてもいいぜ」

「何をたわけたことを。おい、山浦、この幽霊野郎の言いなりになることはない。隣りには、あみだ仏のご本尊様も祀つてある。成仏できない迷い人には、ちゃんと、悟りの言葉を伝えて下さるだろうよ。一緒に、念仏を唱えろ。カンジザイボサツ、ギョウジンハンニヤハラミツタジ…」

玉木は内ポケットから、水晶玉の数珠を取り出し、握り締めると、般若心経の一節を唱え始めた。山浦も口でお経を唱えた。

「お経とやらが通じるのは現世だけのものなんだぜ。二本の足がちゃんとあるのに、歩けないなら、俺様が瞬間移動(テレポーション)の術を用いて、お前たちを移動させてやるよ。お二人とも執行室へどうぞ」

そう告げただけで、状況は一変していた。

地下室から、二人の体は移動させられ、執行室の処刑台の上にその身柄がそのまま移されていた。

その事態には気がつかず、それでも、二人はまだ一心に般若心経を唱え続けていた。

「いいかげん二人とも目を覚ましたらどうだ？ここは地獄の入り口、あの世はつい目

の前さ。どうだ？あの首吊りの縄、おれには血を吸う黒い大蛇に思えたが、お前たちには何に見えるかな」

「こゝこゝは？どうして、この場に？」

玉木が驚きの声を上げた。

「お前たちのここが公認の殺人現場つてわけだ。俺様のように、何人もの女どもを血祭りに上げた奴はまだしも、中には無実の罪で首を吊られた奴もいる。そいつらの無実を晴らしたい一心、怨念が、ここの《紫魂水》を生み出したという説もあるぜ。俺様はその《紫魂水》の恩恵を蒙つて、どうやら、この世に、蘇つたようだがな」

「幽霊男」は鼻のあたりをうごめかせた。

その怪異な面相にも、様々な表情があつて、それなりに、喜怒哀楽が表されていた。

いまは、得意満面で、あの張つた四角い顔が、二人の方に突き出されていた。もつとも、幽霊顔だから、ゆがむように動く口元とか、鼻のひくつき具合なども、気味の悪さは変らなかつた。

「さあてと、俺様がこの世に蘇つた理由だが、俺様の現世の犯罪歴は知つての通りの婦女暴行凌辱罪だ。俺様を裏切つた女がいて、こいつは殺し損ねた。まず、そいつを、血祭りに上げねばな。斉木加津子と言う名でさ。俺様がムシヨにいる間に、何人、男を食つたかだな。淫乱の罪は許してやるが、恋人の男とやつたあとなら、いつでも、俺様にやらせてやると言つた。ふざけた女さ」

「そんなこと、幽霊の身でやれるわけがない。この上、罪を重ねてどうするんだ？なあ、佐川洋次郎よ。成仏すれば、仏様はどんな罪人だつて、許してくださいさるつて話だ。悟りをひらいて、おとなしく、三途の川を渡る気持ちになつたらどうだ」

「それがお前のこの世で最後のお説教か。聞いてあきれれるぜ。俺はよ。俺好みの女がいれば、これからも、何人でも手にかけてみたいものだと思つているんだ。その悦楽の肉の歓びを知つてしまった奴は肉体の蘇りと共に、元の犯罪者の人格に戻る。当たり前のことだろうが。俺様の犯罪手口は知る人ぞ知るだ。いいか、女を捕まえたなら、両手両足を縛り上げ、完全に自由を奪つた上で、俺様は好き放題のことをやる。一度、お前たちに見せてやりたいもんだよ。散々、弄んでから、女たちは俺様の完全な所有物となる。俺様は乳首を噛みきるのが得意でな。へへ、その乳首を口に含み生血を吸う。やつと俺様はその気になる。真の快樂とは何か、お前たち知つているか。女がよがり顔になつて、俺様が射精したら、俺様はその精虫とやらの着床具合を、この目で、確かめたくなる。その時、俺様はどうすると思う？」

舌なめずりをしながら、「幽霊男」は、これだけのことを言つてのけ、恐怖にゆがんだ二人の顔を覗きこんだ。二人は「幽霊男」と、顔を合わさぬように目をそむけた。

なお、「幽霊男」はいい気になり、自分の猟奇趣味について、文句を列ねた。

「さあて、ぞくぞくつとするほど、身が引き締まつてきたよ。これからの毎日が楽しみになつてきた。好きなことがやり放題、なあーんたつて、幽霊の身だ。透明人間そのもの、俺様はどこにでも、神出鬼没つてわけよ」

「お前の好きなようにすればいいさ。頼むから、ここから出してくれ」

玉木が悲痛な声を引き絞り、告げた。

「幽霊様の特権を、この際、思う様、行使しなくちゃな。さあて、その前に、ちゃん

と俺様としてはケジメをつけなくちゃ」

そう「幽霊男」が告げた時、人手も使わないのに、天井の高い場所から、するすると、首吊りの縄が降りてきた。

二人はやつと目を開けた。目の上でぶらんぶらんと揺れている首吊りの輪を目にし、二人は思わず、首をすくめた。

「まずはお一人様ご案内だな。玉木重朗、観念して、踏み板の上に両足を揃えて置けよ」
「このわたしが…」

玉木は腰を引くようにし、抗らいの姿勢をみせたが、むだだった。

知らぬ間に、玉木は足型のついた踏み板の上に両足を揃えて置いていた。操られるままに、きちんと、足型に合わせて、玉木は両足を揃えて立つ羽目となった。

「それでよし。おい、山浦、お前は踏み板がぱたんと落ちる仕掛けのレバーを引く係りだ。いつものようにやれ。別に首に掛かる鉄のおもしは用いなくともいい。俺様なりのやり方で、こいつの首は締めてやる。じわじわとな」

「幽霊男」が玉木の直ぐそばの場所にやってきた。ひよろひよると、長い手が伸びてきて、首輪が手元に引き寄せられた。

死者の脂を吸った分、ノド輪に当たるその黒い革の部分は鈍い光りを放っていた。

「見ろ。ギトギト脂の分、この首輪には、怨念がこもっているぜ。無念の思いのままこのロープで首を吊られた者の恨みの分も、いまから、俺様が晴らしてやるさ」

玉木の首に黒い首輪が嵌められた。

首吊りの縄は、玉木のノド輪のあたりに、とぐろを巻いた蛇のように何重にも絡みついた。やがて、しっかりと、玉木のノド輪に、首吊りロープが装着された。

「や、やめてくれ」

「それが人間としての最後の言葉か。いつもはお前、偉ぶっているんだろう。人間にはどんな場合でも、尊厳というものがあるとか何とか。お前は、いまわのきわに、そういう説教を垂れるそうじゃないか。どうだ？お前の言うその尊厳とやらがどういいうものか、いま見せてもらいたいものだよ」

「幽霊男」が楽しみの文句を口にした。

急にがたがたと玉木が全身を震わせた。

暗い闇の中、玉木の顔が紫色のオーラ光を帯びて、奇妙にゆがんで見えた。

つまりは、もはや、生気のない顔色になっていたのだが、恐怖のために、目だけ大きく見開いたその顔はもはやこの世のものではなかった。

この時、山浦は踏み板を外すためのレバーを握り締めていた。

が、次第に手元が危なくなつた。いまにも手を離しそうになった。手を離せば、踏み板は落ちる仕掛け、山浦は必死でレバーを握っていた。

が、「幽霊男」が山浦に、命令を下した。

「ひとまず。山浦は生かしてやる。俺様はいまから地下室で、こいつの首吊り体が落ちてくるのを待つことにする。いいな。三秒後だ」

暗紫色の妖光を放つ幽霊体があつと一瞬、執行室から消えた。移動をしていた。

山浦がそのことに気づいた時、地下室に身を移した「幽霊男」が、山浦の心を遠隔

操作した。山浦の手がぶるぶると震えた。

(さあ、手を離せ。お前もこやつの処刑に手を貸すんだ)

ふっと、山浦の手元が緩んだ。

がたつと大きな音がした。目の前にいた玉木所長の体が山浦の視界から不意に消えた。

「うえっ」

ノド輪の詰まる瞬間の声と共に、玉木の体は地下室に落ちた。

へなへたと腰くだけになり、山浦がその場に、へたり込んだ。首吊り仕掛けのレバーを離れたその手で山浦は空中を掻いた。

地下室で待ち受けていた「幽霊男」が、その時、宙に吊られた玉木の体を一度支え持った。それで、玉木のノド輪には一氣に加重の力が加わらず、生殺しの状態で玉木の体は宙に浮いた。まだ、首に絞め縄はしつかりとは食い込んでいなかった。

「うへへ。お前には、たっぷり恐怖感を味わわせてやるぜ。その資格はお前にはありだ。楽しめ、楽しめ」

次に、「幽霊男」は空中に、ほいと、玉木の体を放り投げた。一度、高く、その体を持ち上げておいてから「幽霊男」は玉木の体が落ちてくるところを、得体の知れぬその両手でひよいと受け止めた。それから、同じことを「幽霊男」は二度、三度と繰り返した。

その度に、玉木は「うおんっ」と、声にはならぬ声を上げた。たっぷり、「幽霊男」に弄ばれていた。さらに、「幽霊男」は、遊びをエスカレートさせ、一旦、首輪を緩めると、そのまま玉木の体を空中からコンクリート床に落下させた。

「がきっ」

と、頬骨の折れる音がした。玉木は左顔面をしたたかに強打した。見る間に、血がコンクリート面につくと流れた。

「うーむ。うーむ」

と、玉木は痛さに耐え兼ね、うめき声を上げた。

それでも、玉木は助かったと思ったのか、その場から逃れようとし、這いつくばりながら、地下室入り口の方に、いざり寄った。

「ふへっ、こいつ、俺様と同じ、傷物になりやがった。ざまみろだ。さあて、一度、死ぬ思いをして、また、生き返る。そこまでは俺様と同じとして、いくら、じたばたしても、この地獄の一丁目、ここからはもはや逃げようはないぜ。今度は本気で死んでもらおうか。玉木所長さんよ」

「幽霊男」は、絞首用のロープを手元にたぐり寄せた。天井にぶら下がった滑車がくると、乾いた音を立てた。

ロープは巻き込まれ、それに連れて玉木の体はコンクリート床から、再び、持ち上げられて行った。ゆっくりと、「幽霊男」は時間を掛けて、首吊り本番の準備をやった。

その分、玉木は余計に恐怖感を味わされた。顔を引き攣らせ、玉木は白目を剥いた。よだれが口から垂れて出た。

「ぎぎーっ」

と、滑車がこすれの音を発した時、ロープはびんと張られ、再び、玉木は首を吊られている。今度は「がきっ」と、舌骨が折れる音がした。二本の足が宙を蹴ったが、やがて、

だらりと玉木の両足は垂れたままになった。

「拘置所所長様のご臨終だ。おい、山浦、そんなところで腰を抜かしていないで、地下室に来て、死んだかどうか、こやつ脈でも取ったらどうだ？」

「幽霊男」が山浦に声を掛けた。

山浦自身の腰は抜けているので、「幽霊男」の命令に従うわけにはいかなかった。

「幽霊男」が念を込めた。山浦の体はすっと移動をし、地下室のコンクリート床に、いつの間にか転がされていた。

「所、所長が…」

と、山浦はやつと首をもたげ、真つ青な顔になり、呟いた。

まだ、宙空には首を吊られた玉木の体が止まっていた。全体重が首に掛かっている状態で、玉木は半分舌を出し、白目を剥いていた。

「このままの状況では、山浦、お前が玉木の野郎を殺したことになるよな。幽霊殺人事件なんて、この世とやらには存在しないからな。この場の設定からして、お前と宇野しか手は下せない。どうする？幽霊様がやらかしたことだと主張したところで、こんな話、誰も信用しないよな」

「そんな…わ、わたしは」

「幽霊様に不可能はない。死体がこの場からなくなれば、殺人事件にはならない。ただの、失踪事件だ。と、言うわけで、この場は瞬間移動（テレポーション）の術を使わせてもらおうよ。」

「幽霊男」はそう告げると、大口を開いてみせた。紫色の炎が何かを吸い尽くそうとでもするのように、舌の上で燃え立った。念を込めた。

と、瞬間移動（テレポーション）の術が力を発揮し、玉木所長の死体は執行室から不意に消えてなくなった。

同時に、山浦の姿も消えた。

山浦は「あーっ」と、一人、悲痛な叫び声を発したのだが、あいにく、誰もその声を聞き取った者はいなかった。

4

「なあ、山浦、ここはどこだと思う？別に死刑執行場の闇に紛れ込んだってわけじゃない。現世そのものさ。まずは、第一のターゲット、昔の女のところ、俺様はやって来たのよ」その声に、うつすらと、山浦が目を開けた。

山浦は車の後部座席にいた。

真夜中のことだった。

ここは、どこか、郊外の地で、暗い雑木林の外れに、二階建てのアパートが建っていた。そのアパートの駐車場に、一台の黒塗りの車が停められていた。

運転してきたのは、宇野らしかったが、着くと間もなく、また、宇野は深い眠りに入った。宇野は意識下での行動を強いられているようで、自分の身の回りで、何事が起きているかは、一切、感知していないふうだった。

「どうして、この葬儀人の男が…」

同じように眠らされていた山浦が意識を取り戻し、その時、「幽霊男」に尋ねた。

全身は暗紫色のオーラ光に染められていたが、人間そのものの姿かたちには、「幽霊男」はすでに変身していた。死刑囚佐川洋次郎がこの世に現れたと言った凶であった。潰れた左目はそのままだったが、眼窩の奥にいまは収まっていた。ただ、その左目は黄灰色で、右目は光に反射すると、暗紫色を帯びた。気味の悪い人相であることには変りはなかった。

「お前だって、これから起きる物語の序章部分ぐらいは知っていた方が、これから起こる物語が楽しめるってもんだ」

「幽霊男」は山浦にいつときだけ、親しみの情を向け、ひとくさり、斉木加津子という女について語り出した。

「いい女であることには違いない。だがな。手当たり次第の男漁り、男どもがチャホヤするものだから、男に順番をつけやがって、俺様は七番目と言いやがった。それまでに、俺は女を六人、やった上に殺していた。俺が七番目なら七番目に殺してやろうと、思っていたら、ドジをして捕まっちゃまった。罪にされたのは五人だが、もう一人殺した。ま、いいか。いまさらどうってことない。実はな。女の腹を裂いてやろう思ったのには、動機つうものがあつてな。斉木加津子と、やっている最中のこと、俺は、他の男のやったばかりの加津子の体を抱いたことがある。この屈辱感とやら、わかるか。そこで、おれが考えたことは、他の男どもが、加津子の胎内に注入した精蟲を一匹残さず、腹の中を裏返しにして、天日のもとにさらけ出してやろうと思ったのさ。そうすりゃ、女も死ぬが、何億匹のお邪魔蟲も死んじまうってわけだ」

「ははあ、それは…」

と、それだけ、山浦は答えた。まだ、恐ろしさに唇を震わせていた。

「幽霊男」が前方を窺った。一つだけ部屋には明かりが灯っていて、白いカーテン越しに人影が揺れた。しばらくすると、アパートから一人の男が出て来た。その男は駐車場の片隅に停めてあった白い車に乗って、この場を去った。

そして、十数秒後、「幽霊男」は、山浦を同行し、斉木加津子の部屋をドアのノックもなしに訪れた。

「おい、久しぶりだな。俺様は死刑になり首を吊られた佐川洋次郎だぜ。幽霊のように見えるかも知れないが、幽霊じゃない。と言って、人間様というわけでもない」

「なに？なんなの…」

ネグリジエの裾が乱れた女が、慌てて、窓際のベッドから起きあがろうとしたが、半分は腰を抜かしていた。

暗紫色の人間のかたちをした怪物が、その目の前に立っていたのだ。

しかも、両目のおどろしさの感じは、見られているだけで、気絶してしまいそうなほどの恐ろしい眼光を放っていた。

「今夜は殺し屋を一人用意した。お前を取り逃がさないためにな。ちよつと、頼りなさそうだが、俺様のエネルギー源として、この場に、いてもらわなければならん。ま、精力剤のようなもんさ。肝心のところが、おっ立たなければ何にもならんからな」

「幽霊男」の説明を待つまでもなく、生体のまま、山浦はエクトプラズムでの供給

役を負わされているらしく、ひろひろした舌を山浦の首筋にあてがうと、生き血をちゅうちゅうと吸った。「幽霊男」が元気になればなるほど、その分、山浦は元気をなくしていった。「止めてよ。あんた、脱獄でもしてきたの。トラブルに巻き込まれるのなんて嫌よ」

気の強い女らしく、やつと、反抗の文句を口にしたら。それでも、女のもろだしの膝頭はぶるぶると震えていた。

「バキヤロウ。さつきも男をくわえ込んでいたな。何発やった？性懲りのない女だよ。まったく。子宮の奥に貯め込んだ精液とやらを、全部、掻き出してやるから、手術台の上に乗った気で、パンティを脱いで、ハイ、お願いしますと言え。こちらは、ハンティングナイフ一丁だな。俺様の切り裂きの技は、お前も知つての通り、捨てたもんじゃない」

にっこり、笑った「幽霊男」の横顔には凄みがあった。頬傷があるのでないのに、頬骨のあたりが凹んだ。ひくひくと攣れた。

「幽霊男」はナイフをベッドの足元にひとまず突き刺すと、女の着ているものを剥ぎ取った。腰を抜かしたままの女は「幽霊男」の為すがままになった。

「なーに、あばずれ女とは言え、ま、男にはない穴とやらも持ち合わせているようだからしばらくは親切にしてやるよ。俺様としても久方ぶり、溜まったものをどぼと吐き出さなくちやなんねえからな」

「幽霊男」は、白い目だけを剥いている女の体の上にまたがった。鋭い爪でも生えているのか、時折り、女の乳房を掴み取った。「幽霊男」が爪で搔いた跡にはみみず張れ状の血筋が浮いた。首輪にも何度も手が掛かったので、同じように、爪痕が記された。

「幽霊男」が腰を上下している時、時々であったが、その顔が宇野に似た顔になった。その肉体を「幽霊男」は宇野に借りているわけだから、その人格の一部が表出しているのかも知れなかった。

もつとも、その時、宇野はまだ車の中で、気を失ったままだった。それで、いま、起きている事態には一切、気がついていなかった。

「ま、今夜は使い古したシヨンベン壺で、たらたらと寝シヨンベンをしたようなもんでさ。どうも、すつきりしねえや。好い思いは他の女にお願いするとして、お前の始末をつけてやることにするか」

「や、やめてよ。まさか…」

「そのまさかタイムだよ。逃げようたって、そうはいかない。斉木加津子はもう死体そのものの、悔しければ、びくとでも動いてみる」

ハンティングナイフが、「幽霊男」の右手にしっかりと握られた。女は目を剥いたまま、もはや、身動きならなかった。

「ころんころんした乳首だが、ちよつと会わない間に、色づいたな。年相応だよ。昔のピンク色に変わるわけじゃないから、きつぱり、何にもなしてことにしてやるよ」

「ぎゃーっ」

と、女は叫んだ。ナイフが乳首を切り取り、そして、次に、女の下腹部に向けられた。その目撃者、山浦もこの場の凄惨な光景を目にし、余りのことに気を失った。

「幽霊男」に操られた宇野が目を覚ました。車の運転席を出ると、宇野は殺人現場に足を運んだ。

ことの始末は、葬儀人の宇野がつけた。それからの行動は宇野自身の意志によるものと思われた。エンバーマーとしての自覚に目覚めた宇野が女の血みどろの死体をキャンバス状の布で、ていねいに包んだ。

それから、宇野は外に停めてある黒塗りの車に、女の死体を運んだ。

第四章 失踪者の闇

1

「羽村愛香さんのお知り合いの方ですね。山スキーの途中に雪崩れ事故があつて、それで、羽村愛香さんの行方がいまのところわからないものですから、ご連絡をしました」

湯沢スキー場のホテルの係員と名乗る男から、英輔のところに緊急の電話が入った。

愛香がスキーに出掛けると告げた日から、三日が経過していた。

「愛香が……。まさか、そんなことが」

受話器を握り締めたまま、英輔は絶句した。

それから、係員は宿帳に、矢萩英輔の名があり、連絡先も記されていたので、連絡したと告げた。チェックインしたのは愛香だけ、同宿予定者に、取り敢えず情報を入れたというのが真相のようだった。

その情報では、遭難は確認されていず、ホテルに愛香が戻っていないことから、その行方を捜索中であるともつけ加えられた。

英輔はとるものもとりにあえず、愛香が宿泊していたホテルに向かった。そのホテルには昨年の今頃、英輔は愛香とスキーを楽しむために行ったことがあった。

関越自動車道に入り、一路、英輔は湯沢を目指した。あいにくの雪で、高速道は一部、速度制限されていたので、車は遅々として進まなかった。灰色の冬景色の中を英輔はとても不安な思いのまま、車を走らせた。

(まさか、遭難したなんてことはないだろうな。情報だと、山スキーのエリアでの雪崩れ事故、大きな雪崩れに巻き込まれていない限り、助かる可能性はあるはずだ。それに、雪崩れ事故の現場に愛香がいないケースも考えられる。それにしても、まだ未確認情報なのだから、いまから慌てることはない)

愛香が生きている望みを捨てないためにも、英輔は自分にそう言い聞かせた。

このところ、時間が取れず、愛香の相手をしてやれずに、日々を過ごしてきた。ダンス競技会をキャンセルした上に、今度のスキーに同行することも、英輔は断った。

「バーチャルマン計画」は、やっと、一応の計画の目途がつき、スライス化した献体のバーチャル体が実現した。しかし、まだ、目の部分、それに、一部、踵の骨の固い個所が欠損していたりして、その修復作業もあり、完成の段階にはなかった。

それに、CG処理作業に関しては医業用にソフト化する分野の仕事については、ほとんど、手付かずの状態にあったので、英輔としては、これからも、一層、忙しくなるはずだった。バーチャル体の完全完成までは、英輔の得意技もまだ封印されたまま、いまは、色々なケースを想定して、仮のバーチャルシステム構築作業を数値に置き換えるための検算を、コンピュータ上で行っているところだった。

湯沢に向かう途中、英輔は何度か、遭難事故本部のあるホテルの関係者に電話をし、現況を聞き出した。救出部隊関係者は一部、現場で救出活動をしているが、積雪量が多く、雪崩れによる第二次遭難事故も考えられることから、本格的救出活動は、現在、見合わせていると語った。

絶望的状况にあることに加え、交通渋滞で、のろのろ運転を強いられていることに、英輔は車の中で、一人、やきもきした。

上越インターチェンジを降り、ホテルに向かった時点で、東京を出発してから、約四時間が経過していた。すっかり、あたりは暗くなった。午後七時過ぎの時刻で、時間の経過に、余計なこと、英輔の不安は増大した。

ホテルに到着すると、救出隊本部の係員が、現況を英輔に報告した。愛香は本日午前十一時にホテルにチェック・インしており、単身行動、宿帳に記入された筆跡も愛香のものに間違いなかった。その後、ホテルを出て、愛香は山スキーコースに向かった事実が確認されていた。このコースに入るには、安全上、事前許可が必要であり、愛香もその許可を取っていたので、コースに入った確率はかなり高かった。

英輔は直ぐに、山スキー場のあるホテルとはやや離れた場所の山の斜面の遭難現場に向かった。雪はまだ降っていて、横なぐりに、英輔の顔にも雪が吹きつけた。

雪上車に乗っている途中、別の係員が英輔に現状を告げた。

「雪崩れ事故で、現在までに二名は救出されました。一部、滑走禁止地域がありまして、もし、そちらに向かっておられたのだとしたら、ちょっと、捜索には時間がかかるかも知れません」

絶望的な状況のように思え、英輔は黙りこくった。行方不明者はいまは愛香だけで、

係員の説明通りだと、愛香は危険地域に足を踏み入れている可能性があった。愛香がスキーは得意なのがせめてもの慰めだったが、そのことが、今度の遭難事故の遠因になっているとしたら、これは考えものだった。

遭難現場近くに着した。

斜面の一部に、ラジエーター発電の照明灯が当てられていて、そこだけが、眩く切り取られていた。降る雪に邪魔されて、よくは見えなかったが、おおよそ二、三百メートルの広範囲にわたり、その斜面は抉られているようだった。

積雪量が二メートル、斜面はかなり急な地帯なので、あたり一帯に立ち入るのは危険性がともなうと、英輔も感じ取った。

「今夜の天気予報でも、雪はまだ降りそうです。いまのところ、様子を見るしかないというのが、わたしたちの見解です。しかし、救出隊は常時待機していますので、雪が小降り状態になり、危険がないと判断した場合は、時機を見て、出動体制はとりますので、申し訳ありませんが、ホテルでいましてしばらく待機していただけませんか」

「はい、わかりました。ぼくは医師ですので、役に立てることがあれば、協力します」

と、だけしか、いまの英輔は答えられなかった。山全体の状況を見れば、愛香が滑走禁止地域に入ったとすれば、無謀な試みだと言わざるを得なかった。

（自分が愛香にもっと、やさしく接していれば、こんなことにはならなかったかも知れない）英輔は自分を責めた。ラジエーターが稼働するやかましい音だけが、この場では活気があった。が、その音も聞こえぬほどに、英輔は落胆し、がつくりと、肩を落としていた。

2

愛香が宿泊する予定だった部屋で、この夜、英輔は一人泊まった。眠れるはずがなかった。ベッドメーカーキングされたままのセミダブルのベッドを横目に見ながら、英輔は窓側に置かれたソファに位置を占め、ずっと頭を抱え込んでいた。カーテンは閉めたまま、外では雪が降り続いていたが、そんな光景も、英輔は一切、目にしなかった。

（愛香は…。いま、何をしているのだろうか？ここで、待機している間も、愛香の命は吹雪の中で奪われようとしているのかも知れない。それにしても、なぜ、愛香は立ち入り禁止地域に足を踏み入れたのか？山スキーに慣れているとは言え、一人で危険地域に入るような無茶なことを愛香がするはずはない）

英輔には不審の思いだけが残った。

いつしか、愛香の不審行動を英輔は追っていた。遭難事故になんか遭ってはいないと、自分に言い聞かすために、英輔は別のストーリーイを頭の中に用意した。

（愛香はぼくとの愛にこのところ疑問を抱いていたのではないか？心の動きも不安定で、いつもにない言動を英輔に対して示していた。忙しくて、恋人同士の付き合いができないことに苛立ち、愛香は反抗的な態度も見せた…）

ダンス競技会に出場する楽しみを愛香から奪ってしまったことには、英輔にも後悔の念があった。新しく用意したという華やかな舞台衣装もむだになってしまった。

せめて、動物写真作家の瀬野レオの写真展に同行したのが、慰みだったが、あの日

が愛香に会った最後の日になるのかも知れないと考えると、英輔は胸が詰まるのを覚えた。だが、英輔は別の思いも持った。

動物写真展の会場での愛香はとても生き生きと生きていて、英輔は別人を見る思いがした。それに、愛香と瀬野は親しげで、あの時、瀬野に対して英輔は嫉妬心のようなものを抱いた。もう一つ、愛香が口にしたことで、英輔が気になったことがあった。スキー場に出掛けると言った電話をしてきた時、愛香は妙なことを英輔に告げた。瀬野がものにしてしている厳しい自然の中での動物写真撮影にトリックがあるかも知れないと、愛香は得意げに語った。英輔が感心した翼を広げたフクロウの作品について、愛香は特に興味があるようなことを言った。その撮影方法のトリックを探ってみたいと、その時、愛香は関心を示してみせた。

あの時、英輔は愛香をたしなめたが、愛香は気にしていないふうだった。女一人で、探れる話でもない、英輔は考えてもいたので、深くはそのことを追求しないまま、あの時は終わった。

だが、雪山と動物写真家、そして、謎を追う気で山に入ったスキーヤーの愛香というふうには、この話をつなげれば、不審点を見出すことは可能だった。もともと、それらの話になんらかの根拠があるというのではなかった。

愛香は生きていると信じていたい英輔の気持ちがそんな作り話を一つ、いまは、この場面に用意していただけたことだった。

さらに、英輔は、このところの愛香の一連の行動について思いを巡らせた。

私蔵博物館の一隅に、白いユリの花を飾り立て『ここは死者たちの眠る場所、涸れたお花がお似合いかも知れなくてよ。きれいなお花と言っても、やがては涸れて行く運命にあることだし、そう、こうやって、つかの間、ぱつと大輪の花を咲かせるのも、いつときの夢を見ているようで、いんじゃない。わたしはそう思うようにしているの』と愛香が告げたその台詞の前身についても、英輔はあらためて考えさせられた。

「涸れた花」というのは、愛香自身のこと、花の美しさを愛でるだけで、花を手折ろうとしない英輔の優柔不断さを、愛香はあんな方法で、英輔に示して見せたのかも知れなかった。

それから、愛香がこだわりの気持ちを示したいくつかの言動も、英輔には気になった。

解剖資料館の存在が幼少時からの愛香の精神形成に何らかの影響を与えているのではと、見えない闇について、いつか、英輔は探りを入れてもいた。祖父と愛香との間に、どのような心の交流があったかを、探ろうとするには、余りに年月が経ち過ぎてはいたが…。

幼児期・少女期に、解剖資料館に出入りし、その後、祖父が亡くなり、解剖資料館が閉鎖されたあとも、愛香は何度か、合鍵を使って、館内に入りをしたと、英輔には語った。

思い出のあるコノハズクの剥製に会いたかったからというのを、その理由にしていたが、愛香の心の奥にあるものすべてを、英輔が知悉(ちしつ)していたのではなかった。

そのコノハズクだが、愛香の申し出通りに、英輔はJESターションに持ち込んだ。鳥や小動物などの剥製品が置かれている展示室の一隅にコノハズクは収められた。

エンバーマーの宇野がこの件については引き受けてくれた。宇野自身も動物の剥製には興味があるのか、他にも、日本リスや、テンの小動物、ノスリやクマタカなどの野鳥類の剥製が飾られていた。同じフクロウ科の黒褐色の羽毛を持ったアオバズクの剥製も一体、

これらの剥製に混じり並べられていた。

コノハズクに会いたくなければ、J Eステーションを訪ねると、愛香は言った。施設全体が、近代的なきれいな造りだとは言え、英輔は死体修復の現場に愛香には足を踏み入れて欲しくないというのが本当の気持ちだった。一時預かりの場所ならと、英輔が承知したといういきさつもあった。

あれこれ、考えているうちに、夜半の時刻になった。じつとしていられず、部屋の中を歩き回っているうちに、英輔の携帯電話の呼び出し音が鳴った。びくりとし、電話を手にしようとした時、携帯電話機器そのものが紫色のオーラ光を放ち、ぶるぶると小刻みに震えた。何かバリアのようなものに包まれているといった状態だった。気味が悪いので、英輔はしばらく、手には取らず眺めていた。

メニュー画面には、特に、発信力の強さを示す濃い紫色の表示がされており、それがメッセージなのか、画面だけは別物を思わせる瞬きを繰り返した。

3

もつと、奇妙な現象が起きた。いつまでも、放置しておくわけにもいかないのので、携帯電話を手にした英輔の耳に、どうしてなのかベルリオーズ作曲のワルツ『幻想交響曲』の調べの一節が流れてきた。軽快なリズムではなく、どこか、間のびをした曲となっていた。

「もしもし、もし、もし…」

英輔の頭の中には、この電話の相手は愛香なのだという思いが強まった。このダンスミュージックのことを知っているのは、英輔の知る限り愛香しかいなかった。

が、ワルツの一節がぷつんと切れた時、通話相手になったのは根本助教だった。英輔の頭は混乱した。時刻は午前二時に少し前、真夜中のことだった。

「き、きみは大丈夫なのかね…」

いきなり、根本は急ぎ込んだ声で応じてきた。その声は震えを帯びていた。

「いえ、いま取り込み中で。ぼくの方はたいへんな状況に…」

「やっぱり？き、きみのところにも出るのかね…」

「は？何がですか？」

思わず、英輔は問い返した。根本は何かに怯えたような声を出した。どうやら、根本の身辺に起きていることを彼に伝えたいらしく、愛香が雪崩れ事故に遭っている状況はまだ根本は把握していないようだった。

事故の件は根本には教えていないのだから、ホテルで待機している英輔の緊急事態も承知していないのは当然ではあったが…。

「あの…。死刑囚の男が…。出た、出たのだよ。夜中の二時になるとここ二日、続けて、姿を現して、それで…」

「よくわかりません。いま、先生はどこにおられるのですか？」

「自宅にいるのだが…。あの男が幽霊になって、現れるんだ。もう、出る頃だ。た、助けてくれ」

「何を言っているんですか？幽霊などと」

「それが、例の飛び出した目玉が垂れ下がっていて、とても、この世のものじゃない。それも、自分の体をスライスされたことを、恨んでいるのか、現れる時はバーチャル体みたいに、その何だ。スライス面のかたちの再現体になって、その、わたしのところには姿を現すんだ。きみは知らないことだが、あの男、首を吊られる前に、その、何だ。幽霊になって、この世に現れると、処刑前に言ったんだよ。その通りだよ。」

「馬鹿なことを言わないで下さい。それどころではありません。いえ、ぼくは、実は愛香がスキー場の雪崩れ事故に遭って、いま、湯沢のホテルにいるんです」

「スキー場？」

と、言ったあと、根本は「うぎゃー、うふあふあ…」と、何とも奇妙な声を返してきた。

同時に、受話器が床に落ちたのか、根本自身の声は聞こえなくなった。それだけではない。冷たい風のようなものが、英輔が手にしている携帯電話にも伝わってきて、英輔自身も全身がぞーとし寒気がした。

「もしもし」

と、英輔は何度か呼び掛けたが、もう、根本からの返事はなかった。

通話は切れた状態なので、英輔は携帯電話を傍らのデスクの上に置いた。紫色にさらに暗い色加わり、やはり、生きているもののように、その機器は震えの発信音を伝えながら、デスクの上でゆっくりと左右に動いた。

（幽霊などと、根本助教は何をうろたえているのだろう。夜中に何か悪い夢でも見て、それで電話してきたのか？）

英輔は一人呟いてはみたが、目の前で起きている現象については、解明することはできなかった。奇妙な体験を英輔はこの場合は強いられただけだった。

いや、ワルツの曲の一節を耳にしたのは確かだった。愛香の失踪事件が起きている最中に発生した、この発信の事実をどう解釈するのか、英輔は新たな問題を突きつけられていた。それとも、あれは空耳だったのか？

それに、紫色の光を帯びた携帯電話の異変事も気になった。あれは幽霊通信でも届けられたと言うことなのだろうか？

あれこれ考え、何の結論も出せずにいるうちに、救助隊本部の係員から、今度は部屋の電話に連絡が入った。

現在の降雪状態、なお、降り続く雪、そして、雪崩れ現場の地理条件などを考慮すると、今夜中に救出行動を行うことは、無理であると、英輔は告げられた。

その頃、根本は自宅の寝室で「幽霊男」と遭遇していた。

一人暮らしなので、助けを求める者もいず、腰を抜かしたまま、今夜も、自分の前に現れた「幽霊男」の恨みがましい話を根本は聞かされる羽目となった。

壁の内側からすーと、姿を現す時、「幽霊男」は、自分の体をスライス状にした当の本人に、その事実を思い知らせるべく、わざと時間を掛け、念入りに、その正体を現してみせた。

脳天から、一ミリ単位で、円を描くような感じで、そのかたちが壁面に浮いた。

横断面の線描画のようにも見えた。灰色のその線描画はぐるぐると輪を描く要領で、上から下へと、頭部のかたちをまずなぞり、首までのかたちを壁面に写してみせた。

「幽霊男」の顔だけが浮いて出た。

線描画は次第に肉付けされて行き、恐ろしいその形相がはつきりとしてきた。初めに、垂れた左目が露わになった。黄濁色の目の光が、豆電球の容量ぐらゐの明りをあたり投げた。それ自体だけで、生きているように、その気味の悪い目玉は、垂れている内直筋の動きにつれて、ぶらぶらと揺れた。そして、その黄濁色の目玉で、回りを見回そうとしているのか、ひくひく、ひくんと、目玉は不規則に動いた。

前額部が禿げ上がり、あごが四角い人相の悪い顔立ち、「幽霊男」の顔はそれ自体でも、恐ろしい凶悪人の面相だった。

首から下はまだかたちを現していないのに、その怪人相の顔だけがいまは根本を見下ろしているので、余計に恐ろしく、根本は寢室の床に、抜けた腰をつけたまま、口だけをぱくぱくとさせていた。

「おい。こんばんはって、今夜はあいさつをしておこうか。きのうとその前の晩は、お前の驚く顔が見たくて、脅かすだけにしておいたが、今夜はもっとお楽しみ場面を東上大学根本助教授のために用意させてもらうことにするよ」

「幽霊男」は傷ついていない右目をぎよろりと剥いた。存分の敵意が向けられており、残忍さもその目の内に秘められていた。

「な、なにを言う。わたしは、お前を殺したわけでもなければ、その、その何だ……」

「殺してないだど。生き血を抜かれたお陰で、俺様は死んだんじゃないのか。そんなこたあ、殺された本人がいちばんよく知っていることだぜ。そうだ。生き血を抜かれるってことがどういうことか、今夜はその実験をお前の体を借りて、やらせてもらおうか」

そう言うと、「幽霊男」は酷薄さを思わせる大きくて薄い唇を広げた。へろへろと波打つ舌が、その口からは半分ほども出ていた。

「うひよ、ふあつ」

根本がまた恐怖の声を上げた。

ひよいと「幽霊男」の顔だけが空中移動をし、根本の腕に飛び掛ると、手首の血脈部分に、口を当て、そして、

「ちゅうちゅう」

と、「幽霊男」は血を吸い始めた。

根本はその幽霊顔を振り払おうとしたが、蛭が吸いつくように、ぴたっと、根本の腕にへばりついたままその口は血を吸い続けた。

気を失いそうになり、根本は前のめりに床に倒れ込んだ。

いつときだけ、「幽霊男」は口を離すと、いつもの饒舌な男に返った。

「血の中には《紫魂水》とやらが含まれていて、こいつを吸うと、俺様はやたらと、元気になるのさ。もつとも、お前の血は山浦にくらべると、味もまずいし、余り、エネルギーの足しにはならないようだがな。へへ、幽霊の身で、元気もへったくれもないが、生身の女を犯すには、元気もなくちゃなということお。きのうもその前の晩も、生きている時に返って、女とやりまくり、これまで通りに、そいつらの乳首を噛み切り、ざっくり、下腹部を抉ってやったよ。お前のオチンチンも、切りとってやりたいが、どうせのことなら、お前がやったように、スライスにしてやらないとな」

「幽霊男」は薄い唇の端を、ひろひろした舌でなめながら、にっと笑った。

「そうそう、俺様を小馬鹿にしてくれた斉木加津子は最初の晩に始末してくれたよ。何しろ、いまは、透明人間のようなもの、どこにだって、出没できるし、いまは、俺様は死んだことに感謝しなくちやと思っている。ま、根本なにがしかにも感謝はしているってわけよ。でもな。感謝の気持ちを表すための俺様の方法は人間離れの技、へへ、ま、俺様は人間じゃないから、この文句はピント外れだな。そうそう、聞いているかどうか、知らんが、関係者ご一同さまに感謝するために、俺様は拘留所所長玉木重朗を、絞首刑の刑にすでに処してやっただ。俺様の首を吊ったと同じ、方法、同じ場所だな」

「幽霊男」が根本に言っただけで聞かせた。

この話は根本は一切知らなかった。拘留所の死刑執行場から、瞬間移動(テレポーション)され、玉木の死体はどこかに運び去られ、そして、看守長の山浦は生きてままで、その場から消えていたので、こちらも行方不明、世間にこれらのことは知られていなかった。

もちろん、このような状況で、それらの事実を根本が知るはずもなかった。

吸血鬼さながら、生き血を吸い終わったのか、「幽霊男」の顔はひよいと壁面に戻った。

それからは首から下が再生された。スライス面がやはり、ぐるぐると輪を描くように、上から下へと移動をして行き、そして、バーチャル体そのものを思わせる線描を空中で描いてから、胸、手、胴、足と、そのかたちが露わになって行った。

「明日もまたお前のところには顔を出させてもらうぜ。他にも、血を吸わせてもらおう奴がいるものでな。今日は少しだけにしておいた。いまから、俺様は女狩り。いやいや、相手は夢魔に遭っているような気かもしれない。夢の中で、俺様に犯されて、いい夢を見ているうちに、あの世行き。どいつもこいつも幸せもんだよな。俺様は真夜中になると毎日のように街に現れる婦女凌辱殺人魔、ほんとうは世間で大いに騒がれたいが、こいつはちよいまずい。その、何だ。俺様が肉体を借りている宇宙は、この世に生きている人間だからな。へへ、一つだけ、そのへんに関係のあることを教えてやるよ。葬儀屋の宇宙は俺様とは同体、言うなれば、あの男の多重人格の一部と俺様が結合しているということかな。女の肉体にはまるで無関心って顔をあいつはしているが、あれは表向きの顔かも知れんて。俺様の凌辱魔の性向が、そのまんま、あいつの肉体に乗り移ることだって、あり得るってことよ。ま、それ以上の説明をお前にする必要もあるまい。そういうことだ。まずは、いまから、あのエンバーマーの男のところへひとつ飛び、あいつの肉体を借りてくることにするよ。それからだ。女狩りは」

余計なことまで、しゃべり、得意顔になった「幽霊男」はあかんべえをするように、舌を出してみせてから、不意に、根本の寝室から消え失せた。

寝室に備えられた電話器は外れたままになっていた。通話が切れた状態で放置されていたが、放心したままの根本の視野のうちには、何も写ってはいなかった。

結局のところ、英輔がホテルに止まった三日の間には、捜索行は何の進展もみせず、仕事の都合もあり、英輔はホテルをあとにした。

ヘリコプターも出動をし、空からの捜索も行われたが、雪崩れが広範囲にわたっていることから、愛香の生存の可能性は、現時点では見出せない状況だった。

東京へ帰る車の中で、英輔は絶望的な思いを噛み締めた。何かの間違いで、愛香が雪崩れ現場にはいず、別の場所からひよっこり現れないかと、あり得ないような話まで英輔は頭の中に用意した。

しかし、現実問題、愛香の行方が知れないという状況があることには変りはなかった。失踪も考えられることから、遭難本部の係員から、愛香に失踪原因はあるのかと、英輔は問い質された。失踪したのだとしたら、その点からも、考え直す必要があった。

いくつかの不審点をホテルにいる間に、英輔は洗い出し、自分なりに整理してみたが、考えがたどり着くところは、動物写真家の瀬野レオと愛香の怪しい関係についてだけだった。写真展での二人の親しそうな関係に、いまさらのように英輔は探りを入れる気になっていたので。嫉妬心も混じったことだから、探り出すと、行き着く果ては限りがなかった。

山スキーにかこつけて、愛香が湯沢の地に出掛けて行き、そして、瀬野とどこかで落ち合った？その可能性もあると思ひ、英輔は瀬野レオが雪山撮影の拠点にしている地域について、各方面から情報収集をした。

その結果、瀬野のテリトリーの一つに、越後湯沢地区が含まれていることを、英輔は知った。湯沢を起点とすると、北東に位置する三国山脈から、長野県寄りの地帯、上信越国立公園、それに、十五里尾根と呼ばれる南西部の山岳地帯などがその取材地として上げられた。

二人の関係を疑い、愛香の言動や、そして、失踪した状況などと照らし合わせ考えると、これらの地理的条件からも、瀬野の存在がどうしても浮かび上がった。

どこをどうやって車を運転したのか、英輔はともかくも、自宅に戻った。心ここに在らずの心境のまま、英輔は家にたどり着いた。

自室に入ったあとも、英輔はぼんやりとしていた。何から手をつけていいかもわからず、ともかくも、パソコンルームに入り、キーを打つ気もないのに、チェアに腰を降ろした。心によりどころがないまま、いつか、英輔はパソコンを操作していた。いつものように『バーチャル美少女』のMIHANAちゃんのホームページのメンバーサイトに英輔はパスワードを打ち込んでいた。

が、いつものMIHANAの笑顔は送られては来なかった。画像には、ただ、文字だけのメッセージが送られて来た。何者かがサーバーに不正アクセスをし、内容を書き換えたようだった。

『ダンスが生まれたそもそもの初めはご存知かと思いますが、祭儀などに用いたことで、デーモンスピリットがその根底にあると言われています。それはさておき、語源をたどると、サンスクリット語のtanに通じ、『緊張』『伸張』の意味を引き出すことができます』

―ダンス愛好協会より』

と、一読しただけでは、まったく、解読不能の文字が躍っていた。英輔は首を傾げた。ダンス愛好協会と名乗る団体名は、英輔は聞いたことがなかった。何かのいたずらだと思われた。

「一体、何者がこのようなメッセージを送りつけてきたのか」

英輔はなお不審の思いを持った。

愛香の失踪騒ぎと何らかの関係があるのかと、この場合は考えざるを得なかった。いずれにしろ、英輔と愛香がカップルを組み、ダンス競技会に出場していることを知っている者の仕業であることには違いなかった。

停止したままの画像が、次に、動きのある画像になった。そして、いきなり、ベルリオールの『幻想交響曲』の曲が聞こえてきた。

画面の背景はどこかのダンスレッスン場で、タイトルが付されており、『AINOKI NCH O』とあった。英輔にはその意味するところが『愛の緊張』であることは直ぐにわかった。それから、ロングだった画面がゆっくりとズームアップされ、一組のカップルがワルツのステップを踏んだ。

「うん？これは愛香と組んだダンスシーンだ。どうして、このような画像が…」

英輔はそのあとの言葉を呑んだ。

二人が最後にダンスレッスンをした時のシーンがここでは再現されていた。

パソコンの画面なので、全体の動きはぎこちなかったが、ナチュラルターンの切り返しが見事に決まった。二人はいかにも楽しそうな笑みをかわし合った。瞬時の表情だったが、二人の息はぴったりだった。

しばらく、英輔は画面に見入った。

と、愛香が客席の方に目を向けた時、フットアクションを誤った。英輔のサポートイングフットにも乱れが出て、二人は一時、ステップを中止した。小さなトラブルが生じていた。ダンスの画面はそこで切れた。

(それにしても何者が、こんな画像を送ってきたのか？この前、レッスンをした時の会場にいた人物の一人には違いないが、心当たりはない。愛香がステップを間違えること自体、珍しいことだが、画面は意味ありげに、その場面で切られた)

この不正アクセスでは、デーモンスピリットなどと、悪意に充ちた解説も加えられていた。英輔はとても嫌な気持ちになったが、考えを改めた。このような画像が送られてきた事実について考えると、愛香が生きている可能性もあるということを示唆していた。

何らかの事件に愛香が巻き込まれた？そのような考えも成立し得た。

(愛香は生きています。そう確信することから、愛香失踪事件には取り組まなくては。それがいまのぼくに与えられた使命なんだ。何者が企んだことなのかは、いまは、見当もつかないが…)

英輔はあらためて自分に言い聞かせたが、搜索行を進める方法はなく、相手の出方を待つしか、いまは、英輔の取るべき手段はなかった。

愛香の搜索に加わっているうちに、『バーチャルマン計画』の実行にも支障が出ていた。全計画の完成前に、逐次、シミュレーションデータは、スポンサーでもあるアメリカのアリア科学医療財団に、インターネットを利用して送ることになっていた。その作業が大幅に遅れていたのだ。

現在、英輔の手元にあるのは、バーチャル体化された人体の解剖標本だった。一ミ60

リごとに、裁断した人体のスライスの一つにつき合わせた動線の立体図と、C・G（コンピュータ・グラフィック）を使って臓器の一部を、バーチャル体から、切り離し、独立体にした画像がいくつか用意されていた。これらは、各臓器チェックの際の基礎データとなるはずだった。

もつと、研究がすすめば、患者の各臓器ごとに、病巣位置、状態を確認したり、また、シミュレーション手術を行うことで、手術に確実性を期せるという利点もあった。

それらをソフト化する作業が、これから、控えていたが、いまの英輔には時間もなく、データの多くはそのままにされていた。

だが、この夜、英輔は寸時を惜しみ、インターネットで、これまで得た情報の一部を、アリア科学医療財団に送った。これとて、貴重な資料となるはずだった。冷凍体をスライス切断し、デジタル写真化、線描段階まで、仕上げたものと、各臓器の取りだし画像の一部などが、ひとまず、アリア科学医療財団に保存される措置が取られた。

夜半まで掛かり、英輔が眠ったのは夜半のことだった。色々な思いが交錯し、やはり、眠れない夜となった。それでも、英輔はここ数日の疲れのために、ふーと寝入った。

どのような状況の中に自分が身を置いているのかさえ、わからぬままに、英輔は夢を見ていた。

真つ暗闇の場面があり、一人の女がその闇の奥に蹲（うづくま）っていた。どうやら、洞窟のような場所に閉じ込められているらしい。小さな点景なので、状況はいまひとつ掴めなかったが、そのうち、夢を見ている者にも、おおよその様子がわかってきた。

女は白い花を手に使っていた。こちらに向かって歩いてきた。が、その歩みは遅く、誰だか知ろうと英輔の気持ちが向いているのに、なかなか、はっきりとは姿を現さなかった。

いつか、夢の中の英輔は「愛香、愛香じゃないのか」と、その登場人物の女に声を掛けていた。

と、声を掛けるうちに、女が手にしているのが、あの白いユリの花だということが、英輔にはわかった。それから、女は花を手にしたまま、助けを求めるように、英輔の方に向けて、両手を差し出した。その動きをした時、白いユリの花が女の手から落ちた。

「愛香、愛香…」

と、英輔は女に呼び掛けた。

英輔の頭のどこかには、涸れた花のイメージが介在した。落ちた花は命を失った花だと、英輔は思った。その思いが兆した瞬間、どういうわけか、状景全体が紫色の暗い影のようなものに覆われた。と、ふつと、夢の中から愛香とおぼしき女の姿が消えた。

「愛香、愛香…」

と、英輔が叫んだ時、もう、夢から覚めていた。ぼんやりした頭であたりを見回した。

（何だ。夢だったのか…）

そう呟いた英輔だったが、なぜなのか、部屋全体が紫色の暗い光に包まれているのに気づいた。パソコンルームで毛布に包まり、寝ていたので、パソコン機器の置かれたあたりに、英輔は目をやった。

と、スイッチはOFFしたはずなのに、パソコン画面はONの状態にあり、その画面から紫色のオーラ光が放たれていた。いつか、携帯電話越しに、異常事態が起きた時と同

じ現象がここでも発生していた。

(また、幽霊通信なのか？これは一体どういうことなんだ)

再度のことなので、英輔は身構えた。

が、英輔の目覚めを待っていたように、紫色だけの画面だったものが、急に、英輔がいつも見慣れた画像に変わった。

こちらは、英輔には心当たりのある画像だった。仮想空間のバーチャル少女『MIHANA』ちゃんが「エイスケさん、MIHANA一人ぼっちですごく淋しいの」と語り掛けて来た。これまでには、にこっと笑った笑顔や、片エクボが可愛いかったのに、誰がそんなMIHANAを作り出したのか、MIHANAは眼の端に涙をためており、とても悲しそうな顔をしていた。

「どうして、こんなことになってしまったのか…」

英輔はとてもしやな気持ちになり、画像を見ることを中断したくなった。が、そんな気持ちを見無視するかのような画面が次に用意された。画像の技法処理により、画面全体が渦を巻き、中心点に向けて集まった。

場面転換の技法の一つのようだった。

バーチャル画像ではなく、画面は実写の画像にすり替えられた。

背景は暗く、どことも知れなかった。MIHANAを思わせるその顔には仮面をつけているような白いおしろいが塗りとくられており、いつの間にか、裸身にされていた。その裸身は白く塗りたくられていた。それから、そのいでたちが、死化粧であることに、英輔は直ぐに気づいた。その上、MIHANAは白いユリの花を手にし、その場に立っていた。

この画面に現れたMIHANAが愛香そのものであることに、英輔は気づいていた。

すべての印象、そして、白いユリの花を手に行っていることで、解剖資料館に二人で足を踏み入れた時のシーンを英輔は思い出した。

あの時、愛香はその白いユリの花を水のない一輪挿しの花器に活け、そのまま放置した。暗い解剖資料館の闇にひっそり、それも、いつときだけ妖しく咲く花、そのままだと涸れてしまうのを承知で愛香はそのような行動に出た。小道具のユリの花の意味を知っているのは、この場合、愛香しかいなかった。それとも、悪意の第三者に、愛香がユリの花の存在についてしゃべり、意図的にこのようなシーンが送りつけられることになったのか？

「縁起でもない。このシーンを送りつけてきた誰かは、何らかの事件に巻き込まれたかも知れない愛香が、すでに、殺されていることをこのぼくに通報しようとして、このような手段に出てきたのか？」

が、そのような思いを巡らせるのもそこまでだった。それからのシーンはもっと過激なものになっていった。

写真撮影する時のフラッシュが焚かれており、時折り、画面には眩い閃光が走った。カメラを構えた何者かが、そばにいて、この場面を撮影していると思われる。

MIHANAは、ぽあつと口を開き、喘ぎの声を出した。裸身が浮き沈みし、下半身がぐねぐねと動いた。

「こんなあられもない場面を演じるのは、MMIHANAでもなければ、愛香でもない」
英輔は一人呟き、瞼を閉じた。

だが、次の場面がやはり気になった。

そーと目を開けた。バスト八十の乳房が儂げに揺れていた。

「英輔さん、MIHANAはあなたに抱き締めて欲しいの。あなたのその優しい愛撫をいつも待ち続けてきたのよ」

バーチャル少女の役を演じている愛香そのものの声に思え、英輔はなお画面に吸い寄せられた。すーと、カメラは引かれ、そして、MIHANAの股間を映し出した。何のつもりか、一旦、アップ画面になり、下腹部にも、白いおしろいが塗られているのに、猛々しい感じのアンダーヘヤーの部分だけが、わざとらしく、画面には映し出された。

いつも、バーチャル少女MIHANAと、ソフトの上で遊ぶ時は、英輔は儂げに生えそめているそのアンダーヘヤーさえ、C・G処理上とは言え、無毛の状態にしてきた。黒い飾りに覆われた女の股間に対して、英輔は一種の嫌悪感のようなものを持ち続けてきた。その性癖までも相手は知っているのか、わざとらしい演出ぶりだった。

パソコンに写った画像とは言え、余りにも生々しい印象のMIHANAが、いまは画面に登場していた。

英輔は本当に画面を切りたくなかった。

が、画面上のMIHANAが次に語り掛けてきた言葉に、英輔はスイッチが切れなくなっ

た。「エイスケ、エイスケ、ワタシノアイガシンデイクワ。コノママデハネ。デモ、モウオソイノカモシレナイ。ワタシ、ホカノヒトヲスキニナツテシマッタノ」

英輔はわが耳を疑った。

エイスケなどと、これまでバーチャル少女には呼び捨てにされたことはなかった。それに、いまは完全にMIHANAが愛香自身であることを、英輔は疑っていなかった。そもそも、バーチャル少女MIHANAに恋をしたのは、その顔、体型、全体の印象が余りにも愛香に酷似していたからのことだった。

だが、いくら、愛の行為を求められても、MIHANAは、所詮はバーチャル空間に存在している少女、いま、英輔がその求めに応じられるわけはなかった。

「これが、愛香だとしたら…」

動揺した心のまま、英輔は呟いた。

(もう、これ以上は見えてはられない。美少女MIHANAだけでなく、愛香までもが、この画像を送りつけてきた者の悪意によって、穢されてしまった。このモデルが愛香自身だとしたら…。ぼくはこんな愛香は許せない。ぼくの愛を愛香は裏切ったことにはならないのか。他の男を愛してしまったなどと、臆面もなくMIHANAは口にした。MIHANAは愛香なんかじゃない。これは、バーチャルの世界の絵兎事なんだ。誰かの悪質ないたずらなんだ) 英輔がそのように頭を巡らせ始めた時、何の予告もなしにパソコンの画面はふつんと切れた。同時に、紫色のオーラ光も消えた。

見えない闇に向けて、英輔は一人語り掛けた。怒りの感情も沸いて出た。

愛香は何者かによって連れ去られ、いま、その事件に巻き込まれている？その可能性はもはや疑うべくもなかった。

敵は誰なのか？そして、何の目的があつて、英輔と愛香がターゲットになったのか？63

(：：)：そうなのか。何の関係もないみたいだが、根本助教授が口にしたことも気になる。あの死刑囚がこの世に蘇った？これはあり得ない話だが、現に、得体の知れない幽霊通信のようなものが、ぼくのところにも届けられているこの事実はどう考えればいいのか。いやいや、この話と、愛香の失踪騒ぎが関係あるなんて、そんなことを考えること自体、ナンセンスなことではないのか。幽霊だなんて。ぼくの頭も普通の状態じゃないってことだ。携帯電話の件は、あれは機器の故障、それともぼくの目の錯覚だったのかも知れない。パソコンだって、スイッチをつけ忘れていたのでは。悪い夢を見たあと、きつと、頭が正常じゃなかったんだ。英輔は混乱した頭の中で、無理やりに、そんな文句を自分に言い聞かせた。

ただ、一つ、英輔は希望点を見出した。雪山で雪崩れ事故に遭い、愛香は遭難したのではなくて、誰かに連れ去られた？そのように考えると、愛香の失踪事件、そして、この悪意の画像が送られてきたことに、自分なりの納得点を見つけ出すことができた。

初めに、何をなすべきか。

英輔は愛香が動物写真作家、瀬野レオの周辺を、まず、洗うことから始めようと思った。その正体を暴くことができれば、愛香捜索に何らかの進展が見られるかも知れなかった。忙しい時間を割いての捜索行、どこまで相手に迫れるかはわからなかったが、そんなことは言っていられなかった。

英輔は決意を新たにした。愛香の消息、そして、愛香との愛、この行方をいまこそ、はっきりとしなければならぬ時機にきていた。

1

第五章 多重憑霊者

明るい空間なので、死体が置かれていても、病院の一室のように、J Eステーションの作業場は見えた。今日も、宇野が一人、J Eステーションには詰めていた。

都会の一角、ビルの地下室に、死体の修復、修元を行う施設が存在すること自体、不思議なことであったが、これは世の中の流れが作り出したことであった。

葬儀事情も、色々と変化をされていて、商社員などが、海外で死亡した場合、または、外国人が日本で死亡した場合、遺体に防腐処置を施す必要性があり、このような施設が認知されることとなった。J Eステーションも国内にあるそんな施設の一つであった。

もともと、宇野はまったく別の目的で、エンバーマーとなった。その心のうちは誰も知らなかったが、死体に対する宇野の一種のこだわりは特異で、その完璧さを目指す

やり方も、通常とは異なっていた。

「可哀想に、可哀想に…」

と、すでに、防腐処置をされた一体の死体を前に、宇野は呟いた。

なぜだか、その声は少年そのものの声であった。オペ用キャップに白衣のいでたち、宇野はいっぱしの施術者に見えたが、顔つきまでもが、いまは少年になっていた。

多重人格者の性癖を持つ宇野の心の一部が、この時は、宇野の身の上に表出していたのであった。

その理由については、これからの、宇野自身の死体を扱う作業の過程で明らかにされていくことであった。女性の死体に接する時の宇野の態度には、明らかに別人格が表れるのであった。

個室仕様の部屋の一つにその女性の死体は持ち込まれていた。二十五、六歳頃と思われる女性で、酷いことに、その女の両方の乳首は噛み切られており、そして、下腹部にはメスで深く抉られた跡が残っていた。

女の名は斉木加津子と言った。

「幽霊男」が凌辱の末、残忍な方法で殺害した最初の犠牲者であった。

「お母さん、ぼくがあなたの体を、元の通りにきれいにしてみせます。もう、しばらくの間、がまんして下さい」

宇野が見えない誰かに語り掛けた。この場にそぐわないそれは台詞だった。

虚ろな表情のまま、あらぬ空間を宇野は見つめた。やはり、少年の声であることには変りはなかった。その割りに言葉だけははつきりしていて、奇異な感じを受けた。

宇野は一体の若い女性の死体に対した。その死体に語り掛けたようだった。

宇野のまじめぶりがそこでは示された。

オペレーション・テーブルの上で、あおむけに寝かされた死体は、両目をかっと思開いたままだった。

その脛のあたりに、薄いピンク色の注射液を宇野はまず注入した。そのあたりの筋肉をやわらげ、そして、生色に近い皮膚の状態に保つためのそれは処置だった。

「そうなんだよ。ぼくが大好きだったお母さん…あれから何年が経つのだろう。いまも、ぼくはお母さんの…」

あとはぶつぶつとした呟きの文句になった。誰にも聞き取れない、それは心の呟きなのか、言葉の意味をなしていなかった。少年の語り口だけは変ることはなかったが…。

宇野の端正な顔立ちがとても悲しそうになり、その眼（まなこ）は、なお、定まらないものとなった。少年のような眼差しも、その目の内には窺えた。

《遠い日の夏のことだった》

宇野俊光は六歳の誕生日を迎えた。

母親の綾子は三十三歳、事情があつて、父親はその当時、すでにいず、子供を抱えた母親は暮らしにも困っていて、その点では、少年もいい思いを余りしたことはなかった。

小学校一年生になった夏休み、母子は山間にあるキャンプ場のロッジで宿泊をした。客を呼ぶ施設ではなく、そのロッジは廃棄されており、寝泊りできる状態ではなかった。

母親が用意したいくらかの食料や飲み物だけの意味ありげな貧しい一泊旅行だったが、それでも、少年は山の自然と向かい合うことで、とても、楽しい時間を過ごした。

母親がその時、何を考えていたのか。

少年なりに、母親の気持ちがわからなかったわけではない。もしかしたら、母親は自殺のことも考えていて、この山中に二人はやって来た？少年にもそれぐらいのことは推し量れた。

だが、母親と一緒にいられるだけで、少年は満足していた。ただ、母親に甘えていた。そして：夏の夜が訪れた。

ぐっすりと寝入っていた少年が異変を感じ取った時、回りの状況は一変していた。

少年が目を覚ましたのは、何やら、生々しい呻きの声を耳近くで聞き取ったからだ。

初めは、恐ろしくて、少年は目を開けられなかった。

が、男の声の時々、混じり、そして、母親がその男に襲われていると知った時、少年は勇を奮って、目を開け、起きている事態を確かめようとした。

男の背が見えた。漏れ入っている月明りの下で、母親は組み伏せられていた。男が腰を前後させる度に、母親の乳房がぶわぶわと翻った。

それらの状況が少年にはゆっくり動いて見えた。それは、現実には起きていない事態だと、少年が認めるには時間を要したからだった。

母親の返しの声が、耳についた。

「うっ、うっ」

と、腰が揺すられるごとに、母親の声は次第に苦しげなものに変わっていった。

少年には母親を助けねばという思いはあるのだが、自分の体も何者かに、襲われているように、体の自由が奪われていた。

母親の白い両足が跳ね、一声高い呻きの声が発せられた時、男も何やら、獣じみた声を発した。

その直後に、惨劇がこの場に用意された。

「ガキを生んだ女なんて、ちっともよくねえな。俺様のいつものやり方で、傷めつけてやるか」

そのような文句を浴びせると、男は母親の乳首に噛みついた。男が左右に首を振った。

「ぎゃーっ」

と、母親が叫び、男を払いのけて逃げようとしたが、母親の体の上に馬乗りになった男は、次には、刃物を手にしていた。鈍い光が闇の中で閃いた。母親の下腹部に男は刃を突き立てていた。

「ぎゃうっ」

と断末魔の声を母親が発した。

そのまま、母親は気を失ってしまったようだった。そして、暴漢の男はそのままロツジを出て行った。

足音が遠ざかるまで少年はその場にじっとし息を殺していた。

「お母さん……」

やっと、少年は母親のそばまでにじり寄った。おびただしい血が板床の上に流れていた。その血は止まることなく、流れ続けた。

深く抉られた母親の下腹部から、あとから、あとから、血が溢れ出た。

母親の体を何度も揺さぶっているうちに、母親が虫の息の下で、うつすらと目を開けた。「俊光、何とかして。お母さんのこの体、何とかして…」

だが、やがてのこと、母親が繰り返す「何とかして」の言葉は、次第に小さくなって行った。その呟きを少年に伝えながら母親はそのまま事切れた。

そして、夏の朝明けが、いつものように、山間の地にもやって来た。

血にまみれた母親の死体を前に、少年はなすすべもなく、自分の目の前の情景を見ていた。自分自身を取り戻すために、どれくらい時間が掛かったのかさえ、少年は覚えてはいなかった。

気がついてみると、少年は母親の乳房をまさぐっていた。自分の好きな母親の乳房を手の平に包み込み、そして、乳房のあたりに口をつけていた。

だが、男が喰い千切ったのか、乳首を口に含むことは適わなかった。

少年にはそんな事態すら判断する能力はなく、凝血したその跡に口をつけたまま、赤子に返ったように、ちゅうちゅうと乳首の痕跡を残すあたりを少年は夢中で吸っていた。腹を空かした幼子のように…。

なんどきが、経過したのか、やっと、我れに返った時、少年は余りに無残な母親の死体を前に、ただ、ただ、泣きじやくった。

山中に一人取り残された少年は放心したまま、数日をこのロッジで過ごした。

その昼と夜の交わりの中で、少年は日々腐り果てていく死体というものを、つぶさに眺めやり、時の流れの中に身を置いた。

初めは現実のことではないと、自分に言い聞かせ、この過酷な状況を忘れようとした。

しかし、母親のはらわたが腐り、異臭を放ち始めた時、少年は起きている状況を認めざるを得なくなった。

いや、この過酷な現実から逃避するために、少年はギンバエがたかり始めた母親の死体に對して、口癖のように一つのことを、語り続けた。

「お母さん、ボクがお母さんの体を元のように、きれいにするよ。ぼくの好きなお母さんの顔や、乳房や、体はこんなじゃない。とつても素敵なお母さんの笑顔だって、ぼくの頭を撫でてくれたこのやさしさい手だって、とつても、暖かかった。それなのに…。こんなお母さんはお母さんじゃない。そうだ。お母さんは、俊光、お母さんの体を何とかして。お母さんの体を何とかして」と、命を引き取る前に、何度もボクに願い事をした。ボクはお母さんに約束するよ。そうだよ。お母さんの願い通り、ボクがお母さんの体を元通りに、きれいにしてあげるからね」

少年は母親の変り果てた死体の前で、何度も誓いを立てた。それは夢想の世界のことではあったが…。

非現実の世界から、事件の起きた数日後に、少年は救出された。だが、心に負った傷は癒されることはなかった。

その凌辱殺人犯は未だ捕まっていないが、一日とて、その後、少年はこの時の暴漢の仕事を忘れたことはなかった。

長じて、この少年はアメリカに渡り、エンバーになるべく、葬儀大学(モーチュアリー・カレッジ)に入り、死体を扱うための研修を積み、エンバーマー・ライセンスを取得した。実際に、アメリカの葬儀会社(モーチアリー)で、実地研修の期間も過ごした。

それもこれも、宇野が目的としてきたのは、この幼児期に負った心の傷を、自らも癒したいと考えたからのことだった。

そのためには、母親の肉体そのものを、この世に美しいままで蘇らせることが、宇野の生きる目的の一つとなったのであった。

アメリカでの研修の過程で、一つ、一つ、いくつもの死体に接し、生きている者のように美しく死体を仕上げることで、宇野はいつしか《死体そのものを愛する人間》にとなっていた。

生きている者のように、美しい死体を、自分の手で生み出すこと、その自分に課せられた使命のために、宇野は自らの意志で《死体化粧人》の道を選んだのであった。

2

オペレーション・テーブルの上にあお向けに寝かされていたのは、斉木加津子だった。「幽霊男」の瞬間移動(テレポーション)の術によつて、この死体はJ.E.ステーションに運び込まれた。

話の流れでは、この女が凌辱され、殺害された現場に宇野もいたことになるが、それらの事実については、宇野は一切覚えてはいなかった。

いま、宇野が認識しているのは、一体の女性の死体が目の前にあり、両方の乳首が喰いちぎられた状態にあり、そして、下腹部にも深い傷跡が残されているということだった。

もう一つ、宇野の精神の世界のことに触れれば、この若い女性の死体は、いまは宇野には自分の母親の死体そのものに見えているということだった。

「可哀想に……」

と、また、少年の声を出し、宇野は呟いた。

まず、死体を浄める清拭(せいしき)をほどこすように、全身を消毒液の染みたまップで拭き清めた。手の先から足の先まで、傷口の血もきれいに拭き取った。

それから、死体が腐乱しないように、宇野はいつものやり方で、血管内に防腐剤の薬液をポンプを使い、注入し、そして、洗浄した。

何時間かが経過した。トリートメント効果のある薬剤も用いたので、次第に、死体の肌は生色を取り戻して行った。

その間、宇野はさも愛おしそうに、女性の髪を撫で、そして、手を握り締め、その死顔をいつまでも眺めやった。

数時間後、宇野は死体の傷つけられた部分の修復に掛かった。

便利台(ユートリティ・テーブル)の上には、メス、ピンセット、鉗(スチザー)、ハリ、注射器、縫合糸(スワード)、それに、石膏や粘土、シリコン材などの造型、復元用に使う工作物なども揃えられており、また、化粧道具も一式用意されていた。

初めに、宇野は死体の修復に取り掛かった。

多量の出血をしたことで、乳房はへこんだまの状態にあった。注射器にシリコン剤を取り込み、乳房に注入、美容整形手術さながらに、宇野は乳房のかたちを元に戻した。やっと、乳房は女らしいかたちを取り戻した。

それから、宇野は縫合糸を器用に使いこなし、わずかにくつついているだけの状態になっていた乳首を元の位置に戻し、縫い合わせた。縫い跡が見えないように、化粧道具を手にする、ていねいに、肌のファンデーションを何重にも塗り込んだ。

下腹部の修復にはずいぶん時間を掛けた。

「幽霊男」が女の体を弄んだ分だけ、時間を要した。いくらうまくやっても、傷跡は隠すことはできなかったが、それでも、死体からは痛々しさの印象は和らげられた。

次に、宇野は死体の女の顔に化粧をほどこした。いわゆる死化粧だったが、宇野の思い入れの分、おしろいを重ねるうちに、女の顔は仮面をかぶっているような面(おもて)になった。異様ではあったが、これが宇野の化粧法だった。

口紅を手になると、宇野はまず自分の唇に紅を引き、その伸び具合を確かめた。手の甲にも何本かの印をつけた。血が流れているように筋がついた。ローズピンクのやや赤みの強い色で、白いおしろい顔には、その一点だけが鮮やかな生きている色となった。

誰も、この場にいたわけではないが、宇野の唇に引かれたローズピンクの生色は、やはり、異様であった。

眉間に刻まれた縦筋と、あらぬ空間を見つめている眼差しも、宇野の心の状態を表していたが、当人はただ夢中ぶりを示した。

およそ、五、六時間ほどの間、宇野は女の死体にそうやって付き合った。

やっと、仕事人の宇野が満足した顔つきになった時、凌辱された末に酷い殺され方をした齊木加津子は安らかに眠っている女の顔になった。

宇野の顔も、和やかなものになった。いまにも死体の唇に口づけをせんばかりに、近づき、宇野は頬を寄せた。

死体の女なのに、自分の恋人に接するような甘やいだ表情を宇野は見せた。

それから、やさしい少年の口調で、死体の女に宇野は語り掛けた。

「お母さん、お母さんがボクに願う事を懸けた通りに、ほら、お母さんは元のままのきれいなお母さんになりましたよ。いまもボクはお母さんがとても好きです。きれいなお母さんのままでいつまでもいて欲しいのです。そう。このいまのままのお母さんなら、もう、どこにも行くことはないし、ボクと悲しい別れをしなくともすみます。お母さんは永遠にきれいなままで、ボクのそばにいてくれるのです」

もの憂い口調だったが、その口ぶりは、やさしい少年の心根を表わしていた。

一通り、しゃべり掛けが終わったあと、宇野は自分の作品をメモでもしておくつもりか、CCD搭載のデジタルカメラを取り出し、手にした。

「カシャ、カシャ…」

と、対象物を犯し続けるようなシャッター音が室内に響き渡った。その度に、フラッシュの閃光が瞬いた。

あらゆるアングル、遠近の距離から、宇野は被写体を狙った。とても、際どいアングルのカメラ・アイも含まれた。

そのあと、女の死体は別室の冷凍設備の整った場所に運ばれた。裸のまま、斉木加津子の死体は美しい飾り物の一つにされた。その部屋の隅には、いくつかの小動物などの剥製品も並べられており、その中には愛香が英輔を通して預けたコノハズクの剥製も飾られていた。

3

「先生、そのようなことが起きるなんて、ぼくはそんなこと信じたくありませんよ。先生が毎夜、毎夜、幽霊に悩まされているなんて」

「いや、本当なんだ。自宅にいと一人でいやなものだから、このところ、研究室で寝泊りをするようになった」

二人は大学の研究室で向かい合っていた。

英輔の知らないことも含めて、根本助教が、これまでの経過を一通り説明をした。

『バーチャルマン計画』プロジェクトの献体となった男は、正確には死刑執行場での死亡は確認されていず、J Eステーション内で、まだ、命があるうちに、処置されたこと。

また、処刑時に、死刑囚佐川洋次郎が恨みがましいことを言ったこと。

そして、死刑執行場の地下室から湧き出る《紫魂水》の霊力を信じていたその男がその力を借りて、この世に化けて出てやると、宣言していたことなどを、根本は英輔に話をした。

「君がどう言おうと事実なんだ。わたしはそやつの亡霊に取り憑かれていて……」

根本はげっそりと痩せ、青白い顔をしていた。その顔色を読めば、この話が嘘ではないことが英輔にもわかったが、かといって、この話に同調する気にもなれなかった。

英輔は幽霊の実体を見たわけではないが、紫色の光のようなものが、電話を通して流れたり、パソコンの画面に同様の現象が現れたり、不思議な体験はしていたが、いまはそれらのことを打ち消したい思いの方が強かった。

医師でもあるので、そのような非科学的な現象は素直には認めたくないという考えも手伝っていた。

「これは、その、見当違いのことなら、申し訳ないことだが、愛香さんが行方不明になっている件だが、その、何だ。もしかしたら、この恨み話と関係のあることかも知れない」

「愛香の行方が知れないことと、先生のおっしゃる幽霊話の関係ありますか？愛香が恨みを受ける理由は何一つ、ありませんからね。ぼくはそんなこと信じる気はありません」

「やつは『バーチャルマン計画』に、参画した者はみんな罰を加えてやると、わたしに宣言したんだ。そうだとすれば、君だって、その一員だ。そして、関係者と言えば、愛香さんだって、そのとぼちちりを受けないとも限らない。君はあの男の死に直接には手を下したわけじゃないが、考えられない話じゃないんだ」

「ぼくはそれどころじゃありませんよ。愛香の行方を探すために、『バーチャルマン計画』の仕事の方も、一時、休ませてもらいたいと思っっているぐらいです。もちろん、ぼくの置かれている緊急の状況が変れば、協力させていただくのは当然ですが」

「うーむ。ま、それは止むをえないことではあるがね。しかし、わたしの方が緊急を要しているのは確かだ」

腕組みをしたまま根本は言った。

「ぼくが当面している問題についても、根本助教授にはわかっていただかないと」
そう前置きしてから、英輔は現在の愛香探索の状況を根本に伝えた。

不審人物の動物写真家の瀬野レオの身辺を探っていること。

湯沢スキー場では、その後、雪崩れ現場の捜索を引き続き行っているが、遭難した者の痕跡などはなく、警察にも失踪届けを出したが、何も愛香の失踪についての情報は入っていないこと。

しかし、不審の画像が送りつけられてきたことは、英輔は誰にも言っただけでいかなかった。バーチャル少女に恋をしている自分の未熟さを他人に知られたくないという思いと、その画面には愛香の裸身らしきものが写っていることから、第三者には知られたくないという気持ちも英輔は持ち合わせていた。

「ぼくは今夜は家で、愛香の探索のことでやることがあるので、これで失礼します」

「何を言っている。今夜は君にわたしを守ってもらいたいと思っただけで、この研究室に呼んだんだ。帰らないでくれ。実際に、目の前に現われる幽霊野郎を見たら、君だって起きている事態が把握できるはずだ。わたしに対する態度も変わってくるに違いない」

「いえ、ぼくには愛香のことが…」

「じゃあ、もう一つだけ言うが、その死刑囚と関係のある拘置所所長と、その場に立ち合った山浦という名の看守が、その後、行方不明になっている。生かされているのか、殺されているのかもわからない。だが、その幽霊野郎は、このわたしに、二人とも殺したようなことを言った。わたしは事実だと思う。現に二人は行方不明、これは事実だよ。そして、次はわたしが殺される番なんだよ。だから君に助けてくれと言っているんだ」

根本が必死になり英輔に訴えた。

「警察はその行方不明事件については、捜索中なんですか？」

「いや、死体のある事件じゃないからね。いまの状況は、謎の失踪事件として扱われているだけのようだ。その、何だ。わたしの回りに起きている失踪事件だが、愛香さんもそうだとしたら、三件、余りにも、似たケースだとは思わんかね」

「それはそうですけど…。と、言っても、何も確かな情報は得られていないのでしよう？」

「だから、言っているんだ。君自身が幽霊野郎と遭遇すれば、すべていまの状況が見えてくるかも知れないって」

だが、英輔としては、根本の言う、このような話に乗るわけにはいかなかった。自分自身の抱えている問題の方が、遙かに、大きなウエイトを占めていた。

懸命になり、英輔を押し留めようとする根本を振り切り、英輔は研究室をあとにした。

午前二時、ものみな寝静まった頃、今夜も、街の一角に姿を現した者がいた。

どこから沸いて出るのか、「幽霊男」がわがもの顔に街を闊歩(かつぽ)し始めた。

J Eステーションの建物内に、今夜は招待された者がいた。東上大学助教授の根本がよろした足取りで、一步、二歩と歩き、さつき、吸い込まれるように、明りの消えた71

施設内に足を踏み入れた。

先程までは、大学の研究室に英輔と共に居たのだが、その後、「幽霊男」に遠隔操作され、根本は夜の街に誘い出されたのだ。

「わたしは、わたしは何もしてはいないよ。ど、どうして、こ、こんなところに……。よりによって、自分の足でこんな場所にやって来るなんて……。これも、あの死刑囚の男が、わたしを、いつものように……」

とまで、根本が呟いた時、「幽霊男」が根本の背後から声を掛けた。
「いつものようにだと？今夜はお前の血など吸うつもりはないぜ」

驚いた根本が振り向くと、直ぐ後ろの壁に吸いつくような感じで、幽霊体が張りついていてた。暗紫色のその幽霊体は全身のスライス跡が今夜はいやにはつきりして見えた。

一ミリ単位で刻まれた自分の体の扱いのことを、相手に伝えたいのか、「幽霊男」は輪切り状の部分を、少しずつ、ずらせるようにしたので、息をつく度に、その線状の部分は鋭い刃物の切り口のように動いた。

そのまま、スライス片がすべると、その刃物様のものが飛んできて、いまにも、ぎくつと、根本の体を切り裂くかのようだった。

その状況を目にし、根本はすっかり腰ぐだけになった。「幽霊男」の姿を見まいとして目をそらせたが、何か、柔らかな物が顔にまとわりついたので、根本は思わず目を開けてしまった。

「幽霊男」の垂れ下がった左目の内直筋が長いひも状になり、根本の額に張りついたと思うと、ずるつとすべり次に首に巻きついた。

「うへっ、ううっ」

そのひも状のものを取り外そうとし、根本は手を伸ばそうとしたが、不動金縛りにでも遭っているのか、体が硬直していた。

それどころか、ぬるぬるした感触のその物体は、根本が苦しそうにもがくのを楽しむかのように、時折り、ぎゅぎゅつと強く根本の首を締めた。

もう、声も出せず、根本は半ば白目を剥いたまま、空中遊泳でもしているように、手足を伸ばした。今度はその手足に、柔らかなひも状のものはまとわりついた。縛られているのと同じ状態だった。ぐいっと引きずられた。ひも状のものには力があり、それは囚人を引き立てる時の腰縄の役目をした。

「どうだ？俺様と同じ経験ができるなんて、やっぱ、生きていてよかったよな。ご案内する場所はと、へへ、同じ経験と言えば、説明することもないだろうよ。てめえの作った仕掛けに嵌るって趣向はどうだ？罫を掛けた奴が自分の罫に嵌るって話だが、お前には格好の仕掛け舞台があるってことよ」

「幽霊男」はのっそりと動いた。暗紫色の幽霊体が壁に大きな影を作った。ぶわぶわと揺れ動いていた。

「幽霊男」が自分の前にいるのか、後ろにいるのか、確かめる勇氣もないままに、目をつぶった状態で根本は引き立てられて行った。

時間を掛けて、のろのろと歩かされている分だけ、根本の恐怖感は増した。

いつくつかの部屋を通り過ぎた。急に、根本はある部屋の中に連れ込まれた。

「おい、ちよいと寄り道だ。臆病者、ちゃんと目を開けろよ。いいものを見せてやるよ」
「幽霊男」は言う、ぬらぬらしたひも状の手を使い、固く閉じていた根本の瞼を無理やりこじ開けた。

「うおっ」

と、根本は一声発した。

目の前に指し示されている対象物に息を呑んだ。オペレーション・テーブルの上に、裸体の女の死体がお向けに寝かされた状態で置かれていた。

闇の中だが、「幽霊男」の全身が発する暗紫色の光にあぶり出されたその死体は、乳房の部分と、下腹部に傷を負った跡があった。

「こいつが、いっぞや言った芥木加津子だ。男の順番をつけやがって、俺様を粗末に扱った女さ。散々、やりまくってから、乳首を噛みきり、下っ腹を裂いてやった。でもよ。宇野の野郎が、この死体を修理しちまった。これがあいつの趣味なんだよな。それを自分の使命感にしてあいつは生きているようだぜ。あいつの心の中の叫びが俺様には大体のところはわかるんだよ。俺様の一部はあいつと合体しているわけだからな。ずたずたに切り裂かれた女を、一人でも多く、エンバーマーの俺んところによこしてくれて、あいつの心が、俺様に命令するんだ。そりやそうだ。せつかくの死体修理の技も死体がなけりや、宝の持ち腐れ、ま、俺様とあいつはお互いマッチポンプ、俺様が火をつけて、あいつが消す、いまのところは、二人はとつてもいい関係にあるのさ」

「幽霊男」は得意げに語り、宇野の人間像についても、解説をしてみせた。

もの言わぬ死体は死化粧をほどこされていたので、見ようによっては生きている人間のようにも見えた。

根本は恐る恐る死体の女の全身を眺めた。乳房もふっくらとしており、傷つけられた下腹部も傷を隠すためのファンデーションがほどこされていたので、痛々しい感じはなかった。

しかし、ぱっちり開いた両目はやはり、一点を見つめたままで、それが死体であることには変りはなかった。

「もう一つ、いいことを、教えてやろうか。あいつ、本当は女を犯したいんじゃないのか。だがな、何やら、ややこしい心の傷とやらがあいつにはあって、その欲望を果たせずにいるようだ。こんなに女の体をきれいに修理するんだから、きつと、死姦趣味でもあるに違いないと思っただが、それがそうじゃない。ね、大学の助教教授先生とやら、いい女を自分好みの女に修理し直して、それで何で、自分のものにしなないのかね」

「そ、それはよくはわからないが、死体愛好趣味の、その、一種かも知れない」

やつと、根本は口がきけるようになった。頭の片隅には「幽霊男」のおしゃべりぶりから、自分はひとまず、救われる機会があるかも知れないという望みを持ち始めていたせいもあった。

「へえー、死体愛好者か。でもよ。あいつの心の中には、六歳の時に、そう、俺様のような婦女凌辱魔に母親を犯され殺された現場に居合わせていたとかで、それで、その時の心の傷とやらを、いまも引きずっているようだぜ。まったく、ややこしい話さ」

「そういうのは、その、多分、トラウマと言って…」

「何だと？トラウマったあ、何のことだ？」

「外傷性的障害と言つて、その、幼児期などに、暴力とか、あ、あの、残酷場面の現場に居合わせたとか、あ、あの…性的暴力などを実際に受けて、そ、その、深い心の傷を負ったとか…」

「そいじや、俺様のような奴がその原因を作り出しているわけだ。言つてみりや、宇野にとつては俺様のような元極悪人は、宿怨の仲つてことになるのだな。えつ、そうだろう」

「そ、それは…」

「幽霊男」は根本に向けてそう問いを發したが、根本はそうだとは言いかねた。相手を怒らせるのは得策ではないと、根本は判断したのだった。自分の命を秤(はかり)に掛けた。

「おもしれえ。そういうのもマツチポップみてえなもんだな。そいじや、もう一つ聞くが、宇野の野郎の心の部分と合致するところがあつて、俺様は幽霊体となることができた。いまは、宇野の肉体も借りている。時々、俺様は自分が宇野自身じゃないかと、思う時がある。それだけじゃない。宇野の野郎も、時々、俺様の心の一部を借りているようなふしがある。別人であつて、そうじゃない。ここういうの、一体何て言えばいいんだ？」

「そ、それは、その、多分、多重人格というか、その、ま、言えば、一種の精神分裂というか。いろんな人格が一人の人間に現れる。ここういうのは、精神学会などでも多くの症例が報告されていて。いや、元々、人間一人の人格には、いくつもの人格があるというのが普通で、そ、その、誰が誰と言う話でも、これはありませんが…」

根本は「幽霊男」に気づかないし、余計なことまで口にした。

「へへえ、それで、お前の、その精神分裂ぶりだが、得意げにしゃべっているその調子で、自分のことを分析すればどうなるんだ？」

「は？そ、それはどういう？…」

「てめえの頭の構造を、一ミリ単位でスライスして、覗いてみればどうなるかと、ここう、聞いているんだよ」

「…」

「そんなこと、できるわけではないよな。だが、医者なら何でもできるんだろ。いやいや、幽霊の俺様に不可能はないつていうことだ。俺様が言うこの意味はわかるだろうな」

その時、「幽霊男」の紫色の舌が何かをなめつくすように、ひろひろと動いたが、根本は死刑宣告を受けた気持ちになり、瞼を固く閉じ、全身を硬直させていた。

「そいじや、第二幕の幕を開けることにしようぜ」

「幽霊男」が根本に次の舞台の場に移動するよう申しつけた。また、根本の首根っこにぬらぬらしたひも状のものがまとわりついた。

「へへ、無人のこの部屋に、どこの誰がこんな立派な殺人機械を持ち込んだかは、先刻、お前は承知だよな。その威力とやらを、ぜひ、お前にも味合ってもらおうと思つているんだが、いま、どうするか、考え中だ。お前の気持ち如何さ。見ろよ。スライスにされた俺様の百七十六分の一のスライス標本とやらが、この部屋には厳重保管されている。ま、自分の体がスライスされたとは言え、ここにあるのは懐かしい気もするが、俺様はそうは思つていない」

コンクリートで固められた部屋は一見倉庫のようにも見えた。

J Eホーム内のいちばん奥まった部屋で、ここには冷凍設備があり、稼動しているので寒かった。その部屋の一隅に、スライス用旋盤機が一台据えられていた。

一体の人体を対象とするために作られたものなので、その目的に合ったサイズとなっていた。高さは二メートル、横が一・五メートルサイズの特種な型の旋盤機であった。

そのかたわらには、一ミリ単位毎に、アクリル製の固定板に収められた人体の横断面部分が、積み重ねられた状態で置かれていた。

透明のアクリル板で保護されていたが、赤みがかった肉の部分と、白い脂身、それに、空洞の部分に埋められた青いゼラチン部分とに分かれていた。

肉体の個所によって、様態は違っていた。頭の部分は丸いかたち、そして、手足はその分、大小の独立部分となり、胴体などと共に裁断され、一枚のスライス板になっていた。

「医学用に役立てるためだど？結構な、台詞じゃねえか。悪行を重ねた死刑囚、世の中の役に立ててやれば、罪の一部も拭えると、お前は考えているようだが、そんなこと、余計なお世話さ。こんなもの、みんな廃棄してもらいたいもんだな。なしの話にしてもらいたのさ。これから、まだ、バーチャル体とかの完全体とやらを作るために、お前ら、医者の中はこのスライス体を弄ぶんだろが。俺様の許可もなしにばちやばちやと、写真まで撮りまくりがあって、おめえら、何様のつもりよっ」

「まだ、その完成したわけでも、あ、ありませんので。何なら、その、今度の計画は止めにしても」

「何を今更、よくもそんなことが言えたもんだぜ。もう、一人いたな。お前の助手とやらいう若い男がよ」

「あ、あの男、その、矢萩君は関係ありません」

「馬鹿言え。そいつも、今度のことには加担しているのだろうが。ま、そいつは、俺様じゃない宇野なにがしが、別の方法で、たっふりと罰しているようだから、俺様としては、その男の命までは奪わないがな」

と、「幽霊男」は根本には意味不明の文句を口にした。「幽霊男」だけが、わかったふうの口をきいた。

宇野の人格の一部を「幽霊男」は述べたのだが、根本には通じない話だった。

それから、根本に電話で矢萩を呼び出すように命じ、医学資料用の献体スライス片のすべてを廃棄する仕事を、矢萩に手伝わせるように「幽霊男」は申し渡した。

5

その頃、英輔は自宅のパソコンルームにいた。この前、不正アクセスが送り届けられたりしたことで、英輔は「バーチャル空間の美少女」M I H A N Aの画像が、その後、どのような展開を見せるのか、その動向に注目していたのだ。

このサイトの情報発信者が送ってくる画像に変化がないかを、チェックするために、今夜も英輔はホームページのメンバーサイトにアクセス、パスワードを打ち込んだ。

いつもの笑顔を振りまくM I H A N Aの可愛い顔が初めに映り、そのキュートな肢体が披露された。今夜のM I H A N Aは、黒いエナメル素材の布地で縁取りされたフロントジップタイプのミニワンピースを着ていた。ぴったり身についたタイトなコスチュームなので、ボディラインが、とても、魅力的だった。

が、そこまでの画面はイントロ部分のようで、MIHANAの笑顔は直ぐに消えた。画面全体も暗くなった。と、そこには涙顔のMIHANAの顔がアップになり写った。

「エイスケ、ワタシタチノアイハモウオシマイヨ。オ・シ・マ・イ・ヨ」

MIHANAが悲しそうな口調でそう告げた。頬に一筋の涙が流れた。

「何を言っているんだ。そんな馬鹿なことが…。MIHANA、何を言っているんだ」

思わず、英輔はバーチャル少女に語り掛けていた。ここには、悲恋の物語が用意されているかのようだった。

が、画面が映ったのは、そこまでで、数秒後、急に画面は乱れ、不意に、MIHANAは画面から消えた。そして、一時、画面に斜線が走った。

また、誰かが、意図的にインターネットの受信を妨害した。やはり、それが合図なのか、紫色の光がパソコン機器全体を包んだ。

と、前回と同じような実写画像がまた送られてきた。カメラのフラッシュが焚かれ、その度に、白い女の全身の裸像が浮き上がった。あぶり出されたその裸身は英輔には前回と同じ女に見えた。

その裸形からして、愛香に似た体型の女であることは間違いなかった。

やはり、全身におしろい様のものが塗りつけられており、それが死化粧を真似たものであることも同じであった。

「これは愛香じゃない」

と、英輔は思わず口にしていた。

明らかに、愛香の清潔そうに見えるそのイメージを損ねるものだった。

その時、真夜中なのに、矢萩英輔の携帯電話が執拗に呼び出し音を奏じ続けた。

さつきから、電話が鳴っていたことは英輔は知っていたが、また、根本助教授のような気がし、幽霊話には付き合ってはられないという思いから放置しておいた。

余りに執拗なので、つい、英輔は電話を手にした。

やはり、電話の相手は根本だった。

「た、助けてくれ。また、あの、その何だ…。わたしは殺されるう」

根本が電話の向こうで切迫した声を上げた。

「何です？また、出たとかいう？」

「そ、そうなんだ。いやいや、その、その相手とこれから交渉するとうか…」

「は？何をです。それに、いま、先生はどこにおられるのですか？」

「あ、シークレットルームだよ。Jエステーションの…」

「どうしてこんな時間にそんな場所には？」

根本の狼狽ぶりに、英輔は止むをえず相手役をつとめた。

「そんなこと。そ、それより、その交渉事だ」

根本が性急に話を持ちかけてきた。

「一体、何を？」

「例のスライス標本だが、わたしの命が助かるのは、スライス標本を全部焼却する方法を選ぶしかないんだ。相手がそういう要求だから」

「それは…、先生、思い直してくださいよ。五体満足の条件を充たしてくる献体はそうは見つかりませんよ。それを、急に、廃棄するなど、ぼくにはそんなことはできません。先生のお考えともぼくには思えません」

「そういうことを言っている場合じゃないんだ。わたしの命が…」

「と、言われても。よくわからない話ですね。いまから、ぼくがそちらに行きましようか？先生とその件については直接、話をする必要がありますね」

「来てくれ。わ、わたしの命を救うためにだよ」

と、根本が重ねてSOSを発した時、手にしていた携帯電話がぶるぶると電気信号でも送られたように震え、そして、急に電話の声の主が変わった。英輔はその電話器が紫色のオーラ光に染められているのに気づいた。

こんな会話をいつまでしていても、埒(らち)があかないと思ったのか、いつの間にか、「幽霊男」が英輔の電話の相手をしていたのだった。くぐもった気味の悪い声が英輔の耳に届けられた。

「おい、矢萩英輔とか言ったな。手短かに話す。一つ、ここに保管されている俺様のスライズ体だが、これは見世物じゃないんだから、お前の手で焼却すること。こんなものただのゴミじゃねえのか。お前が命令に従わないと、いいか、次々に、殺人事件が発生する。それも、婦女凌辱殺人という最悪パターンの殺人事件だ。もう、すでに、その殺人行為は始まっている。それを止められるのはいまのところ、お前しかいないと言っておこう。いいな」

「何を言っているのか。あなたは一体誰なんです？」

「ふふ、正気の奴にはかなわんよ。俺様は死刑囚の佐川洋次郎つてもんだ。元と言い直そう。いまは、根本助教授のご機嫌伺いを楽しみにしている幽霊様だからな。それから、お前に一つ、余計なことを教えてやる。お前の婚約者とかいう女だが、俺様のスーパードラマ透視力を用いれば何でもお見通しさ。女は生きていて、お前の愛とやらを待っているところもありかな。そうだな。どちらの方角かと言えば、北の方角、この季節だから雪が降っていても不思議じゃないってことよ」

「北の方角？それに雪？…」

「へへ、言っておくが、直接的じゃないが、お前も、間接的という意味じゃ、被害者の一人かもな。俺様じゃないが、もう一人の俺様があの女にはご執心でな。もしかして、お前、あの女の裸体ダンスなんぞ鑑賞したところじゃねえのか。まだ、大丈夫だ。あの女は清い処女様のまんまだよ。いまんところは安心していてもいいぜ。もつとも、もう一人の俺様じゃない方の俺様も、あの女を狙ってはいるがな。ま、その話はあとのお楽しみってことにしておこう」

「何を言っているのですか。そんな話、ぼくは聞きたくありません」

「まあま、若いの。気持ちにはわかるがな。これを教えてやったお礼と言っちゃ何だが、俺様の哀れな死体の始末はお前によるらしく頼むぜ。ああ、それから、このあと、幽霊通信を送り届けてやろう。つけっ放しのパソコンの画面に、もう一人の俺様の願いを叶えて、お前の婚約者とかいう女のラブレターの一部を公開してやる。またの再会を俺様としては楽しみにしているよ。ふふ。俺様はいまからやんなくちゃなんないことがあるのさ。さてと掛かるか」

「た、助けてくれえっ」

根本らしい者の叫ぶ声が、その時、電話を通して聞こえてきた。何か、異様な状況がその場に用意されているらしいことは、英輔にもわかった。が、そこで電話は切られた。

「馬鹿な。からかっているつもりか。幽霊と名乗る男が電話をしてくるなんて」
英輔は一人呟いた。

いま、電話を通して伝えられた事柄が、直ぐには英輔には理解できなかった。だいいち、幽霊などと名乗る者が、電話をしてくるなどという話がにわかには信じられるものでもなかった。

だが、「幽霊男」が通報した通り、その時、パソコンの画面には文字が表示された。それも、予告通りのラブレターの一文だった。

『初めて写真展でお会いした時から、わたしはあなた様に心を奪われました。このように手紙を差し上げるのも、これまでのわたしとしてはとても信じられないのですが、一人だけでお会いできる機会を作っていただければ、これほど、嬉しいことはありません。もし、お会いできたら、何から話をしたらいいものか、いまから胸がときめくを感じます。手紙を借りて申し上げれば、可愛い動物写真も、冬の厳しい条件で撮影された作品が多く、自らにも厳しく自然と向かい合っておられるあなた様の男らしい生き方にわたしは心を引かれたということでしょうか（中略）』

その手紙の一字一字に、英輔の目は釘づけになった。間違いなく、その文字は愛香の筆跡だった。ラブレターを送った相手は動物写真家の瀬野レオだということも、英輔にはわかった。いつ頃に出された手紙なのかはわからなかったが、愛香が写真展に顔を出すようになったのは、ほぼ、一年前ほどのことだった。手紙はその時期と同じくして出されたものと思われた。

（愛香が自分から愛の手紙とも思われるこんな手紙を出すなんて。とても、僕には信じられない。これはぼくに対する愛香の裏切り行為だ。どうしてこんなことが……。瀬野レオの男らしい生きかたに賛同しているような文もあるが、このぼくには男らしさがなかったということなのだろうか。男らしさ？ 思い当たることと言えば、二人は婚約者同士なのに、未だ口づけさえしたことのない仲、そんな自分の性向を愛香は不満に思い、こんな行動に出たのか。愛香のいう男の魅力とはそのことも含まれているのか？）

咄嗟に、英輔はそんなことを頭に思い浮かべた。その一文を読み終わった時、パソコンの画面は終了の所定の手続きをしていないのに、ぷつんと切れた。それと同時に、機器全体から放たれていた紫色のオーラ光も消えた。

英輔は現実の世界に戻ろうとして、目を見張り、そして、大きく息を吐いた。頭の中で、いま、起きていることの事態を整理した。

（あの男、もしかしたら、幽霊と名乗っている生きている人間なのではないか？ だとしたら、いま、そやつの顔を見ることのできるチャンスでもあるのだ。愛香に関してもつともらしい情報も口にした。北の方角と雪山？ それらの符号の一致と、さつき目にしたパソコン画面の悪意の情報、愛香の行方について、すべて知っているのはこの男しかいないのでは。それに、根本助教が緊急事態に遭遇しているのは事実のようだ。幽霊と名乗る男の正体を暴くためにも、いつときも早く、ぼくはJESテーションに駆けつけるべきなんだ。なら、ぐ

ずぐずしていることはできない)

真夜中の謎の電話に、触発され、英輔はJ.Eステーションを直接に訪ねる気になった。慌てて、外出着に着替え、英輔は車の止めてある駐車場に急ぎ向かった。

「いまさら、じたばたしても始まらないぞ。いやいや、じたばたしてもらおうじゃねえか。俺様の出番だな。どうぞ、あちらの処刑台にとやさしく声を掛けて、根本助教様をお連れすることにするか」

J.Eステーションのシークレットルームの一隅に備えられたスライス用旋盤機の前に、根本は案内された。自分の足で歩いて行ったのではなく、「幽霊男」の念力操作によって、その体は処刑場へと導かれた。

「た、たのむ。命だけは…」

「いまわの際に何を言っている。自分で考案した特製旋盤機、スライスの刃の切れ具合を確かめる絶好の機会じゃねえのか。俺様は冷たい死体とは言え、カンナで削られるように、ミリ単位で、毎日、毎日、この身をスライスされた。そんな時、俺様は幽霊体ではあったが、そのそばに立ち、毎日、わが身が、スライスされていくのを見ていた。どうする？お前、俺様は最初、首、胴体、腰から下と三つに裁断された。それから、薄切りハムみてえに、削られたわけだが、さあて、お前はどんな処刑法が望みなのかな？お前は俺様がエンバーミング処理をされている最中に、何とやらいうワインを飲みながら、こう言ったな。ビロードの手袋をはめた鉄の手を持った者たちによって作られた上等のワイン、とか何とか。俺様も、細心の注意を払って、お前の肉体を、切り刻んでやるよ。あいにく、ビロードの手袋は持ち合わせてはいないがな。俺様がよ。うまそうにその血の色ワインを飲み干してやるよ。へっ、上等のワインの味とはいかないだろうがな」

残虐な行為を果す時は、全身がしゃんとするのが、「幽霊男」のでれでれしていた手足までが、普通の人間のように、力強く動くようになり、前屈みの姿勢の背までもがしゃんと立った。その分、面相の方も怖さを増した。

ぎよろりと剥かれた右目に、殺意に充ちた眼力が込められ、垂れ下がった左目の黄濁色は獲物を狙う黒豹の黄色い目のように、らんらんと光っているかに見えた。

暗紫色の幽霊体に《紫魂水》が充ちたのか、そのオーラ光も、急に発光色が強くなり、凄さを増した。

「わたしは、わたしは、その命だけは…」

それだけ言うのがやっとだった。根本はへなへなとなり、その場に崩折れていたが、やっと、顔だけを上げ、命乞いをした。

「こいつの機械音もなかなかものだぜ。へへ、スイッチオンといくか。ほれよ」

「幽霊男」がスライス旋盤機のスイッチを入れた。機械が生き物になり駆動し始めた。

「きーんっ、しゅー、しゅー、しゅー」

円形のノコギリ刃が早い回転で回っていた。そのかたちは、製材工場などにある製材機に似ていた。こちらは横の面にノコギリ刃がついていて、その台は人間一人の体を乗せ79

られる程度のスペースがあり、物体をそのノコギリ刃に向けて差し出せば、自動的に切断できる仕掛けとなっていた。

この精巧機械は切断面を一ミリ単位に、設定しても、それをこなす機能が備わっていたが、いまの状態では、生体の切断は不可能であった。その間の事情を「幽霊男」が楽しむ口調で根本に説明を加えた。

「お前を冷凍にしてから、裁断してやる方法もあるが、それじゃ、苦痛も何にもない。どうだ。生きたまんまというのは」

「ふえっ」

根本のノド仏が笛のような声を発した。

「直ぐに死んでもらっても面白くない。俺様は冷凍体が扱いやすいという理由で、最初は体を三つに裁断された。そいつを、まずはやってみようと思っている。それは、お前の考えついた通りのことで、別に、俺様が思いついたことではないよ」

「幽霊男」に操られ、根本はスライス旋盤機の前部のスペース部分に体を横たえられた。根本は全身から力をなくしていたが、念力操作がそれらを可能にした。

「ふえっ、ふえっ」

また、ノド声を発し、根本は恐怖のために目を一杯に見開いた。ぶるぶると唇が震え、そして、口の端から根本はヨダレを垂れ流した。

「すぐにはやらないさ。俺様は冷凍体とは言え、二十日余りも、毎日のように、このスライス機械に掛けられて、カンナで削るように、わが肉体を裁断されたのだからな。どうだ。まずは、切れ味鋭いノコギリ刃の音を、お前にお届けするよ」

「幽霊男」に言われるまでもなく、根本がいちばん恐怖を感じとっているのは、ノコギリ刃のその回転音だった。

「ガチャ、ガチャ、キューン、クルルウ」

「幽霊男」が機械の操作をするその金属音にも、根本は肝を冷やした。一ミリ単位では、生体は切断できないので、「幽霊男」はスライス旋盤機のレバーをいじっているのだった。その音がする度に、ノコギリ刃の切断口が、ゆっくりとその口を開いていった。

ちらと、根本は横目でその様子を確かめた。人間の胴体が呑み込めるほどに、切断口がぱつくりと大きく口を開いた。獲物を前に、鮫が歯ぎしりをしている様子と何ら変ることはないかった。

「ま、待ってくれ。この、わたしが、そ、その、スライス体は処分する。そ、それで、どうだ…」

根本が最後の命乞いをした。

「処分だと？医者らしいもの言いだな。処分なら結構、せめて、丁重に扱い、その後は、霊が安まるように、わたくしは供養をさせてもらいますとでも言えば、スライスするのは、両手両足ぐらいいしておいたがな」

「そ、そのように…」

「もう、遅いぜ。この機械も、この俺様もお前の生き血を欲しがっているんだ」

「幽霊男」がそう宣告した時、根本の下半身がスライス面に向けてセットされ、そして、精巧な作りの刃がまず初めに根本の両足首を切断した。ことごと、木片のように、床

のコンクリート面に、両足首は落ちた。

「ぎゃうっ」

と、根本は悲痛な声を上げたが、体は台の上に張りついたままなので、身動きは適わなかった。

「幽霊男」は自らの幽霊体にエネルギーを補給するためか、切り口から噴き出した血をうまそうに啜った。

《紫魂水》の精分を吸収しているのか、「幽霊男」がひと啜りをする度に、「幽霊男」の全身に紫色のオーラ光のようなものが走った。

「次は、どこの個所がいいかな。しばらくは生かす、殺さず。両手なんてのはどうだ？」

「幽霊男」の念力操作のままスライス旋盤機は勝手に動き、根本の両手が次に、ぽろりと床に落ちた。

酷い殺戮行為が、およそ三十分ほども続いた。ノコギリ刃が、回転し続け、そして、いつか、根本は出血多量でその命を終えた。

さすがに、一ミリ単位では生体は裁断できず、「幽霊男」は、根本が気絶してしまった段階でその楽しみの目的を失った。

それでも、根本の体は手足と、首、胴体、下半身の五つに裁断された。ばらばら死体は「幽霊男」に存分に血を吸われたあと、一時、身を隠すためか、「幽霊男」の瞬間移動(テレポーション)の術により、どへともなく、持ち去られた。ふいつとその死体は消えた。

何の痕跡も残さないように、「幽霊男」は機械や床などに飛び散った血の跡を、余さずぺろぺろとなめつくした。

やっと、急ぎJ Eステーションに駆けつけた英輔が根本の身を気づかい、預けられている合鍵を使って、ステーション内に入ったが、根本の姿を発見することはできなかった。

もちろん、幽霊と告げた男と英輔との遭遇も適わなかった。それに、廃棄を命じられた献体男の標本体も、何者によって持ち去られたのか、シークレットルームから完全に消失していた。

別室にいた宇野も、「幽霊男」と、時を同じくして、この場所から姿を消した。一種の夢遊状態のまま宇野は「幽霊男」の分身として、別人格の男になり、ふらふらと、真夜中の街に一步を踏み出していったのだった。

この夜、また、凌辱殺人事件が、夜の巷では発生した。凌辱魔の正体はわからぬままに。この夜のことだが、英輔は一人、無人の施設内に入り、そして、シークレットルームにも入ったのだが、磨き上げられ、整然としたスライス旋盤機を見る限り、凄惨な殺人行為が、この場で、執り行われたとは、到底、考えることはできなかった。

この時、英輔は別室に用意された宇野が用いていると思われるパソコン機器類も目にしたが、特に、目に止めることはなかった。

第六章 誘いの罠

1

冬の訪れとともに、あたりの風景も一変した。寒い北風に人々もコートの際を立てた。

湯沢スキー場に、再び向かうことを英輔は決意した。正体不明の幽霊と名乗る男から、愛香に関して、それらしき情報もたらされていた。どこかに、愛香は幽閉されている可能性があった。そして、英輔も被害者の一人だとその者は英輔に伝えた。二人が事件に巻き込まれているのは間違いなかった。

北の方角、雪のある場所、その情報も愛香の消息の一部を伝えていた。

行方不明になった地点に立ち戻り、探ることを英輔は今回の目的とした。道に迷えば、最初の地点に帰ることの鉄則を英輔も守ることにしたのだ。

その後、英輔は瀬野レオの周辺をさらに洗った。写真展などを開催していた関係者にも接触をし、その人物像も探したが、知る者は少なく、得るところはなかった。

ただ、瀬野の顔写真は入手した。見た感じでは、濃い目のサングラスを掛け、あごひげなども生やしていて、いかつく見えたが、特に、山男と言った印象はなかった。

だが、英輔が一つだけ気になったことがあった。瀬野という男には、どこかで見たような印象があり、それが誰なのかを、英輔はいま計りかねていた。サングラスに隠されてはいたが、眉間に一本、深い立て筋があった。

関越自動車道を走っている最中のことであった。何度か、黒いバン型車が英輔の車のバックミラーに見え隠れした。どうやら、後を

つけられているらしい。それから、追抜き線で、わざとらしい接近を試みてから、その車は関越トンネルのあたりで、後続車の列に紛れた。それで、英輔はその車を見失った。

英輔は上越インターチェンジを降り、湯沢スキー場に向かった。白い雪を頂いた行く手の山々を車窓の外に見ながら、英輔は目的地にと車を走らせた。

湯沢スキー場に到着した。

と、スキー場の駐車場に自分の車を止めようとしたら、黒塗りのバン型車と同じ仕様の車を英輔は見つけた。先程、英輔の車のあとをつけていたあの車のように思えた。車のプレートを確かめると東京の練馬ナンバーが付されていた。

「見たことのある車だ。黒塗りの車体で、車窓にスモッグフィルムが張られた車、もしかしたら、これはJESテーシヨンの宇野がいつも運転している車ではないか。霊柩車代わりに使っているのか、こんな仕様になっている。あのエンバーマーの宇野がこの地にやって来たということなのか？まさか。そんなわけがない。ぼくの車をつけてきた？何の理由があつただ。二人の間には、個人的には何の関係もない」

英輔は自問自答をした。

スキー場が見渡せるテラスの二階にあるカフェに行き、英輔は小休止を取った。

目の前には初心者用のコースが広がっており、折からのスキーシーズンなので、多くのスキーヤーがスキーを楽しんでいた。英輔の視野の先に、リフトがつながっていて、高く山上にまで伸びていた。

その時、英輔はふと席を立ち上がった。

テラスの視界に入る場所に、赤い毛糸編みのスキー帽、黒いサングラスを掛け、あごひげを生やした男が立っていて、じっと、こちらを注視しているのに英輔は気づいた。

その男の存在が気になり、英輔はテラスの際まで身を寄せた。

男は、微動だにせずに、こちらを見ており、見様によつては英輔を挑発しているかにも見えた。一瞬の判断だが、英輔には写真で見た瀬野レオにそっくりだと思った。

いや、別の思いにも捉われた。

「何だ。うん？あの男…。もしかしたら、あの男は宇野なのでは？」

顔つきなどからは確認できなかったが、背格好は宇野と似ていた。この地にやって来たと思われる黒塗りの車の存在も、英輔にそんな連想をもたらした。

男は下からテラスを見上げるようにし、首を横に向けるようにし振った。首を動かし、指しをしているのかも知れなかった。それが何の合図なのかは英輔にはわからなかった。

が、男はもう一度、英輔の方を見直してから、くると踵を返した。しっかりと足取りで歩き出した。

それから、リフト脇のスキー場のスロープを徒歩で登って行った。その後ろ姿を英輔はしばらく眺めていた。やはり、その男の態度はわざとらしくて、一度、後ろを振り返った。

「あの男、愛香が雪崩れ事故に遭ったというあの場所に向かうのではないか。いまの態度から察すると、このぼくに跡をつけて来いという信号をあの男は送って寄越したのでは？」

英輔は注文をした飲み物が来る前にこの場を後にした。急いで、背にリュックを背負うと英輔は階段を駆け下り、スロープの坂道に向かった。

「あの男の姿を見失ってはならない」

だが、山歩きに慣れているのか、男の歩くスピードは早く、英輔は追いつくのに苦労した。リフトの第一カーブのある地点までは、男の後ろ姿を見ながら足を進めたが、山スキーコースにつながる深い谷地を下る雪の坂道で英輔は男の姿を見失った。不意に消えた。

そのあたりには、樹氷林が谷地に沿って走っていて、一步向こうは無人の領域とな

っていた。樹氷林が揺れ、風が少しばかり騒いだ。

息を切らしながら、英輔はともかくも、男が消えたと思われる場所までやって来た。立ち入り禁止地域なので、人の足音は男の歩いた足跡だけしか残っていないかった。

半ば雪に埋もれた針葉樹の根っこから、向こうの谷地へ足跡は伸びており、男が林になっている無人の領域にさらに歩を進めたのは間違いないかった。

（愛香を探し出す手立てはいまはあの男が差し招いているところへと向かうしかないのでは。例え、どんな罠があろうとも、もし、愛香がこの山地の奥に囚われているなら、いまこそが、その救出の唯一のチャンスなのだから。あの幽霊を名乗った男が、こうやって、ぼくをこの地に招いた。そうか、あの愛香についての情報をぼくにもたらした時、J.Eステーションには、宇野もいた可能性がある。つまりは、幽霊を名乗る男は宇野ということになるのか？いや、まだ、そうとは断定できない）

いまは、英輔の思考は混乱したままだった。

ともかく、前に進むしかなかった。一步、一步を英輔は進めた。

重装備とはいかないが、そこそこ、山歩きに適した服装に英輔は身を固めていた。マウンテン・パーカーにハンテイングブーツ、何日分の食料や、山ごもりに必要な小物もリュックの中に収まっていた。

厚着のせいで、直ぐに、汗が沸いて出た。およそ、七、八百メートルほど歩いていた。その間、浅い谷地の雪に英輔は足を取られ、何度か、すべり落ちそうになった。

だが、男の足跡は、ぷつんとある地点で消えた。笹地があり、雪をかぶっていたが、その雪が払われた通過跡は、あちらこちらについていて、英輔には男がどこにと歩いて行ったのか、判断できなくなった。

それに、このあたりまで来ると、笹地の向こうはすんと落ちた深い谷で、一步を進めれば、谷底まですべり落ちてしまう危険性があった。

「これは、元の場所に戻らねば」

英輔は身の危険も感じていた。

だが、浅い谷地に戻って、登ろうとした時、英輔はずるずると自分の足がすべり、なかなか、前にと足が進まないことを思い知らされた。一気に、男の後を追ってきたために、戻る場合のことまで、英輔は考えていず不覚をとった。

「これで、雪でも降ってくれば、たいへんなことになる…」

そう呟き、にび色の空を見上げたら、その悪い予感通りにちらちらと雪が降り始めた。「ともかく、いまは戻ることだ」

英輔は自分に言い聞かせ、何度も、谷地の坂を登ろうとアタックを試みた。雪だけが、塊になって落ちてきた。浅い谷地と言っても、勾配は七十度ほどはあった。雪煙だけが派手に上がり、英輔は一步も進めないどころか、途中で、転び、そのまま、谷地の際まですべり落ちた。気がついてみると、同じ場所を行ったり来たりしていただけのことだった。

しばらく、動けぬままに、英輔はじっとしていた。腕時計で時間を確認した。時刻は午後三時三十二分になっていた。

「こんなところでもたもたしていたら、日が暮れてしまう」

そのことに、英輔は気づかされた。あたりを見回した。目の前の雪坂がとても高く

見え、英輔には焦りの気持ち兆した。

と、樹氷の枝の一つに、何を意味するのか、妙なものがぶら下げられていた。白い雪景色の中なのに、とある樹氷の枝先に、コノハズクが一羽、止まっていた。じっとして動かない。雪はかぶつていず、つい、さつき、その場所に置かれたように、英輔には思えた。

近くに寄ってみた。直ぐに、そのコノハズクが剥製品であることが英輔にはわかった。「これは、愛香がぼくに保管を依頼したあのコノハズクではないのか。なぜ、こんな場所にコノハズクが……。いや、これではつきりしてきたぞ。J Eステーションから、このコノハズクは運ばれてきたのだから、誰かと問うまでもない。宇野しか、この剥製は運び出せない。あのエンバーマーの男が、これは愛香の失踪事件と絡んでいるってことなのか。それにしてもなぜだろう。この時点で宇野が浮かび上がってくるなんて」

英輔は呻くような口調で言った。

悪意の使用者のように思え、手を伸ばして、剥製のコノハズクをつかみ取った。

祖父が作った物と同じ品だった。黄色い目だけが、生きている者のように、いまでも、輝いて見えた。さつき、この場所にコノハズクが置かれたのだとしたら、その当人はこの近くについて、英輔の動向を見守っている可能性もあった。まわりを英輔は見た。

白い雪と、冠雪した木々の枝、そして、風の音だけが、英輔の耳についた。

縫い跡のある背の部分に、一枚のメモが張りつけてあるのに、英輔は気づいた。英輔はメモを剥ぎ取り、その文字を追った。

『ようこそ。この谷を下ると、バーチャル美少女MIHANAちゃんに会えるかも知れませんが、小さな山小屋があります。ぜひ、お出で下さい。仮想空間ではない現実の物語をあなたにお届けします』

明朝体の文字が字面を揃えて刻印されていた。その時、谷底から風が舞い上がってきて、英輔が手にしたメモ用紙がぱたぱたと風に煽られた。

「…」

英輔は確かに文字面を目で追っていたが、最初は頭の中には入らなかった。

「あの、宇野という男がこの文を書いたのか…」

ぼそりと英輔は呟いた。

そして、次に、バーチャル少女のくだりが意味するものを、英輔は混乱した頭の中でなぞった。パソコン通信を不正な方法で乱し、妖しげな画像や、それに、愛香の筆跡と思われる恋文を送ってきたのも、宇野だという推測がこの場合は成り立った。

英輔には怒りの情が沸いて出たが、いまは、怒りをぶつける相手が目の前にいるわけでもなく、ただ、英輔はおのれのごぶしを強く握り締めただけだった。

（幽霊を名乗る男？あの正体も宇野なのだろうか？だが、一つだけ不審点がある。紫色のオラ光が届けられたことについては、どう説明すればいいのか？）

やはり、英輔の頭は混乱したままだった。

だが、英輔はさらに決意を新たにした。

「まだ、この目でそれらの事実を確かめたわけではない。事実を確かめるには、男が指定してきたその山小屋に向かうしかないのだ」

もう、その現場に立ち向かうしかなかった。危険覚悟で、英輔は力強く一步を進め

た。

深い谷底の地から、英輔はやつとスキー場裏手の山岳地帯に広がる高原に出た。いくつかの尾根につながる山深い地であった。

いまは冬の最中、一メートル余の積雪があり、どこまで行っても、ただ、雪野が横たわっているに過ぎなかった。

英輔はとても不安な気持ちになった。一枚のメモを頼りに、愛香を求めて強行軍を開始したが、どんな危険が行く手に待ち構えているかも知れなかった。

「このぼくに宇野は死の招待状を送ったのか。この真っ白な地のどこに、山小屋があるのだ。それにしてもぼくをこの地に誘い込んだ理由がぼくには皆目わからない。いや、そうなのか、あの愛香が送ったラブレターは、瀬野レオこと、宇野に送られたものなのか？ そうだとしたら、やつと、話が一つにつながってきたようだ」

英輔には新たな怒りが沸いた。しかし、それらの事実関係を、英輔はまだ確かめたわけではなかった。

ともかくも、一步を進めるしかなかった。

相手の足跡だが、どうやら、この地点でスキーに履き替えたようだった。新雪を分けて、二本のレール道が遠くに伸びていた。

ひとまずは、その軌跡をつけて英輔は新雪を分けた。すぽつと一步ごとに足先が雪に埋まった。ハンティングブーツを履いていたが、その一步、一步はままならなかった。

英輔は大きく肩で息をした。うっすらと、額には汗が浮いて出た。

だが、間もなく、そのスキーのすべり跡は、雪野から消えた。枯草の生い茂る草地のあたりで、また、相手は姿をくらました。

目的地が見つからぬまま英輔は一時間ほども、むだな時間を過ごした。

が、何者かの足跡を平地になった視界の開けた地で見つけた。小さな林が左手には控えていた。雪をかぶったナラの木がそのあたりには、ひとかたまりになっており、枯れ枝を空に向けて伸ばしていた。

およそ、三、四十メートルほどにわたってその足跡はついていた。

英輔は自分を導くための何かの印かと思ひ、足跡が始まっている地点まで足を運んだ。

人の足跡にも見えた。その足跡を目で追うと、半ばほどで、方向転換でもしたのか、足跡の道が二つに分れていた。

「何だ？ 目くらましでも、掛けたつもりなのか。こんなことをして何の意味があるのだ」

よくは分らぬまま英輔は呟いた。これからの道を迷わせるために、あの男がこのような細工をしたのかとし、英輔は考えた。

その足跡は、ちょうど長靴を履いた者が、じぐざぐした歩行をとったかのような跡を残しており、大体、十数メートルごとに、別の分かれ道が印されていた。

「うん？ あ、そうか。こんな設定で撮影された野ウサギの写真を、愛香と同行した写真展で見掛けた。瀬野レオの作品で、ある地点で、野ウサギがぴよんと跳ねている写真だっ

た。よくこんな瞬間をものにしたなどあの時は感心したが、これがウサギの、止め足、と言われるものなのか。それにしても、同じような設定に出会うとは」

英輔は戸惑い、その地点で足を止めた。

「止め足」というのは、野ウサギが他の肉食獣に襲われないために用いる生きるための知恵の一つで、跡をつけられないために、ある地点にくると、後ろ足でぴよんと横っ飛びし、もう一つの道を作ることを用いる。天敵を交わす野ウサギのこれは知恵だった。

だが、こんなことに感心ばかりもしていられなかった。林のどこかにと足跡は消えていたが、同じように宇野と思われる人物も英輔の前から消えたままだった。

いまは、行く先を交わされたという思いの方が強かった。英輔はいつときの心の安らぎは得たものの次の一步をどう踏み出せばいいのか、迷っていた。

英輔はたまたま見つけた野ウサギの足跡を頼りに林の中に分け入ることにした。が、英輔はぎくつとし足を止めた。白い雪野に一点、赤い血が染みていた。

一羽の野ウサギが罾に掛かり、針葉樹の木の根元で死んでいた。野ウサギの後ろ足にはククリワナと呼ばれる針金の輪の罾が仕掛けられていた。野ウサギの後ろ足に、しっかりと針金が食い込み、逃れられぬまま、野ウサギは命を奪われていた。輪状の針金の一端は木の根っこに結び付けられていた。

「これは間違いなく、人間の仕業だ。罾を仕掛けた者がいるということだ。気をつけないと、どんな罾がこの雪の道に仕掛けられているかやも知れない。用心しなくては」

英輔は自分に言い聞かせた。相手が自分に対して、警告を発しているような気になった。その場をあとにし、英輔はまた歩き出した。

奥行きが五十メートル余、小さなナラの林を横に突っ切るとさらに平地が広がっていた。と、丘状のかたちの山地の直ぐ下に風雪を避けるようにして、小さなログ風の造りの山小屋が建っているのを英輔は発見した。

「これで、ひとまず、命の心配はしなくともすむようだ。手の先だって、こんなに凍えてしまっている。やれやれだ」

ふーと、自分の息を手袋の手の先に吐きかけ、しばし、英輔は暖を取った。

山小屋までたどり着くには、それでも十数分は要した。しかし、山小屋が見える地点まで来た時、英輔は用心をし、足を止めて、山小屋の様子を窺った。

考えてみれば、山小屋への招待状は、初めから、奇妙な展開から始まったものだった。愛香の行方を探るために、この地に来たら、偶然なのかどうか、瀬野レオとおぼしき男と出会った。いや、いまはその男は宇野と同一人物なのではと、英輔は考えてもいた。

この怪しい人物が、英輔の身の回りに起こったすべての事件と関わり合いを持っているのではと、英輔は考え始めていた。この雪野に英輔を誘き寄せたのも、そして、愛香を奪ったのも、瀬野レオこと、宇野俊光である可能性が高かった。

その相手が何を考えているのかを、英輔はいまの段階では推測しかねてはいたが…。

これからの展開では、身の危険だって待ち受けていた。その危険人物が指定した山小屋なのだから、英輔が用心するのも当然のことだった。

山小屋の屋根に積もった雪は重そうで、いまにも、山小屋を押し潰しそうだった。防風除けのためか窓には斜めの板が打ちつけてあった。だが、その木の扉だけは、誰が開け

たのか、わずかな風に揺れているのが見えた。

山小屋の横手に回った時、英輔は二本のスキーのすべり跡を見つけた。自分を招き寄せ、この山小屋まで導いたあの男の存在をやつと英輔は確かめることができたような気がした。用心をしながら、英輔は山小屋に近づいた。どこかからか、あの男が英輔の動向を監視しているかも知れなかった。

扉のある場所まで来た。ばったんばったんと、扉が開いたり閉まったりしていた。扉のそばに寄り、そーと山小屋の中を覗き見た。

入り口のあたりは薄暗く、土間になっていた。大胆になり、英輔は扉に手を掛けた。すつと建物内に入った。

しーんとしていて、人の気配はなかった。直ぐの場所が四畳ほどのスペースの板の間になつていて、雑多な生活用品が打ち捨てられたように置かれていた。丸太が組まれていて、三角形の天井屋根が下の位置から窺えた。

「誰かいるのですか？」

英輔はもう一つある部屋の向こうに声を掛けた。壁と木製の扉によつて、その部屋は区切られていた。

だが、誰も返答はしなかった。息を潜め、なお、英輔は内部の様子を窺った。懐中電灯の明りで周囲を照らした。

誰もいないようだった。それで、土足のまま、英輔は板の間が上がった。三步、四歩、歩いた時、英輔は何かに足を引っ掛け、つまづいた。罨が何種類か置かれていた。その罨の一つに英輔は足を取られたのだった。

「こんなものが。これは……」

血に染まった野ウサギを見たばかりだったので、余りいい気はしなかった。英輔は罨の一つを手にとった。ネズミ取り器と同じ作りのトラ挟みと呼ばれるはさみ付けのバネが付いた罨、ハコワナ式の獲物が中に入ると扉が落ちる仕掛けの生け捕り用の罨、別のものでは、大型で鋭い爪を持ったイヌワシでも捕獲できそうなバネ仕掛けの罨も用意されていた。それに、鉄製の手枷、足枷、手錠の類いまでも、この一隅には揃えられていた。

「そう言えば、Jエステーションの剥製が陳列してある部屋には、イヌワシの剥製が飾られていた。もしかして、あの剥製は、この罨で捕らえられたものなのか？愛香がぼくに告げた撮影トリックに信憑性があればの話だが。少しだが動物写真作家瀬野レオの実像が浮かび上がってきたようだ。愛香が口にしたことのある動物写真のトリックと、これらのことは、関係があることもないかも知れない」

英輔はかたわらに罨を寄せながら、推理の糸をたぐり寄せた。次の一步を印した。

奥の部屋の扉を迷わず開けた。

この部屋は六畳一間の大きさがあり、最初に、英輔の目には、壁際にある何段もの木製の棚が写った。ファイル棚で、書類様のものが並べられていた。やはり、部屋全体の印象は雑多なものに埋められていて、足の踏み場もないほどに、床にもいろんな物が捨て置かれていた。

この部屋の隅には木机が備えられており、それから、写真機材がひと揃え、用意されていた。焼き付け機、引き伸ばし機、現像用の機器、現像液などであった。

この山小屋が動物写真作家瀬野レオの仕事場の一部であることは間違いなかった。机の前に立つと、何枚かの白黒写真が乱雑に投げ出してあった。リスや、テンなどの小動物を捉えた写真だったが、特に、優れた作品というのでもなさそうだった。

ぺらぺらと写真を繰るうち、英輔の手はぴたっと止まった。「うん？これは」

どこかで見たような画面だった。最初はただ暗いだけの写真かと思っていが、よく見ると、洞窟のようなものが写っており、そして、白い人影が識別できた。

写真は何枚もあり、いずれも、この前、パソコンを通して英輔が知り得た愛香らしき女性の裸像が写っていた。フラッシュを浴びたアップカットもあった。それらの写真では、その女性のセックスシンボルなども露骨に写し撮られていた。

英輔は目をそむけた。正直な気持ち、そのような赤らさまな写真は見たくなかった。

それから、白いおしろいが顔に塗られていたが、その写真の主は愛香であることを、英輔は改めて確認した。

切れ長の眦(まなじり)に、きゅつとすぼめた唇、右の頬にある片エクボ、指の細さ、小指がやや短いところ、みんな、英輔が見なれた愛香の一つ一つの特徴が表されていた。

それらの写真類を、インターネットを通じ、発信した証拠品も、英輔はこの部屋の隅で発見した。J Eホームにも用意されていたパソコンや、その周辺機器が、ここにも一式取り揃えられていた。英輔は発信者の正体をこの場で、さらに確認することができた。

「愛香はこの山中のどこかに捕らえられているとしたら、この山小屋にいたことも考えられる。もし、そうなら、ここに、愛香がいたことの痕跡が残っているかも知れない」

英輔はやつと気持ちに落ち着きを取り戻し、山小屋の中を探索する気になった。

食事をするためか、キャンプなどに使う固定燃料や、貯め置きの水の入ったポリ容器、ナベ、ヤカンなども裏口の土間には用意されていた。暖をとるための石油ストーブもあり、ともかくも、この山小屋にいれば凍え死ぬ心配はないようだった。

この部屋の壁際には、天井裏に昇るための木の梯子も掛けられていた。

屋根裏部屋に上がるべく、英輔は梯子に足を掛けた。三角屋根の空間にある狭い場所だったが、寝泊りするだけのスペースはあった。きちんと整理されているわけではないので、居心地は悪かったが、横になって休めるスペースは確保することができた。

この屋根裏の場所にも注意を払った。木枠が裸のまま組み込まれた天井の梁の下で、英輔は何体かの動物の剥製を見つけた。

懐中電灯の明りで確かめてみると、初めに、横に翼を広げたフクロウの剥製が映し出された。近くに寄り、英輔は注意深く、そのフクロウの剥製をチェックした。もし、フクロウを罫に掛けるなら、脚部に傷が残っているはずだと、英輔は思った。

やはり、脚部には傷跡があった。それなりに、修復はしてあったが、このフクロウが罫に掛けられたのは間違いないと、英輔は確信した。写真展で見たフクロウの写真には、脚は写っていないかったので、この傷は作品としては問題にならなかったようだった。

(そうか。フクロウの翼を横一直線に広げさせて、何かで固定をし、雪の降りしきる設定の中で、シャッターを切れば、まるで、飛んでいる一瞬を捉えたようなフクロウの傑作写真をもにすることができるといえる。捕らえ、修復し、被写体に仕上げるという技も、エンバー

マーであるからこそ、可能なのだ)

瀬野レオの動物写真撮影トリックの技を見たような気がし、瀬野レオが宇野俊光であることとを、英輔はこの時点で確信した。

他にも、野ウサギや、リス、テン、キツネ、それに、野鳥の剥製がここには隠されており、いずれも、罠で捕捉された傷跡を確認することができた。

(あの男は愛香をも、同じように扱っているに違いない。動物のように)

英輔は悔しさに唇を噛んだ。新たな敵意が瀬野こと、宇野に対して沸いた。

腕時計の針を読んだ。午後五時を過ぎており、部屋の中はもう薄暗くなっていた。

屋根裏部屋にある明り取りの窓から、英輔は外を眺めた。風は巻いていなかったが、雪が降り募っていて、外の風景は雪一色の世界となっていた。

(これから、どう動けばいいのか。相手は多分、この山小屋にぼくがいることを承知で次の行動を起こしてくることだろう。こちらから、仕掛ける方法はいまのところない。この雪で、しかも、これから夜間を迎える。下手に動けば、凍え死ぬだけだ)

英輔は自重をし、相手の動きをまず見守ることにした。愛香に対して、この時、英輔は心からの愛のメッセージを送った。

「愛香、ぼくはもう君の近くまで来ている。きっと、迎えに行くから待っていてくれ」

3

白い雪景色だけが屋根裏の明り取りの窓からは望めた。外の雪は止んでいるようだった。

夜の九時過ぎの時刻、やっと、相手が英輔の前に姿を現した。ごとりと音がし、表扉を誰かが開ける気配を英輔は感じた。

その時、英輔は屋根裏部屋で仮眠を取っていたが、物音に目を覚ました。

途端に、英輔は身構えた。屋根裏部屋は二つの部屋が見渡せる構造なので、表扉のあたりまで見通せた。

(いよいよ、あの男、ぼくと対決する気で、この場にやってきたな。こんな人里離れた地の山小屋、殺されたとしても、恐らく誰にも発見されることはないだろう。この対決にはぼくの命も掛かっているってことか)

英輔はそう自分に言い聞かせ、心を引き締めた。

木扉がすーと開けられた。男の姿が映った。懐中電灯を手にしていたので、男の姿かたちが見てとれた。赤い糸のスキー帽をかぶり、あごひげを生やした男、この山小屋に英輔を誘った男に違いなかった。

それから、瀬野レオと名乗り、動物写真作家の顔を持っている男がエンバーマーの宇野俊光であることを、英輔は改めて確認した。あごひげを生やしているが、つけひげであると英輔は見破った。

ふと、こちらに顔を向けた時、眉根に深く刻まれた縦筋の皺の印象から、英輔は宇野自身であるに違いないと確信を持った。

男はもつそりと歩き、板の間に上がった。

よく点検すれば、土足で板の間に上

がった英輔の足跡も発見できるはずなので、建物内に英輔が居ることは容易に判断が90

つくはずだった。

だが、男は板の間を、そのまま過ぎ奥の部屋に入った。英輔が居ることなどまるで関心がないかのようだった。奥の部屋に入ると、書棚の奥まった場所から、男は何やら取り出した。小さな文箱のような物を男は大事そうに小脇に抱えると、別の場所に移動した。

部屋の隅にやって来ると、男は木机の前に立った。白い息が漏れた。屋根裏部屋から英輔は男の後ろ姿を見ていた。机の上に置かれた懐中電灯だけが、そんな男の仕草を部分的ではあったが、あぶり出していた。

身を乗り出した時、英輔の身近にあった雑多な品の一つが、バランスを崩し、ことりと音を立てて崩れた。

一瞬、静まったあとのことだったので、英輔は相手にその物音を聞かれたのではと、ぎくりとし、体を固くした。

だが、男は屋根裏部屋には見向きもしなかった。無関心を装った。

何の用があつて、雪の中を、この山小屋にやって来たのか？山小屋内に潜んでいる英輔の存在など男はまったく無視していた。

男はしばらく机の前で、何やら取り出し、それとなく置いたようだった。その間、一言も発しなかった。

隠れていることを発見されたらどうなるか。英輔はそのことに恐れ of 気持ちも抱いていたのに、男は人の気配を探ることもなく、山小屋を出て行った。

どこか、わざとらしいやり方だった。

(男の後をつけるべきか、このままでは、この男と二度と会えなくなるかも知れない)

そう思い、英輔は屋根裏部屋から梯子を伝い、急いで下に降りた。

英輔は男のあとを追い、入り口に向かった。

が、表扉から、男の後ろ姿を見た時、スキーを履いた男はもう三、四十メートルほど向こうの雪野を駆けていた。自分の存在を示すために、遠くに、懐中電灯の明りを英輔は投げた。

が、男は振り向くことはなく、明りの届かぬ前方の闇にとそのまま姿を消した。男が滑走したあとには、くつきりと、二本のスキーの跡だけが印されていた。

雪が止み、月の明りが雪野一面を照らし出していた。青白い闇が男の消えた雪野には息づいているかのようだった。

「あの、スキーの跡をたどれば、あの男の行き先に行き着くかも知れない」

英輔はひとまずそのように判断をした。

冷え込んでくる寒さを用心する気持ちもあつて、直ぐには、英輔は男のあとを追う気にはなれなかった。それに、スキーで走り去ったそのスピードについていく自信もなかった。

ひとまず、身の装備のこともあり、英輔は山小屋内に戻った。

室内で取った男の行動が気になった。急いで、取って返し、英輔は奥の部屋の机の前に立った。

「これは？もしかして…」

その漆塗りの文箱だけは、何かを訴えるように、ぽつんと一つだけ、置かれており、何通かの封書がさりげなく机の上には置かれていた。その封書の一つを英輔は手に取った。

懐中電灯の明かりを頼りに字面を追った。

宛先には『瀬野レオ様気付』とあり、宛先の住所は新潟県で、受取人は、そこを宿泊先にしていたのか、あるホテルの名が記されていた。

筆跡は愛香のものに間違いなく、きれいな楷書文字が記されていた。

「…うん？やっぱりそうだったのか。宇野という男は瀬野レオと同一人物で、さつき、姿を現した男も、動物写真作家を名乗る問題の男、この手紙は、この前、メッセージをパソコンを通じ届けてきたあの一文の続きなのかも知れない」

封書を裏返しをし、差出し人の愛香の名前を目にした時、英輔はそう確信した。

封書の日付は一年ほど前のものであった。手紙を取り出す。女らしい心づかいの感じられる便箋だった。片隅に、野花の絵が印刷してあり、小さな薄桃色の花を咲かせていた。

『これほどに、愛の心を感じとったことはありません。あなた様に初めて会った日、わたしはあなた様の男らしさに強く引かれました。男らしさは何かと問われたら、わたしにはそれが何かを答えるすべはありません。あなた様の目をわたしは見返すことができませんでした。そして、わたしは小さな胸が、なぜなのか、ときめくのを感じました。よくはわかりませんが、運命的な出会いの予感を、わたしはあの時、たしかに、感じとっていたのです』

愛香が瀬野こと、宇野と最初の逢瀬をしたあとに、この手紙が送られたものだということが文面から読み取れた。

愛香とその男との間に、愛が介在しているのは、疑うべくもないことであると同時に、恋文は愛香から送られ、そして、男と女の関係が始まったという事実を英輔はこの文面で再確認させられた。この手紙には、何日、何時に、二人が次ぎに会う日を作ってくれるのか、返事待つ愛香の積極的な意志まで記してあった。

次の手紙はもっと具体的な事柄が記されていた。こちらの文面では、何回かの逢瀬を重ねたあとだという事実が英輔には確認できた。

英輔には意味不明な謎の文句も文中にはあった。

『(中略)もう一人のあなた様を知ることができ、お会いしてよかったです。J E ステーションで、エンバーマーのお仕事をされていること、そして、そのお仕事に就かれた動機、とても、よく理解できました。それから、わたしもそのお仕事に興味を持ちました。今度、お会いする時は、ぜひ、仕事場に、わたしを連れて行って下さい。みんな、そのようなお仕事の場合、ご自分からは語ろうとはなさらないと思うのですが、あなた様はそのお仕事に誇りを持っておられるのですね。たいへん、嬉しく思いました。わたしに、あなた様は心を許して下さったのですから。二人の愛について、もっと一杯語り合いたかったのに、どうしてでしょうね。二人とも、幼時体験の特異さの話にばかり夢中で、今度お会いする時は、わたしの憧れの人に、わたしの本当の心のうちをお話しします』

手紙の日付などから推察すると、小さなトラブルが二人の間にあった時期でもあった。

何度か、二人はダンスのレッスンや、スキーに出掛ける機会があり、ホテルに宿泊したことがあった。英輔には愛香に対する気おくれのような気持ちもあり、優柔不断の態度のまま、愛香に積極的な愛の行為には及ばなかった。同宿しても、背を向けて眠る英輔に、いつしか、愛香はよそよそしい態度もとるようになり、宿泊予定を変更して、いつの間にか、一人、愛香だけが、先にホテルをあとにすることも間々あった。

（ぼくが愛香に本当の愛の気持ちに向けなかったことが、このようなことになった。悪いのはこのぼくかも知れない。それにしても、愛香はずっと前から、ぼくを裏切っていたことになる。）

そう自らに問いを発したが、惨めな思いを、この時、英輔は抱いただけだった。

婚約者の愛香が、数年にわたり、自分とは別の男と逢瀬を楽しんでいた。それも、愛香の方から言い寄り、逢瀬の機会を持った。

それに、二人の間にある幼時体験の特異さとは、一体、何を意味しているのか？

「愛香の幼時期の特異体験とは、恐らく、解剖資料館の日々のことを言っているのだろう。実際に愛香は、コノハズクの剥製に会うために、祖父が亡くなったあと、あの地下室の中に入ったと、このぼくには告げた。それ以外に、愛香の心を引きつける何かが、あの地下室にはあったのか。それは何なのか？」

英輔は考えてみたが、直ぐに、答えの出ることでもなかった。もちろん、宇野の幼児期の特異体験については、英輔は知る由もなかった。エンバーマーの道を選んだことの理由についても、英輔は何も聞き及んではいなかった。

別の手紙には英輔のいくつかの疑問を解き明かす一文が記されていた。

『あなた様がエンバーマーの道を選ばれた本当の理由をお手紙で知り、たいへんショックを受けました。でも、わたしはあなた様のよき理解者になれると思います。五歳の時、お母様の不慮の死に遇われ、痛ましい遺体を目の前にし数日を過ごされたこと、そして、元のきれいな体にしてあげるとお母様に幼いあなた様が約束されたこと。そんなわけがあつて、死体にやさしく接することのできる一人のエンバーマーが生まれたのですね。わたしのことも、少しですが記しておきます。やはり、五歳の頃だと思うのですが、わたしがこの前、あなた様にもお話しした解剖資料館に一人が入った時のことでした。解剖医のあのおじいさんが、解剖標本作りの手を休め、わたしをこっちへお出でと招き寄せてくれました。そして、おじいさんは「死体にいつも接していると、とても、生きている人にもやさしくなれるんだよ。ほら、この暖かさがとつても気持ちがいい」と言い、おじいさんは小さなわたしの手を取り、その手を握ってくれました。それからです。合鍵ももらったわたしはすっかり嬉しくなり、そのあつたかさの感じが大好きで、一人、よくおじいさんのところへ遊びに行きました。「よく来たね」と言い、おじいさんはわたしの体温の暖かさを確かめるように、そつと、わたしの手の中に、自分の手の平を重ねてくれました。でも、おじいさんが亡くなってからは、わたしはそんな暖かさの感じには、一度も巡り合つたことがありません。きつと、わたしには女としての暖かさの気持ちとか、魅力のようなものがないのでしょうか……』

英輔と愛香の二人の仲のことにも、文面は触れていた。そのこともさることながら、英輔は愛香と祖父との間にあつた秘密の触れ合いのことが、とても、気になった。

コノハズクにことよせて、愛香は解剖資料館に出入りしていたと英輔には告げたが、愛香の言う、「暖かさの触れ合い」については、自分と愛香とのこれまでの接し方の問題も含めて、愛香が率直に自分の気持ちを表現していることに、英輔はショックを受けた。

余りの辛さに、英輔は思わず叫んだ。

「それで、あの二人は、いま、どこにいるのだ。一刻も早く、その居場所を探り当てねば」
初めて、英輔はエンバーマーの男と愛香のことを、あの二人などと呼んだ。二人が

恋人以上の関係にあるらしいと思っただけで、英輔は心の均衡を失った。

強い嫉妬心も英輔の心の内には沸いた。

机の引出しにも、何通かの手紙が新たに入れられていた。無造作な感じで、投げ入れてあったが、その一つを手にし読んだだけでも、愛香も宇野も英輔には許せなくなった。特に、愛香のナルシスト傾向について、煽り立てるような文面も見られ、愛香の心が操られていることに、英輔は強い警戒心も抱いた。

二人が愛し合っているのは間違いないと思われた。あの、パソコンの画面を通して送られてきた淫らな場面を想像させるような文面はなかったが、愛香だけでなく、宇野の恋愛感情の高まりまでが手に取るようにわかった。

、女性は一生愛せないと思っていたのに、生まれて初めて、愛香が好きになった。と、宇野は文面で訴えてもいた。

英輔は心穏やかならぬ心境に追い込まれた。

「解決策は一つしかない。きっと、この山小屋に現れた男は、その解決策を示すために、この山小屋にぼくを招き入れた。あとは、あのスキーの跡を追えば、ぼくがここまで追ってきた愛香の行方も知れるというストーリーが用意されているに違いない。愛の行方についても。もっと、過酷な現実がぼくの行く手には待ち受けているのかも知れない」

英輔は覚悟を決めた。

その気持ちがあれば、これから先、一歩だって歩むことはできなかった。それほどに、英輔は厳しい状況に、いまは、追い込まれていた。

第七章 ほろびの愛

煙が上がった。

先程までは、月明かりも望めたのに、いまは、変りやすい山の天候のせいで、止んでいた雪がまたちらちらと降り始めていた。

山小屋を出た英輔は先を急いだ。

男が雪の上に残したスキーのすべり跡が、新雪で掻き消されると、その行き先を突き止めるのが難しくなることが考えられた。

手にしている懐中電灯も、いつ、電池切れをするかも知れず、これからの探索行にそれほど時間も掛けてはいられなかった。

（どんな危険が、この先に待ち受けているのか、いや、相手はあくまで、自分のエリア内に、ぼくを引き寄せようとしている。もはや、逃げることはできない。愛香とのこれまでの関係をこのぼくに知らせた上での奮行、相手はこのぼくに挑戦状を突きつけているのだ。いまからだって、愛香の愛の心を、ぼくは取り戻してみせる。男と女の関係にこそ二人はないが、愛香とぼくの心は純なままだと、ぼくは信じている。二人の仲はそれほど脆いものではないはずだ）

いまの英輔にとつては愛香の純粹な愛を信じるしか、自分の心を救う方法はなかった。

深い雪に足を取られながら、英輔は一步、一步を歩んだが、その一步は遅々として進まなかった。マウンテン・パーカーの背にも、すでに雪が白く降り積もっていた。

スキーのすべり跡は、まだ、消えてはいなかったが、どこまで続くのか、英輔にはその先にある距離が読めなかった。

樹氷地帯がしばらく続いた。肩に掛けていた懐中電灯の明りが投影され、一步ごとに、樹氷の姿を様々な角度から捉えていた。

とても、幻想的で、雪が降り募ってくる夜空を背景に、そこだけが、別世界の絵図を描き出しているかのようにだった。

それらの雪の風景に、魅入られているうちに、いつしか、英輔は道なき道を、ただ、目的もなく、歩き始めていた。

スキーのすべり跡も、いつの間にか、白い雪野からは消えていた。

英輔の行く手を見つめる目も、どこか、ぼんやりとし、焦点が定まらなくなった。一步ごとの歩みも緩慢なものになった。

やがてのこと、雪の降り方も激しいものになった。地表を舞うブリザードの雪粒が、英輔の顔面にも、音を立てて当たった。

「ひゅるんっ、ごごおーっ」

その地吹雪は、遠くの雪野の丘陵地帯から下ってくるようで、風が強い時は、英輔は息もできなくなり、一步も進めなくなった。

地表に伏した英輔はしばらくそのままの状態を保ちじっとしていた。

「なんのこともない。こうやって、雪の中で、やがて、ぼくは凍えて死ぬのか。ぼくはあの男の罠に嵌ったのかも知れない。これまでの二十七年ってなんだっただんた？どうして、この雪の中で、ぼくは一人で、野垂れ死にをしなければならんだ。ぼくは、医学を目指し、いま、その道半ば、まだまだ、これから、ぼく自身、学ばなければならないことだって一杯あるのに。少しでも、人のためになりたい。そう願ってぼくは医師を志した。それに、

あの『バーチャルマン計画』も、せっかくの医学界の進歩に役立つビッグプロジェクトなのに、幽霊を名乗る男の仕業か、その後、標本体はどこかに持ち去られた。この計画者だった根本助教授は、あの男の手に掛かったのか行方が知れない。まだある。幽霊を名乗った男は、実際に、婦女凌辱殺人の犯罪を犯しているのかも……。あの時の宣言通りだとすれば、その可能性もある。もし、このまま、ここで、ぼくが死ぬとしたら、これらのことは、すべて、世に知られることもなく闇に葬り去られてしまう。こんな、雪の中で、ぼくは死ぬわけにはいかない。どんなことがあっても……」

視界がゼロになり、ブリザードの勢いは増した。雪風の風は鋭くなり、風が斜めに切られた。

「ひゅん、ひゅん」

顔に当たると、痛かった。英輔は風雪に負けまいとし、一人、しゃべり続けた。

「ぼくは愛香を救い出すために、この山中にやって来たんだ。そうじゃなかったのか？ここで挫いたら、誰が愛香を救うのだ。それに、愛香の本心をぼくはまだ確かめたわけじゃない。愛香自身の口から、あの男とのことを聞かない限り、ぼくは何も信じない。あの男は、ぼくを混乱させるために、手の込んだ芝居をしてみせているのではないか。あの、愛香の手紙だって、ぼくが目にしたのは、あの男と、愛香が知り染めた頃のもので、その一部ではない。その後の二人の付き合い方を、この目でぼくは確かめたわけでない」

もはや、行く手は示されていなかったが、英輔は肘と膝を使い、雪の中をいざり寄った。数メートルは体が前に進んだ。

英輔は毛糸のマフラーで顔を覆い、身を屈め、手足を重ねて、暖を取るための防護姿勢をとった。

だが、零下の温度の前では、無防備にも等しく、英輔の体温は次第に奪われていった。

そのうち、眠気に襲われた。このまま眠ってしまうと、凍死するケースが考えられた。意識が朦朧としてきた。薄れて行く意識に危なさを感じ、英輔はなお自分に問い掛けた。

「死ぬわけにはいかないんだ。こんなところで……。このまま死ねば、ぼくの体は凍りつき、血の一滴さえ、流れぬ人間になってしまう。それって、なんなんだ。ただの、石ころにしか過ぎないじゃないか。ぼくはなんのために、この世に生を享けたんだ？祖父はよくぼくに言った。『自分一人分だけ生きる生き方もあるが、多くの人のために生きる生き方を選ぶなら、医師という仕事はなかなかのものだよ』と。もし、このまま、ぼくが死ぬなら……。そんなことはあるはずはないが、医師としての仕事をぼくはまっとうできずに、死ぬことになる。『バーチャルマン計画』の意義のあるプロジェクトも、このままではだめになってしまう。根本助教授もあれから行方不明、もし、生死に関わることで、根本助教授が不幸な結果となるなら、その、直接に陣頭指揮を取る実行者はいなくなる。そのことも気懸りだ。それに、『バーチャルマン計画』のこれまでのデータは、アメリカのアリア科学医療財団にインターネットを通じて送つてあるとは言え、実用に供するためのソフトはまだ手付かずのまま。まだまだ、これからも、ぼくにはやる必要がある」

そう、英輔は気丈に呟いた。

だが、周囲の状況は悪化していた。雪はあとからあとから、際限もなく降り続け、いつ、止むとも知れなかった。

「ああ、このまま、ぼくは……」
そのあとの言葉は、もう、出てこなかった。
それでも、英輔は一步でも前進しようと、手と足で、雪を掻いた。その手足も凍えているのか、思うようには動かなかった。
体温が下がっているのが、自分でもわかった。寒さのために、英輔は唇を震わせた。

2

ふと、死に対する甘美な思いが英輔の頭をよぎった。このまま眠ると、その願いは叶えられそうだった。いま、自分が戦っているこの寒さとも、死への恐れ of 気持ちも、すべてが安楽のうちに幕を閉じるはずだった。

このまま死んでいく自分の末期に思いが及んだ時、英輔の閉じた瞼の裏に、涙が滲んだ。その涙のあとも、いつか、氷の粒になった。

雪の上に投げ出したままの懐中電灯が、体が半分、雪に埋もれた英輔を映し出していた。その明りに目をやった英輔は、明りを見たことで救われた気になった。

「自分はまだ生きているのだ」
と、英輔は呟いた。

が、その懐中電灯の灯が何者かによつて消された。すべてを見ていたわけではないが、懐中電灯を拾い上げた者がいて、一度、懐中電灯は宙に浮き、それから、明りが消された。

「おい、矢萩英輔とか言ったな。ひとまず、お久しぶりとも挨拶しておこうか。お互い、見知らぬ間柄ではないよな」

頭の上の方角から、その声は聞こえてきた。

(何者なのだ。この声には聞き覚えがある)

英輔はおぼろな記憶をたどろうとした。

その考えが行き着く前に、その者は自分の正体を明かした。

「俺様は佐川洋次郎という。元死刑囚で、お前らの勝手で、献体扱いされ、バーチャル体とかぬかして、全身をスライスされた当の本人さ。いつぞやは、電話を通して話をしたが、今夜は、ご本体様をご登場だ。おい、若いのが、その氷りつきそうになっている目をかっぽじて、よく、俺様を拝みな。そうぞ。根本助教授のところにも、恨めしいーってんで、姿を現した、俺様はあの幽霊様よ」

言われた通り、英輔はうつすらと目を開けた。

雪が降りしきる中に、姿のはっきりしない何者かが立っていた。暗紫色のオーラ光に包まれたその人型のものは、風に吹き千切られそうになりながら、ゆらゆらと揺れていた。

それだけ、風雪は激しさを増していたのだ。

やがて、「幽霊男」の姿が英輔には、はっきりと見えてきた。あたりの白い雪が紫色に染められ、そして、雪煙が立つと、紫色の風が狂ったようにくるくると舞った。

スライス体にされたことを訴えたいのか、「幽霊男」の全身は横に、一ミリごとに輪状の線が入っていた。それぞれに輪光(オーラ)が宿しているように、その輪は灰黄色に光っていた。伸び切った内直筋の先端にくっついていて黄色い目玉が、風に煽られてぶらぶら

りんと左右に揺れていた。

「へへ、そのままでは、間違いなく、矢萩英輔は凍死体だよな。いくら雪を掻いたところで、あと、十数メートルも進めれば上出来さ。行方知れず。来年の雪解けまで、そのまんま。ま。俺様が出現しなければ、十分後にはオダブツよ。さあてだ。俺様のスライス標本は、あのエンバーマー野郎の手で焼却処分にしちまった。ざまあみろだ。お前の方の都合だが、バーチャル体とかつてのまだ不完全体なんだろう。この目ん玉に、一部、スライスする時に欠けちまったカガト部分、不完全標本でよかったよ。医学の役に立つなど、俺様には似わない話さ。そこでだ。このまんま、俺様がお前が凍死体になるのを待ってれば、一丁、バーチャル用献体の仕上がりってわけで、お前をお役に立てることができるとのよな。どうする？よかつたら、生きているうちに、お前、献体届でも出しておくかい」

「幽霊男」は赤紫色の舌をひろひろさせながら、英輔にもっともらしい話を持ち掛けた。

「このまま、本当に凍えて死ぬのなら、ぼくはそうさせてもらいますよ。バーチャル解剖標本は、これからの医学の進歩には、絶対に欠かせないテーマなんです。このまま凍って死ぬのなら、ぜひ、献体役をぼくは果します。医学のためになることなら、例え、自分の命とてぼくは惜しみません」

「おっとー。なかなかのもんじゃねえか。言ってくれるじゃないの。それで、どこに凍死体の献体届けをすればいいんだ？」

「この、携帯電話を使えば、インターネットにだってつながります。これまでの全データはアメリカの某医療機関に送られていますから。あなたのデータは不備な点がありますが、ぼくが献体を希望すれば、これまでのデータを生かして完全バーチャル体を作成することは可能のはずです」

「お前は医者だから、そいつは目的に叶っているってもんだ。余計なお世話だがな。できることなら、その、医学用バーチャル体、男女一対が必要なんだろう。男と女、へへ、穴があるとないでは大違いだ。体の構造だって違うってことよ。お前の相方と、一対で、バーチャル体になるってのはどうだ？」

「それは…。どういう意味で、そのようなことを、言っているのですか？」

愛香がもしかして殺害されたのではと、咄嗟のこと、英輔は気を回した。

「幽霊男」の言い分を聞いていると、すべて、既定の事実として、しゃべっているように英輔には感じられたのだ。

それで、英輔は意を決して強い口調で言った。

「愛香にもしものことがあればの話ですが、ぼくは死ぬことだって辞しませんよ。二人は愛し合っているのですから。お願いです。愛香のことについて、知っていることがあれば、ぼくに教えてもらえませんか」

「お前の女は土つかずって、この前も言ったろ。何もかも、俺様は知っているから、微に入り、細にわたって、説明してやってもいいが、その一部を聞いただけでも、きっと、お前は卒倒してしまうだろうよ」

「そんなひどいことが…」

「いやいや、ひどいってこともないぜ。そうさな。動物写真作家の時は瀬野レオ、そして、

一方では、日本でも二人とはいえない優秀なエンバーマー、宇野俊光、エンバーマーの98

宇野の方が俺様には気に入っている。死体の修理にかけては右に出る者なし。そうよ。根本とかいう藪医者には無理だったが、この飛び出したまんまの左の目ん玉も、宇野はきれいに治したぜ。どうして、それなのに、目ん玉が飛び出してはいるかって？エンバーマー男が治す前に、俺様の幽体(アストラル・ボディ)は、肉体から離脱してしまっただけだから。そんな話はどうでもいい。お前の聞きたかったのは、宇野と愛香というお前の女との仲だった。どんな仲かって？相思相愛とはいかないが、もはや、後戻りのできない仲ってところかな」

「…ま、まさか。後戻りできない？」

「かも知れないって話さ。あの女、実は死体になりたがっているのよ」

「死体に？愛香が…」

「お前の女は無類のナルシストってんだらう。きれいな肉体なのに、お前が手も触れないものだから、年ばかり取って、もはや、自分の体の美しさを失ってしまったと、あの女は思っているのよな。そのへんのところは、お前も納得できる話だろうが。きれいに生まれついたらばかりに罹るぜいたく病、ま、俺様から言わせれば、くそ食らえだな」

「…」

「ま、順を追って説明してやるよ。宇野が初めて惚れた女だよ。それも、死んだ母親の生まれ変りのように、何もかも、よく似た女ときているから、根は深いよな。一つだけ、お前が安心することを教えてやる。宇野もお前とおんなじ、女とはヤレないタイプでさ。まったくもつたいたいことよな。プラトニックラブなんちやってえ。へへ、体中が痒くなるぜ。ま、それでだ。瀬野に惚れたような話になっているが、本当は、あの女、エンバーマーの宇野の死体をきれいにする技に惚れたようなところがあるのさ。わかるかな。ナルシスト女としては、これ以上、もう、年は取りたくない。てな話になりや、美しい死体になるしかないってことなのさ。女の口癖は、死体がいちばん美しい。だ」

「幽霊男」は長い手を揉むようにし、動かした。ぶらぶらとその手は揺れた。

「ふへっふへっ」

と、笑い声にも似た声もつけ加えた。

「ぼくを愛香がいる場所に連れて行って下さい。このままでは、ぼくは凍え死んでしまますよ。それに、どうしても、愛香と会って、それらの話が本当か、ぼくは確かめたいのです」

「へへ、慌てるな。まだ死にやしないさ。お前が女を抱けない理由は自分に聞けばわかることだよな。宇野のことだが、あいつは、えーと、何と言ったっけ。そうぞ。いつか、根本の野郎が俺様に教えてくれたんだ。えーと、トラウマ、トラウマ、心的傷害症とかいうんだってよ。あいつは六歳の時に、母親が犯されて、殺されて、それで、母親の死体と何日か過ごした。母親の腐っていくオツパイと、アソコばっか、眺めて時間を過ごしているうちに、すっかり、女体恐怖症に取り憑かれちゃった。だがな。宇野は母親を元のきれいな体にしてやりたいと思う一念で、死体修理人のエンバーマーになったんだそうだ。見上げたもんじゃねえか。でもよ。そのお陰で、あの男は、生きた女は苦手、死んだ女の方が安心できるといふ変態野郎になっちゃった」

口元を歪めた「幽霊男」の顔が、この時は、英輔には二重、三重に見えた。その分、おどろおどろしさが加わった。

暗紫色のオーラ光に包まれた幽霊体がゆらゆらと揺れており、伸びたり縮んだりし

た。

「宇野のことなど、どうでもいいんです。ぼくが知りたいのは、愛香のことです」

「愛香、愛香と自分の所有物のような口をきくんじゃないよ。いまは宇野の所有物、お前に手出しをする権利はねえんじやねえの。そのことを、まず、頭ん中によく叩き込んでおきな。この若造が」

「愛香はぼくの婚約者です。そのことを忘れないで下さい」

「わかった。わかった。それで、その婚約者の女のことだがな。あの女は自ら望んで、動物写真作家に接近したが、何のことはない。瀬野こと宇野の本性は動物虐待家、いんちき写真を撮っているのは、お前もさつき字んばかり。そういうことなのさ。それで、ついでのこと、あの女も穴蔵で飼われることになつちまった。山スキー場までやって来たところを、俺様のご案内したってわけよ。瞬間移動（テレポーション）の術を用いたから、ま、瞬間蒸発したようなもので、目撃者なしだ。いまは、宇野のマインドコントロールの仕掛けにも嵌まり、あの女は操り人形のようになっている」

「わかりました。ぼくの願いも叶えて下さい。早く、愛香がいる場所にぼくを連れて行って下さい。そのテレポーションの術で」

「もう一つ、大事なことをお前に言っておく。瀬野と名乗っている宇野だが、もう一人、あいつには人格が植えつけられているのさ。わかりやすく言えば、俺様があいつの肉体を借りていて、あいつが、俺様の人格の一部、俺様の心とやらを借りていてわけえ。そいつは《幽霊体》だが、生身の人間のように、生々しい奴で、女を犯した上に、乳首を噛みきり、下っ腹を裂いたりもする。そう、そいつの本体は、元死刑囚佐川洋次郎、へへ、この俺様のことだがな」

「幽霊男」はそう言い募ると、さも愉快そうに、長い手をぶらぶらさせながら、踊つてみせた。垂れた左目の黄濁色の眼が、これまた揺れながら、時折り、ちかちかと光った。

「こんなところで、いつまで話をしていても、ぼくは死を待ただけなのです。いいかげんにして下さいよ」

改めて、英輔が怒りをぶつけた。

英輔の訴えがやっと通じたのか、「幽霊男」は、次のストーリーイを示した。

「お望み通りに、瞬間移動の術を用いよう。どんな雪の中でも大丈夫さ。俺様と一緒に、ここから移動だ。懐かしい皆様との再会も果してもらわねばな。生きている奴もいるが、死んでいる奴もいる。そうさな。そっちの方もお楽しみつてわけよ。ここから、ひよいと、谷を越したところで、ご一行様はお待ちになっておられる。お前が言う婚約者とかつての、機嫌よくお前を迎えてくれればいいが、さて、こっちの方もどうなるか。俺様の見方では、お前に勝目はないよ。ま、すっかり、愛の押し売りでもやって、女を取り戻すべし。へへ、ご健闘を祈るつてところかな」

「幽霊男」は楽しい口調でそう告げると、英輔を差し招いた。

ふあつと、英輔の体が軽くなった。雪に体は埋もれていたのに、英輔は二本の足で、しっかりと、その場に立ち上がった。

そこがどこなのか、英輔はわからぬまま、しばらく、暗い闇の中に立ち竦んでいた。英輔の頭上には、一メートルほどの高さの岩棚があり、自分が立っている足元も、でこぼこした岩床の道となっていた。

湿った空気がこもっている洞窟のような場所に、英輔は、一人、迷い込んだようだった。英輔の記憶は、どこかで途切れていて、どうして、この場に自分がいるのかさえ、いまは、判断しかねていた。

「幽霊男」の姿はなく、さっき自分が体験した不思議な時間のことも、英輔は直ぐには思い出せずにはいた。

ぼとりと水滴が頭上から落ちてきて、英輔の額に当たった。手の平に受け取った時、きらりと水玉が光った。

やっと、英輔は自分の立場を思い出した。

愛香の行方を求めて、雪の山中にまでやって来た―それから、道に迷った末に、すんでのところに、ぼくは凍死しかけた。誰かが、ぼくを救った？あれは誰だったのか？

（佐川洋次郎？元死刑囚、そこまではわかるが、あの男は幽霊と名乗った。そうだったんだ。ぼくは悪い夢を見ていたような気がするが、あれは夢なんかではなかった。確かに、「幽霊男」だったが、ぼくの知らないことまでも、まことしやかに、語って聞かせた。あの「幽霊男」の言うことはだたらめとは思えない。愛香に関することも、エンバーマーの宇宙に関することも、みんな、真実に近い話として、ぼくには受け取れた。何もかもを、見通している？今度の一連の物語の中で、あの「幽霊男」は、すべてを知り得る立場にいるのではないか。ぼくにはそのように思える…）

英輔は「幽霊男」が実在することを、この時点でやっと認めた。

また、水滴が落ちてきて、足元の岩場に小さな光の玉を散らせた。

「前に、進むしかないんだ。後に戻ったところで、入り口があるとも限らない」

英輔は上着のポケットに入っていた懐中電灯を取り出し、前方を照らした。

小さなカーブになっていて、下にと岩の道は続いていた。英輔は一步を進めた。

「ふえー、ふえー・ふっふっ」

前方の闇から、奇妙な声が聞こえてきた。

一瞬、英輔は身構えたが、どこかその声は弱々しく、英輔は身の危険までは感じなかった。こちらの足音を聞きつけて、助けを求めている声のようにも、英輔には聞こえた。

狭い道を下り、数メートル進むと、岩棚になっている場所があり、そこで人が動く気配があった。

近寄ると、やせ細った男が一人、竹柵の組まれた牢獄と思われる場所で飼われていた。英輔の方に向けて、骨と皮ばかりの痩せた手をその男が差し出した。

「あ、あなたは？」

懐中電灯の明りに映し出された男の顔に、英輔は見覚えがなかった。

「わ、わたしは、や、やまうら…です」

「やまうらさん、どうしてこんなところ？」

「あ、あの幽霊めに、わ、わたしは、生き血を吸われていて…それで、も、もうだめ

です。わたしはもう死ぬでしょう。こんな穴の中で：死、死ぬなんて」
よく観察すると、やまうらと称する男の顔には死相が浮いていた。

英輔の知らないことではあったが、山浦看守長は、玉木拘置所所長が死刑執行場で、佐川洋次郎に酷い方法で処刑された場に立ち合い、そして、そのまま身柄を、瞬間移動(テレポーシヨン)の術で、この山中に生きたままに移された。その後は、「幽霊男」の幽体生成物(エクトプラズマ)の補給エネルギーの役割を負わされて、山浦はひとまず生きていることを許された。

山浦が言う通り、この囚われ人は、生き血を「幽霊男」に吸われ続けていたことになる。「玉木所長は首吊りの刑になり、あの幽霊めのために、殺されて、そして：わたしは知らぬ間に、ここに運ばれていました」

「すみません。この場所で、その…。女性を見掛けませんでしたか？」

「わたしだけです。ここで飼われているのは」

消え入りそうな声でやつと山浦は答えた。

岩の一つに背をもたせていたが、何度か、山浦は肩で息をした。

「あのお…。わたしが死んだら、あなたが今度は生き血を吸われるかも知れませんよ。あの幽霊野郎は《紫魂水》の効力を知っているんです」

「は？《紫魂水》？」

と、英輔は問い返した。《紫魂水》の効用については、以前に、根本助教授から、その一部の情報は聞かされ、英輔は知っていた。

が、その話に聞き入っている暇は英輔にはなかった。

「それで、あの、どうしても、ぼくは行方不明の女性の行方を突き止めたいものですから、この穴蔵のどこかで、若い女性の声を聞きつけたことはありませんでしたか？」

「ここから解放してくれれば、教えますよ。ともかく、わたしはこの魔窟から逃げ出したいのです」

「わかりました。でも、そんな体で大丈夫なんですか？」

「大丈夫も何も、助かる方法はそれしかないじゃありませんか。ああ、そうそう、時々、若い女の悲鳴のような声が聞こえてくることはありませんよ。どこの場所とはわかりませんが」
いまにも、止まりそうな息の下で、山浦はこれだけのことをやつと英輔に伝えた。

半白の目をやつと見開いていた山浦だが、ロープで編んだ竹柵を解くと、一人、這うようにして、暗闇のどこかにと這いずって行った。その姿を英輔は見送ったあと、さらに、奥の岩室を目指した。

(愛香はどこに？まさか、愛香も「幽霊男」の手に掛かっているのではないだろうな。やまうらという男も、あの「幽霊男」の手に、愛香がかかっているように口にした)
英輔には新たな心配の種が生じた。

エンバーマーの宇野に、この「幽霊男」、どちらも、自分にとっては敵だという思いが英輔には強くなった。

さらに、奥に向かうと、道は二つに分れていて、英輔はどちらに行くべきか迷った。が、人が一人通れるぐらいの岩穴の開いた場所からは、微かに明りが漏れていたのだ。ついで、英輔はそちらに気をとられてしまった。

明りに誘われ、岩穴に入った。

と、そこは全体が平たく、開けたスペースになっていて、低い岩天井ではあったが、奥行きのある場所だった。奥には何段かの岩棚があった。明りの正体はローソクであった。

祭壇に供える灯のように、左右に一本ずつ、そのローソクは灯されていた。

恐る恐る、祭壇を思わせる岩棚に英輔は近づいた。入り口から十数メートルほどあった。その場所には、何体かの人間が横たえられているようだった。一目見た時から、それらが死体であることは、英輔にはわかった。

全部で、五体置かれていた。全員が裸身なので、男女の別は直ぐに知れた。男性が二人に女性が三人だった。

（まさか。愛香が……。このようなことになっているのではないだろうか……）

ちらと遠目で、女性の死体を見た。英輔の足は竦んだ。見たくないという思いのせいか、目の前がくらくつとし、その視野が狭まった。

が、勇を奮って、一步、二歩と近づき、英輔は女性の死体を検証した。見た限りでは、愛香に似た死体はなかった。

やっと、一安心したが、何体もの死体を前にし、英輔の気持ちはなおひるんだ。

さらに近寄って見ると、右から二番目に据えられた死体が、根本助教授であることがわかった。頭の禿げ具合、その人相からして、根本助教授であるのは間違いなかった。恨めしうに剥いた目が宙に向けられていた。英輔は目をそむけた。

「先生、こんな姿になって……」

英輔は言葉を呑んだ。

根本の死体には、手と足の付け根、首、胴体、下半身の五カ所に切断面があった。

英輔はその切断面の鋭さから、スライス旋盤機が用いられたと判断した。根本がSOSを発してきた時、英輔はJESテーションに駆けつけたが、時すでに遅かった。あの時、「幽霊男」は根本を殺害していたのだ。

もう一点、根本の死体を観察した英輔は、死体にどこさされたエンバールミング法に注目した。ていねいな手法で、根本の死体の切断面は縫い合わされていた。

殺害順なのか、一番目に置かれた死体が、玉木所長だということが、英輔にはわかった。

「これが、あのやまうらという男が言っていたたまき所長の死体なのか。たしかに、首に強い索条痕がある。これは首を吊られた者特有のねじれ跡のようだ」

その死体にもエンバールミングはほどこされていた。首の索条痕には、茶系統のファンデーションが用いられていて、傷跡が目立たぬような処置がされていた。

だが、医師である英輔の目から見れば、死因が縊死であることは、疑うべくもなかった。

凌辱殺人魔を名乗ったあの「幽霊男」の仕業なのか、女性の死体には酷い仕打ちを受けた跡があり、英輔は目をそむけた。

「こんなことがあるとは……」

その思いは、当然のことながら、愛香への思いとつながった。囚われているに違いない愛香がどのような仕打ちを受けているのか、英輔は背筋が寒くなるのを感じた。

目の前には、「幽霊男」が最初の犠牲者にした斉木加津子の死体が置かれていた。

エンバールマーの宇野のていねいな仕事ぶりが、ここでも、際立った。

実際は、乳首を噛み切られ、下腹部を裂かれていたのだが、傷跡がわからぬほどに、その死体は修復されていた。

二人目の女性も、三人目の女性も、凌辱・殺害の方法は同じと思われた。やはり、ていねいに、エンバールミングは行われていた。

これらの女性は死んでいるのに、英輔にはとても美しい女性のように思えた。

口紅の色の鮮やかさ、そして、生気を感じさせる頬紅、色を点じたのか、ピンク色が添えられた修復された乳首、そして、下腹部の茂みは、きれいに剃り揃えられていた。

「いや…この、妖しい感じとは、一体、何なのだろう。あの、エンバールミの宇宙がこのよ
うな、この世にはあらぬ空間を作り出した。死体を、一体、一体、きれいに修復することが、
あの男の生きがいとなっているのだ。これらの死体は、あの男にとっては、美しい飾り物の
一つで、そして、死化粧をほどこされた女たちは、すべて、自分の所有物だと、あの男は考
えているのではないだろうか」

魅入られていたわけではないのだが、英輔はしばらくその場に立ち止まっていた。

当然のことながら、愛香のことが頭に思い浮かんだ。「幽霊男」の言を借りれば、愛香も死
体の美しさに憧れの気持ちを抱いている女性ということになる。

愛香の口癖は、死体がいちばん美しい、だとも、「幽霊男」は英輔に告げていた。

英輔は自分の婚約者に向けて、愛の言葉を語り掛けた。

「もし、愛香がこのような仕打ちを受けているなら、いや、もしも、殺されているなら、迷
わず、ぼくは愛香の後を追うことだろう。「幽霊男」に約束した通り、ぼくは愛香と共に、医
学用バーチャル体になる覚悟はできている。ぼくにとつての愛の世界とは、愛香と共に、生
き、そして、死ぬ、この道しか、この方法を選びとることしか、いまのぼくの選択肢の中
にはない。そう思ってきた。いまだって、このぼくの考えは変わっていない」

この洞窟の奥には、どんな恐ろしい仕掛けが用意されているのか、英輔にはもうそんな仕
掛けの舞台など頭になかった。

真に愛する女性、愛香の行方を求めて、英輔は次の一歩を進めた。

4

「どうして、こんなことが…。だが、これは現実のことなのだ」

自分にそう言い聞かせながら、英輔は自分の目の前で起きている出来事と向かい合っ
た。

死体置き場から、数十メートルほど入った洞窟のくぼみの場所で、英輔はパソコンで送ら
れてきたと同じ場面に遭遇することになった。一段低くなった岩穴があり、英輔が立っ
てる位置から、そのくぼみの場所は一望できたが、五メートルほど離れていたため、少し距離
があった。

いきなり、カメラのフラッシュに目を射られた。人影が浮いた。妖しい光景がそこには用
意されていた。髪を振り乱した裸身の女がカメラを構えた男の被写体になっていた。

(愛香…、あい、か…)

と、呼びそうになったあと、英輔は口を噤んだ。愛香に似てはいたが、そう、呼ぶ

だけの確信がなかった。おしろいを塗りたくられたその顔は仮面をつけた女のように見えた。あごひげを生やした男が、裸身の愛香らしき女性のそばにいて、しきりに、カメラのフラッシュの閃光を瞬かせた。

瀬野レオを名乗っている宇野俊光に違いなかった。男の眉根に深く刻まれている立て皺は、紛れもなく、あの仕事に熱中している時のエンバーマーの宇野の表情そのものだった。

その時、ちらと、その男が英輔の方に視線を投げて寄越した。敵意が込められていた。首から掛けたカメラから、いつとき、その男は手を離れた。こちらに向いて胸を張ったあと、一度、英輔の方に強い視線を注いでから、男はあごひげを自分の手で剥がした。

エンバーマーの宇野の素顔がそこにはあった。宇野は英輔をじろりと見やつてから、また、カメラに手を掛けた。

フラッシュが瞬いた。

愛香とよく似た女は、英輔が、その場所にいることには、気がついていないようだった。小さな口をぽあーと開け、女はくの字に腰を折ると、カメラに向かつて、媚びを売るようなポーズを取った。髪を両手で掻き揚げた。

英輔の目で見える限り、美しいポーズとは言いかねた。髪は何日も梳いていないのか、乱れたまま、体だつて、薄汚れて見えた。

女は求められもしないのに、くびれたその腰をくねくねと動かしてみせた。「幽霊男」の解説通り、女はマインド・コントロールの術中に嵌っているのかも知れなかった。

「あなた様の好きなように、愛香は身も心も、すべてをあなた様に捧げます」
「やはり、愛香なのだ…」

英輔は絶句した。

その場に立っているのが、辛くなり、英輔は力なくその場にしゃがみ込んでしまった。

「わたしは生きながらの死体、もう、この世のものでないのかも知れません。暗い闇の中で、愛香はひっそり咲いていればそれでもいいのです。凜とした美しさの、あの山ユリの花のように。わたしの肉体のそのかたちそのものがあなた様のお気に入るなら、あなた様が言われたように、愛香は例え、死体になっても美しい女、死体になったら、永遠にきれいでいられるとおっしゃったあなた様のその言葉を信じて、わたしはあなた様の愛の虜となったのです。こんなに醜い愛香を、あなた様は、美しい愛香に生まれ変わらせて下さるのですから。そして、愛香はあなた様が望む通り、永遠に美しいままの肉体を持った女として、いつまでも、輝いていられるのです」

どこかもの憂い感じのもの言いだつたが、愛香の語る言葉の内容は、終始、これまでの、英輔が知り得たことと、一致していた。

何かに、憑かれたように、愛香はこれだけのことを、一気にしゃべった。そのあと、愛香は自分自身を納得させるように、頷いてみせた。それから、宇野を見返すと、愛香はにっこりと笑って見せた。

小首を傾げた時、双つの乳房が、儂げに揺れた。女に成り切れない感じの小さなかたちなので、英輔には愛香は少女のようにも見えたが、傷ましさを思いの方が先に立った。宇野が愛香におもむろに語り掛けた。

「わたしは、永遠に愛香を愛することができよ。いついつまでもだ。そうさ。愛香

の肉体をこのまま、わたしは申し受けたいのだよ。その美しい肉体が朽ち果てる前に。例え、死体となっても、愛香は永遠に美しい。いや、死体となるからこそ、永遠の美しさが保てるのだよ。わたしがエンバーマーと知ってから、愛香は『魂の愛』をわたしに捧げてくれることを誓った。そうだったね。いや、その美しい肉体もだよ」

愛香に向けた文句は、英輔を意識したもののようだった。その文句が真実なのか、愛香は微かに頷いた。死面には表情はなかったが、その意志のほどは示されていた。

この時点でも、愛香は英輔の出現にはまるで気がついていないようだった。英輔が岩陰に、身を屈ませているせいもあったが、愛香の位置からは、英輔の姿はやや死角の場所となっていた。

「婚約者の男は愛香に本当の愛を捧げてくれたのか。愛香が真実、身も心もすべてを矢萩英輔に捧げていたとしたら、この場所に愛香は来ることはなかった。そうだろうか？」

「はい。あなた様のおっしゃる通りです」

「わたしが愛香の肉体に執着しているのは、愛香のその美しい肉体が欲しいからだ。それも穢れないままで、わたしは申し受けたい。そして、誰の手にも渡さぬように、わたしは愛香の心をその美しい肉体に封じ込めて、永遠にその肉体を、わたしだけのものにしたいのだ」

宇野がそう告げた時、なぜだか、宇野は急に顔を震わせ、目が虚ろになった。そして、愛香の体の上に乗る掛かるような姿勢で倒れ込んだ。受け止めた愛香も一緒に、岩床の上に重なるようにし、倒れた。二人の体は重なっていたのではないが、英輔から見る限りでは、相抱き合っているような状景に見えた。

静止画像の一コマが目の前に示されていた。

と、うつすらと、あたりに、紫色のオーラ光が忍び寄った。岩天井に長く伸びつな大きな影が投影された。どこの場所にいるのかは、英輔にはわからなかったが、岩室の一角から、あの「幽霊男」の声が聞こえてきた。

「へへ、俺様だ。俺様の人格の一部が、宇野の体には宿っていることを忘れて欲しいよ。穢れないままでその女の体を申し受けたいと。勝手な台詞だぜ。そんな死臭のするような薄汚れた身なりの女にや、いまるところは興味はないが、俺様は俗人、おまけに、婦女凌辱殺人魔、おいそれと、処女のまんまで、その女は死体にはならせねえよ」

オーラ光が映じていて、宇野と愛香の重なり合ったように見える体には、やはり、暗紫色の光が注がれていた。

二人が気を失っているか、どうかは、英輔がいる場所からは、確認できなかった。

「おい、矢萩とか言ったな。ここまで、お前を案内してやったのも、これは宇野の意志の一部がこの俺様の幽霊体の中にあると言うことをはっきりと教えるためさ。俺様と宇野は二人合わせて一人、いや、心の方はちーとややこしい。女だけにしか興味のない俺様の心根とかいうものと、訳のわからない、瀬野こと、宇野の心とやら言うもの。どだい、水と油なんだが、ま、その何だ。いままでのところは、俺様が宇野の肉体にだけ憑依していたものだから問題はなかったが、宇野の心の遊びにも付き合わなければならぬ。面倒なことさ。俺様は天下に名だたる婦女凌辱殺人者、俺様は矢萩何とかのように、バーチャル遊びに夢中のアダルトチルドレン野郎でもなけりや、死体だけしか愛せない変態野郎のエンバーマー男でもないんだ。ここんところを、よく、わかっただけじゃ愛せない変態野郎のエンバーマー男」

「幽霊男」が自分の立場を英輔相手に説明してみせた。低い押し殺したような声だった。ぶわぶわと揺らめく、暗紫色の幽霊体がやっとかたちを現し、いつの間にか、倒れている二人のそばに「幽霊男」は立っていた。

その間、宇野は何度か、起き上がるようにしたが、力なく、手足をわずかに動かすただけだった。「幽霊男」もそんな宇野は無視しているように、英輔には思えた。

次に、発した「幽霊男」の音が、急に、別の男のものになった。宇野の人格が「幽霊男」に乗り移ったのか、やや、バリトン調の音が発せられた。それと同時に、宇野がもつこりと、その場から体を起こした。愛香は何の反応も示さず、まだ、倒れたままだった。

「幽霊男」とは別のもう一つの人格がその時、表われ出た。

そして、「幽霊男」の顔と重なる不安定なかたちを示しながら、その宇野らしき男は自分の主張を英輔に告げた。

「矢萩英輔にわたしの愛する女を取り戻す資格なんかない。そのことは自分の胸に問い質してみればわかることだ。羽村愛香はお前も知っての通りの無類のナルシストだ。女の成長は二十歳で止まり、そして、途端に、肌にしみや、化粧焼けなどが生じる。二十三歳という年がどういう意味を持っているか、お前にはわかるだろう。バーチャル少女のように、いつもすべらかなお肌というわけにはいかないんだ。もう一つ、わたしの扱った死体の女たちをよーく観察すれば、これらはわかることだ。これは女ならではの悲しい性(さが)、微妙な女の心の揺れというものがわからぬお前は無神経な男なのさ」

明らかに、その声も、発言内容も宇野のものだった。相変わらず、宇野と考える顔になるその時も、暗紫色に染められているのだけが、その場に、「幽霊男」も介在していることを物語っていた。

「そんなんじゃない。ぼくは…」

と、英輔が反問をしようとした時、宇野の顔に強いオーラ光が生じた。憑依したその顔がさらにオーラ光に染まり、そして、大きく目は見開かれた。

宇野が英輔をさえぎり、さらに、強い口調で述べ立てた。

「わたしが愛する愛香はこれ以上は年は取れないよ。このまま、きれいなフォルム、素顔の美しさのまま、彼女は死ぬことを望んでいる。それは、お前だって心のどこかで望んでいたことじゃないのか。何しろ、愛香をもお人形のように扱ってきた男なんだから。お前は確か、潔癖症なところもあるという話だが、飾り物の、そう、コノハズクのような剥製品なら、お前だって、いつも、そばに飾れたてて、好きな時に眺めていられることだろうよ。もう、その望みも手遅れだがね。わたしは愛香をわたしの永遠の花嫁にし、この洞窟の中に一輪のユリの花のように飾り立てて、毎日、美しい愛香の裸身を愛でて暮らそうと思っただけだ。誰にも邪魔されたくない。もちろん、矢萩英輔の命もわたしは奪うつもりだ。佐川洋次郎には肉体を貸していることで、貸しがあるから、わたしの心が命じれば、お前などこの世から葬るのはわけはない」

「そんなことができるはずはない」

やっど、英輔は返答をしたが、立ち向かう具体方法が頭の中にあるわけではなかった。

「わたしの言うことが納得できないなら、わたしの死の花嫁になることを誓った愛香の心の内を直接聞くがいい。その機会をお前にやるよ」

そう言うと、「幽霊男」が放っていた紫色のオーラ光が、この場から、いつとき、消えた。そして、宇野の姿も見えなくなった。

5

「愛香、愛香、ぼくだよ。英輔だ。いま、君の目の前に立っている。これは、夢うつつの世界のことじゃない。現実の時間の中に、愛香はいま身を置いてるんだよ」

そう、英輔は愛香に問い掛けた。

だが、愛香は焦点の定まらない目を英輔に向けたただけだった。近くに寄った時、垢のまま離れた体のせいで、腐臭が英輔の鼻をついた。

もう、何日間も、愛香は体を清めてはいないようだった。それだけではない。乱れた髪も、愛香の額にはまとわりついており、その裸身も埃りと垢にまみれていた。

それに、全身に塗りたくられた死化粧のおしろいのせいもあり、到底、英輔には目の前にいる女が愛香とは思えなかった。

(マインド・コントロールに掛けられている？それが本当だとしたら、まずは、その心の操作の術を解かねばならない)

そう、英輔は思ったが、愛香に根気よく語り掛ける方法しか、いまは思い浮かばなかった。英輔は愛香の肩に手を掛け、上体を揺すってみた。がくがくと頭が揺れただけで、愛香には何の反応もなかった。

と、ふーと、紫色のオーラ光が愛香の裸身に降り注いだ。「幽霊男」が手を貸したのか、愛香の顔にやっと生氣のようなものが少しだが射した。が、まだ、どこことなく、愛香の体全体はだるそうに英輔には見えた。

「愛香、ぼくだ。英輔だ。ぼくは愛香を救い出すために、ここまでやって来た」

「…え・い・す・けて、誰？誰なの？」

もの憂い感じのしゃべり口だった。

まだ、何者かに操作されているような語り掛けに、英輔には思えた。

「何を言っている。ぼくと愛香は婚約者同士、共に、愛し合っている仲じゃないか。え、そうじゃないのか」

「あなたは…。そうなんだ。エイスケなの？でも、エイスケって、ああ、そうか。エイスケって人が愛しているのは、あのM I H A N Aちゃんとか言う可愛い美少女ではなかったの？そうよね」

「そんな、あれはあくまでも作られた空間の話じゃないか。現実のことじゃない」

「そうでもないわ。他にも、エイスケって人は何人かのバーチャル少女のファンだったはずよ。わたし、英輔のパソコンルームで、アダルト美少女ゲームのソフトをいくつか目にしたことがあるわ。エイスケって人は、他にもバーチャル美少女に夢中になっていたわ。わたし、前からそんなこと、知っていたのよね。そうそう、わたし、少しだけ思い出したわ。それでね。エンバーマーの男の人がわたしをM I H A N Aちゃんに仕上げてくれたのよ。あ

の人もバーチャル美少女の作り手の一人、とても、器用な人なのよ。それで、わたし

の願いを聞いてくれて、M I H A V Aちゃんが誕生したのよ。わたし、M I H A N Aちゃんが、とっても、気に入っているの。だって、エイスケって人が、M I H A N Aちゃんの大ファンなんだから。あなたがエイスケなら、訊いてもいい？どうだったの？これからも、ずっと、あなたのお気に入りの子に、わたし、なれそうかしら？」

「そんな悲しいことを言わないでくれ。ぼくが愛しているのは、いま目の前にいる愛香だよ。愛香自身さ」

英輔は両手を差し出し、愛香を抱擁しようとした。が、するりと、愛香は身を交わし、後じさりすると、微かに、首を横に振った。

「あら。わたしには、愛香ってどこの女の子のことかわからないわ」

「何を言っている。君自身が愛香だよ。あの、ワルツのステップを踏む時の、優雅な女性こそが、愛香なんだよ。思い出してくれ。愛香、どうか、『幻想交響曲』を踊る時の、ぼくのパートナー、あの素敵な愛香に戻ってくれ。二人はやり直せるさ。愛香が得意なあのコーナーワークのナチュナル・スピン・ターンの身のこなし、それに、ぼくのパフォーをやるステップだって悪くはない。二人は気の合ったパートナーなんだから」

この問いかけには、愛香は多少の反応は見せたようだった。英輔はエスコートすべく、愛香に向け、再び、手を差し伸べた。

ワルツのステップの一步を踏み出す時のポジションに、英輔は足を揃え、第一小節のステップをこなすナチュナル・スピン・ターンのポーズを取った。

が、愛香はそんな英輔を無視した。

が、たじろいだ表情も見せ、心なし、愛香は身を引くようにした。ワルツの話題を持ち出したことで、愛香の気持ちには動揺が見られたようだった。

愛香に正気の部分が戻ったような気がし、英輔はなおダンスの話題を持ち出した。

「どんなことがあっても、愛香が新調したというあのダンスコスチュームを着て、ワルツのステップを踏む機会を作るさ。いまの愛香は愛香じゃないんだから。ダンスファンを魅了したときめきのあの円舞曲、愛香なしには、ぼくはもうワルツを踊れないんだよ」

「：わたしは、何度も言う通り、そんな名前の女ではないわ。ワルツなんて、そんなの：」

愛香は首を左右に振ると、言葉を濁した。それから、心なし、目に涙を貯めた。

自分のあらぬ姿に、やつと、気づいたように、その時、愛香は表情を曇らせた。同時に、両の乳房を手で隠した。愛香には恥じらいの感情が兆したようだった。

それから、裸身の自分を人の目に晒していることに、耐えられなくなったのか、愛香はその場に座り込んでしまった。

これまでの愛香とは様子が違った。

そして、上目勝ちに、英輔の方を見ると、ぼそぼそとした口ぶりで言った。

「もう、帰って。愛香はもう死んだのよ。わたしはそんな名前とは関係のない女になったのよ。わたしの気持ちもわかって。お願いよ」

「よかった。愛香は自分が愛香だということを、いま、認めたんだよ。だったら、ぼくは愛香との愛を取り戻すために、どんなことでもする。そのために、危険覚悟で、この雪山にやって来たんだ」

「もう、わたしは愛香なんかじゃないわ。こんなに薄汚れた女なんか、あなたは絶対

に認めないはずよ。そうでしょう。わたしは穴蔵で飼われている女、こんな薄汚れた女なんか、あなたの世界には住んでいないはずだわ。もういいの。わたしは、明日はこの命を絶つて、エンバーマーの彼の術にすべて身を任せる気だったのよ。わたしが、これは選んだ方法でもあるわ。とつても、これ、美しい話だとは思わなくて？」

「違う。違うよ。愛香はあの男に騙されているんだ。それに、愛香はあの男にマインド・コントロールされているんだ。そのことに早く気づいて欲しい。この山中に連れて来られたのだから、拉致同然、それだけじゃない。あの男は愛香が言った通り、動物写真ではトリックを用いていた。それも、動物を罠で捕らえ、剥製に仕上げから、それらしき場面を作り、撮影するという卑劣で、残虐な方法で。愛香とて同じさ。心の罠で愛香を拘束し、あげくに剥製同然に、愛香の美しい体を死体にしようとしているんだ」

愛香を説得するために、英輔は懸命になり話を続けた。それなのに、愛香の心は移ろっているのか、また、視点の定まらない目になった。

「わたしは誰なの？そして、あなたはエ・イ・ス・ケ？それから、わたしは、わたしは誰なの？」

記憶喪失部分と、正気部分、愛香の心は、どちらかにぶれながら、見定めようのないうつろいの様を見せた。

「君は羽村愛香さ。しっかりしろ。愛香は山スキーホテルにやっ来た日に、この山中に連れて来られた。悪いのは、瀬野こと、宇野だ。もう一度、愛香にぼくは訴える。ぼくは愛香を愛している。どんなことがあるうとも、二人の心は離れることはない。そんなこと、ぼくには考えられない。二人はまだやり直すことはできるさ。そうだろう。二人の心はまだ清いままだ。この純な心の領域までも、ぼくたちは犯されてなんかいない。誰にもだ」

二人の話が核心に近づこうとした時、また、岩天井の一角から、「幽霊男」のだみ声が届いた。

「おっとそこまでだ。こういう話つての、美しく過ぎて、体中がむすむすしちまう。まあまあお二人さん、愛の物語って、夢うつつのまんま、あるようでないような話でいいんじゃないの。本当のことを二人とも、知ることはないつてことさ。そうだろう。お前ら、心と心とか、美しい愛が何とか、そんなもの信じているのかね。それこそ、幻、何とか言ったな。そうそう、『何とか幻想交響曲』か。これからは、『葬送交響曲』の始まりさ。運がよけりや、俺様のように、幽霊でこの世に復活ってストーリーイもあるつてこと。代は見てのお帰り、これからの物語の進展ぶりを、俺様も楽しませてもらうよ」

待ったを掛けた「幽霊男」が、もつたいをつけてから、これからの物語について語った。それから、「幽霊男」はさらにだみ声を張り上げ、英輔と愛香に申し渡した。

「お前らの美しい話はそれまでにして、これからの舞台に元婚約者同士のお二人さんに加えて、新しい恋人、宇野なにがしを、ご招待させてもらうことにするよ。大団円といきたいところだが、さあてと、どうなるか。忘れるでないぞ。あくまでも、俺様が主人公だ。いい役は俺様が務めさせてもらう。いいな」

第八章 聖なる愛

1

物語の登場人物たちが岩室に顔を揃えた。

瀬野こと宇野も「幽霊男」に導かれてか、英輔と愛香の前に姿を現した。これで、英輔と宇野との対決の構図がはっきりした。

「幽霊男」はこの場を取り仕切るつもりか、初めに、目の前のみんなに告げた。

「俺様には取り立てて、大騒ぎするようなことは何もない。そうさな。俺様の欲望のままに事が推移すれば、それで文句なしだ」

暗紫色の幽霊体が、まるで、息をするように、ぶわぶわと動き、そして、飛び出した灰黄色の目玉が気味の悪い光を放った。

その時、宇野が「幽霊男」にこれまでの二人の関係についての疑問点をぶつけた。

「わたしの肉体が、佐川洋次郎の《心霊体》に、時により、呑み込まれてしまうことがあるのを、わたしはすでに知っている…。わたしの心までもが、弄ばれているのか、多くはわたしの心も肉体も苦痛に苛まれてるようだ。つまりは、わたしの意に反して、わたしの肉体と心は、自分ではない自分に、人格がゆがめられているのではないかと思う。そうしているのは、佐川洋次郎なのではないか」

「そいつは、お前じゃないお前、俺様じゃない俺様だ。宇野何とやら、お前の心の中を覗いてみると、純粹愛の申し子のような顔をしているが、そんなきれいな事がどこま

で通じるのかな。言っておくが、何人目かのお前の人格は俺様自身なんだから、いつまで、いい子ちゃんの顔をしていられるかだ。そろそろ、化けの皮が剥げる頃だろうよ」

「それはそちらの言い分だ。わたしはそんなことを考えたこともない。別人格の話をされても、それは、そちらがわたしの肉体を借りた上で、わたしの心までも操っているからだろう。わたしは心底、愛香を愛している。それも、いまのままの美しい愛香をだ。わたしの愛は永遠だ」

「そんなことをぐだぐだ言われてもな。そちらの二人、いや、もう一人の男か。その医者 of 男もお前と同じ台詞を吐くことだろうよ」

「幽霊男」と宇野のやりとりを、その傍らで英輔と愛香は聞かされていた。

愛香の裸身には英輔が与えたマウンテン・パーカーが肩から着せられていたが、愛香と英輔との距離は空いたままで、英輔もそのそばに寄れずにいた。愛香も目を伏せたままで、身を固くしていた。

「おい。その若造、話はんたんさ。俺様がその気になれば、愛香とかいう女はたちまちのうちに、女にされちまう。この俺様にな。この意味はわかっているだろうな。俺様は己れの欲望に正直なだけさ。お前ら、二人の男たちのように、やったら、かっこついたりはしないのよ」

「馬鹿なことを。それじゃ、愛香を誘き寄せ、拘束した上に、愛香の肉体を《永久保存の美体》に仕上げて、自分だけの飾り物にしようとしているエンバーマーの男と、あなたも何ら変ることはないじゃありませんか」

やっと、英輔は発言の機会を与えられ、「幽霊男」に言った。

「へっ、幽霊様に説教か。その話は、宇野と二人で決着をつける。俺様は話がどう転ぼうと知ったことじゃない。用があるのは、その薄汚れた元ナルシストの女だけだからな。俺様がお前らが手を出さなかつた分、たっぷりその女を可愛いがつてやるよ」

「幽霊男」はそう言うと、のっそりと幽霊体を動かし、愛香をわが物にするために、その近くに身を寄せた。恐ろしさに、愛香はただ震えているだけで、声も出せずにいた。

ふわーと、暗紫色のバリアが、愛香の体を包んだ。閨（ねや）の帳（とば）りの空間に、愛香は閉じ込められてしまったかにも見えた。

「愛香、愛香…ぼくが愛香を守るよ」

と、英輔は愛香に声を掛けたが、不動金縛りにでも遭っているのか、英輔の体はままならなかつた。同様に、宇野も動きを封じられているのか、何かを言おうとし、口をぱくぱくさせただけだった。

「俺様は女を犯しながら、たっぷりと楽しむタイプでさ。処女の女だからって、感激しやしない。お前らのように純潔主義者でもないからな。行為中に、赤子のように乳首を吸うんだが、乳液が出るわけでなし。俺様は乳首を噛み切って、赤い乳をちゅうちゅうと吸う。生臭くて、いい味だ。それから、俺様はものにした女の腹を引き裂く。これが俺様のこれまでのやり方よ」

「幽霊男」はこれまでの自分のやり口を、自慢たらしく述べ立てた。愛香の身を覆っていたマウンテンパーカーがひよいと剥がされた。そこには、裸身をすぼめた愛香が体を震わせながら立っていた。

「うーむ」

と、唸り声がし、その時、宇野が上体を苦しそうに折り、岩床の上に倒れ込んだ。

幽霊体と宇野の肉体は合体した。暗紫色のオーラ光が、すっと走り、その瞬間のこと、宇野は半ば意識を失った。半白の目を見開き、宇野は何やら、ぶつぶつと呟いた。

よくは聞き取れなかった。どうやら、「あ・い・か…」と、宇野は口にしたようだった。

「幽霊男」は自分好みの舞台を用意して、その主人公役を自分のものにしようとしているかに思われた。

もはや、絶体絶命の場面だった。愛する愛香がこの世のものとも知れぬ化け物に、犯されようとしていたのだ。しかも、残忍な殺し方の手口まで、この化け物は自慢してみせた。

「愛香、このぼくが…」

英輔は動かぬ手足を懸命に動かした。闇の中でひたすら祈った。「幽霊男」が目の前から消滅することを願った。

「へへ、あわてることはないさ。時間は夜明けまでたっぷりあるぜ。女を襲おうつてのに、俺様がへなへな男になってはしめしめしがつかない。少々、エネルギー不足のようだ。山浦のあの生暖かい生き血を早く吸わねばな。いろんな奴の生き血を吸ってみたが、あいつのがいちばん効く気がするのさ。俺様にとつては、ま、ドリンク剤みてえなもんよ」

英輔の祈りが通じたのか、「幽霊男」の姿はその場からふっと消えた。その文句通り、山浦の居場所へ移動したようだった。

だが、愛香が囚えられた状態は変わらなかった。やや、暗紫色は薄められたものの、愛香がオーラの帳りの中に閉じ込められている状態は同じだった。

その時、うっすらと、宇野が目を開けた。オーラ光全体が薄れているのだから、肉体を借している宇野の肉体に変化が起こるのも当然だと思われた。「幽霊男」のエネルギーが減少していることが考えられた。

もっこりと、その場から宇野は起き上がると、しばらくは、怪訝そうな顔であたりを見回していたが、英輔に気づくと、途端に、険しい顔つきになった。

そして、敵意を込めた目で、英輔を睨めつけると、宇野は英輔を説き伏せるような口調で言った。

「矢萩英輔さんですね。愛香はぼくがこの世で初めて、女として愛した女性です。これまであなたの愛香に対する仕打ちからして、あなたには愛香を愛する資格はないんじゃないやありませんか。あなたは愛香の若くて美しい肉体をないがしろにした。愛香が無類のナルシストであることに、あなたはさして関心も払わなかったのですね。わたしは、美しいままの愛香を、わたしのエンバードミニング術に委ねて、永遠に美しい女性に作り変え、わたしの純潔そのものの愛を貫こうと考えているのです」

「そんな言いがかりは止してくれ。愛香がいまどう思っているかが、問題なんだよ。さあ、愛香、ぼくと一緒にこの山を下ろう。二人はやり直しができるよ。新しい二人の未来が二人の行く手には待っているはずだ」

そう英輔は愛香に誘いの言葉を掛けた。

だが、愛香はまだ暗紫色のオーラ光の帳りの中に閉じ込められたままで、二人の言い争いの様も目にしようとはしなかった。

「無理さ。いまのままの状態では。幽霊の佐川の力が愛香には及んでいる。あのバリアを払わない限り、愛香を助け出すことは不可能なのだ」

「誰が、バリアを払えるのです？このままでは、愛香はあの幽霊野郎の情欲の餌食になってしまいますよ。ぼくと、宇野さん、あなたと二人の唯一の同意点は、愛香の純潔なままの身と心を守らなければならないということです。違いますか。二人が心を合わせて結束できるのはその点だけです」

「もしかして、あなたはわたしに死ねと命じているのですか？」

「死ぬ？あなたがですか？」

「そうでしょう。佐川はわたしの肉体に憑依しているのです。わたしの肉体がこの世から消滅すれば、あの幽霊体も、肉体的な魔力を失うのです。その方法しかいまは佐川を葬むるすべはないということでしょう」

「あなたが本当に心から愛香を愛しているなら、あなたは愛香の身が穢されようとしていることに心の痛みを感じないのですか？」

「もちろん、わたしは愛香を身命を賭してでも守ろうという気持ちはあります。それが、純粹な愛なら、わたしは喜んで愛香のために死ぬことも辞しません」

「愛香の命を奪い、死体にエンバミングをほどこす、あなたの言う永遠の愛の終焉についてはどう考えているのです？」

「それは…。愛香の心次第でしょう。愛香がそう願ひ、そして、わたしに本当の愛の心を預けてくれた時、二人は本当に結ばれるのですから。愛香はいつか私にそう誓ひ、そう願ったのです。この愛香の気持ちに変わりはないはずですよ」

「だから、それはいまの愛香の気持ちを、もう一度、確かめてからでないと」

と、英輔が宇野に再考を促した時、その場に「幽霊男」が再び顔を出した。

だが、暗紫色のオーラ光はぼやけて見え、力がなく、「幽霊男」はよろよろとした足取りで現れた。それでも、愛香の肉体には愛着があるのか、「幽霊男」は愛香が囚えられている場所まではたどり着いた。そして、息が切れるのか、ひろひろした舌をせわしげに動かしながら言った。

「おい。お前ら。山浦の残り血は余さず呑んだ。それであいつはおだぶつした。あいつの血が薄くなっていたのか、ちーと、効き目が悪いようだが、待て、待て。もう数分もすれば《紫魂水》に含まれるエクソプラズムのエネルギーが効いてくるぞ。そうだ。かんじんの俺様のおっ立ち棒の方もだ」

「幽霊男」の言い分だと、しばらくは、凌辱行為は無理なようだった。本当に、幽霊体が弱っているのか「幽霊男」はだらしない格好のまま、その場にひよろりと立っていた。

同時に、あたりのオーラ光が払われ、愛香の身を包んでいた帳りの膜が薄れた。

2

「幽霊男」の支配する力が衰えたのか、マインド・コントロールの術の一部が解けたらしく、愛香の表情が生き生きとしたものになった。そして、愛香は自ら手を差し伸べ、その時、英輔に救いを求めた。

愛香は正気を取り戻したようだった。

「英輔、わたしを助けに来てくれたのね。でも、わたしは…」

そのあとは愛香は言葉を詰まらせた。愛香は初めて、笑顔を見せた。右の片エクボが可愛かった。英輔はほっとした。

「さあ、いまだ。この場から逃げ出すのは」

英輔も愛香に助けの手を差し出した。走り寄り、英輔がその手を握り締めた。

が、その愛香に向かい、宇野が自分の愛の気持ちを訴えた。

「愛香、約束が違うよ。君の美しい肉体は、もう、いまが限界なんだ。わかっているのか？いまの美しさこそが、愛香そのものなのだよ。君には美しい永遠の未来が待っている。さあ、死体こそが美しいのだ。そんな現世の男の愛なんか信じるんじゃない。愛香、ナルシストとであると信じた女は、永遠にナルシストでなければならぬんだ。さあ、わたしの心の愛を受け入れてくれ。いましか、決断の時はないのだ」

宇野は端正な顔立ちをしていたが、より一層に、眉根に立て筋が深く刻まれたことで、その真剣な思いが伝わってきた。

「心の愛と言うなら、凌辱魔の欲望から愛香を守る方法が一つしかないことを、あなたはさつき自ら口にしましたよね。あなたの肉体に憑依している幽霊体、あなたの肉体が消滅すれば、あの幽霊の男も、この世から消え去るのでしよう。愛の一つに、犠牲愛というのがあります。あなたは愛香を守るために、自ら、死を賭すことも辞さないときわたしに告げましたよ」

「それで、愛香、愛香の気持ちはどうなんだ？すべては愛香の気持ち次第なのだ」

不利な立場を強いられた宇野が性急に問うた。「幽霊男」の霊能力を借りて、愛香の心を宇野はマインド・コントロール下に置いていたのだから、「幽霊男」の霊力が希薄になったているいまは、その力は薄れつつあると思われた。

「わたしは…。わたしが愛しているのは、やはり、英輔さんよ…」

「…それなら、わたしには考えがある。二人ともこの手で、命を奪い、そして、自分の夢を叶えるしかわたしには方法は残されていない」

突然、宇野は恐ろしい形相になった。そして、愛香に襲い掛かり、その手を乱暴な仕草で握ると、愛香を自分の方に引き寄せた。

洞窟の外に連れ出す気なのか、宇野は阻止しようとした英輔を振り払い、勝手知った洞窟内の道へと愛香を誘い込んだ。

急いで、英輔もあとを追ったが、何しろ、低い岩天井である上に、洞窟の中は狭いので、直ぐには、英輔は二人に追いつくことはできなかった。暗い洞窟内の地理は、明らかに英輔には不利だった。二人の姿を見失うまいとしたのだが、ひよいと、道の途中で宇野は横道にそれたらしく、英輔の前方で不意に二人の姿は消えた。

「愛香、愛香、どこにいる？」

そんな英輔の呼び掛けにも、答えは返って来なかった。英輔には焦りの気持もあった。そのせいで英輔は道に迷ってしまった。

その間も、宇野の手によって、愛香は命を奪われているかも知れないと思うと、英輔は気が気ではなかった。

やつと、迷った末に、小さな出口らしきものを、英輔は見つけた。白い雪世界が外では広がっている、仄かな光が射し染めていた。ほっとし、英輔は救われた気になった。

だが、英輔は探索のために時間を無駄にしていた。何ほどの時間が経過したのかさえも、英輔は判断できずにいた。

救いだっただのは、外では雪は降り止んでいたことだった。それに、わずかに、月明りが望めた。英輔はあたりを見回した。

青白い闇の中に立った時、英輔は乱れた足跡を雪の上に見つけた。二人分の足跡のようだったので、勇躍、英輔はその跡をつけた。愛香が外に連れ出されたのは間違いないことのように思えた。

数十メートルほども進むと、何やら、人の言い争う声が聞こえてきた。その声には愛香の声も混じった。

英輔は懸命に、雪を踏み締め、一步、一步、近づいた。愛香に向けて、最後の愛を訴えている宇野の熱弁を耳近くで聞くことができた。

「いまはきれいでも、愛香は直ぐに、醜い女になって行く。そう、あと、数年かも知れない。女の美しさをひけらかすことができるのは。その前に、わたしが愛香を美しい女のままに封印する。どうして、洞窟に閉じ込め、身を清めることもなく、そのままにしておいたか、愛香、わかるか。見ろ。髪振り乱し、垢にまみれ、腐臭を放つ女、それが醜い女の本当の姿なのさ。わたしは愛香の死体を美しく洗い清め、エンバミングし、そして、毎日、愛香の髪を梳き、やさしくその頬に頬を寄せ、口紅のその紅をなめつくすように、心地よい口づけを毎日、愛香に授けて上げるよ。そう、いつまでも、美しいナルシストの女のままでもいいんだ。美しく生まれた女のそれが宿命でもあるのだ。例え、わたしが死んでも、愛香は美しいままで、いついつまでも、永遠に生き続けるのだよ」

「いつときの心の迷いよ。あなたに、わたしが接近したのも。それだからって、わたしの気ままな心が許されるわけでもないけれど。でも、もう、わたしは目覚めたのよ。言っておくわ。わたしは、誰とも、肉体の愛の世界はきつと持たないと思うわ。これからも。それでいいの。二人の男性に、恋心を抱いた、そのわたしの邪（よこしま）な心を罰するために、わたしはわたし自身を罰するわ。わたしは誰にも、きつと、抱かれることはないはずよ。それが、せめてもの、あなたに対する心の償い。いえ、英輔に対してもよ。この心の向け方は」

「でも、わたしには、自分の願いを叶える手段がいまも残されている。いいかね。わたしが愛香を殺す。誰の手にも渡したくないからだ。この崖の下に突き落とせば、深い谷だ。それに、冬の寒さ、生き残ったとしても、凍死することだろう。例え、傷ついたとしても、大丈夫さ。わたしがエンバマーの腕を存分に揮ってやるよ。美しいままの愛香が、わたしの手によって誕生するんだ。もちろん、お前の婚約者とかいう男も生かしてはおかない。愛香はわたしだけのものだから」

そう宣言すると、宇野は愛香の首をいきなり締めようとした。二人のいる位置は、雪が降る積もっている崖の上だった。愛香と宇野の体がつれた。宇野は愛香を崖下に突き落とそうとしていた。危機一髪の状態がそこでは展開されていた。

「待て。そうはさせないぞ。愛香、愛香はぼくが、ぼくが救ける。それがぼくに課せられた使命だ」

英輔は雪に足を取られながらも、二人に近づき、宇野に体当たりを食わせた。あお向けに宇野は倒れたが、直ぐに、熊勢を立て直し、英輔に立ち向かってきた。組んずほぐれつの取っ組み合いがしばらく続いた。

英輔の必死な思いが通じたのか、白い雪をかき乱したあと、英輔が宇野を組み伏せた。「愛香、いまこそ、はつきりと自分の意志を示してくれ。このままでは、二人は愛の決着をつけるわけにはいかないんだ。愛香の本当の気持ちが変わらない限りは」

そんな英輔の問い掛けに、なぜか、愛香は口を噤んだ。そして、背を向けると、「わーっ」と大きく声を上げ泣きじゃくった。

心の迷いとまだ愛香は戦っているかのようだった。細い肩先がぶるぶると震えた。

ふと、心を奪われた英輔の隙を突き、宇野が体の上の英輔をはね退けた。それで、英輔は危うく、崖の下に転落しそうになった。

それを見た宇野が、一気に、攻勢に転じ、英輔が今度は形勢不利の立場に立たされた。

「どちらかが、崖の下に身を投げることになるだろうよ。わたしか、矢萩英輔か。そうだ。

愛香にそのことは決めてもらおう。愛香が必要としない男は自分から身を投げて死ぬ。そういう取り決めなら文句はなからう」

と、宇野が告げた時、洞窟の中から「幽霊男」のだみ声が聞こえてきた。声は反響していて、とても、不気味な響きを伴った。

「お前らに、愛香の始末のことを、決める権利なんかないさ。やつと、幽霊様お出ましの番がまわってきたな。俺様はすっかり、元気な幽霊様になったぜ。効き目は遅いが山浦の生き血が効いてきたようだ。いいか。その女は俺様のもんだ。誰にも、手出しはさせねえ。お前ら、しだばたしても無駄さ。俺様のこれからのやり方は、よくお前らに言い聞かせた。お前らわかってるな」

途端に、ふわりと、暗紫色のオーラ光が火の玉のように、どこからともなく飛んで来て、愛香の全身をバリア様のものがすっぽりと包んだ。「幽霊男」は、どうやら、賦活(ふかつ)の力を取り戻したようだった。愛香はまた「幽霊男」の囚われ者となった。

その状況を目にした宇野が英輔に向けて語り掛けた。愛香が最大の危機に直面していることを察したようだった。

「愛香はあくまで、穢れのない女でなければならぬ。わたしの愛香に対する愛は半端なものじゃない。あなたにはできないだろうが、わたしは愛香の美しい心と体を守るためなら、何でもできる。それに、わたしの肉体に憑依した幽霊めを、この世から抹殺することができるのはこのわたしだけだ。わたしの肉体が存在しなくなれば、幽霊めはたださまようだけの幽霊に成り下がることだろう。それから約束して欲しい。愛香がそう望むなら、矢萩英輔も、いまのままの純潔の愛の状態でいて欲しいものだ。わたしは肉欲などという獣めいた行為は一切、認めないことで、これまでの自分の生をまっとうしてきた。もちろん、わたしの母親の悲惨な死に様を目にしたことが、このようなわたしを作り出した。誰も、愛香を穢すようなことがあつてはならない。男の手に掛からない女、生まれたままの穢れのない女、それがわたしの理想の女性像だったんだ」

「…わかった。そのようにするよ。愛香がそう望めばの話だが」

英輔の応諾の返事を聞くと宇野は小さく頷き、英輔を押さえつけるために組んでい

た手を離し、その場に立ちあがった。

それから、愛香の方を見やり、さよならの言葉を宇野は口にした。

「わたしは純潔なままの愛香の美しい心と体が永遠に存在し続けることを祈りながら、死の道を選ぶよ。愛は永遠さ。この世でたった一人好きになった愛香、わたしの心の中に、愛香はいつまでも、存在し続けるだろう。例え、わたしが死に果ててもだ。ありがとう。愛香、さようなら」

「本当はわたしも死にたい気持ちよ。いまここにいる男たちとは関係なく、一人でね。いまはそんな気持ちよ。わたしはまだ自分の心を整理できないでいるの。もう、英輔との愛も失ったようなものなんだもの。わたしはふしだらな女よ。そうでしょう。英輔のパソコンのパスワードを、教えたのもわたし、MIHANAに身を託したのは、きつと、そんなバーチャルの美少女たちを愛する英輔への当てつけとしてやったことよ。そして、わたしは耐えがたい身のこなしの写真を、動物のように何枚も撮られた。その淫らなポーズの一枚、一枚は英輔も目にしたはずよ。ナルシストなんかじゃなくて、わたしはどこにでもいる男好きの女の役を演じたくてあんなことをやったのかも知れないわ。淫らで薄汚くて、心まで捨てたわたし、そんなわたしはわたしじゃないわ。いまは、わたしはわたしのことを、そのように思っているの」

「もういいさ。マインド・コントロールだけで、わたしは愛香をこれまで支配してきたんじゃない。二人には蜜月のような時期もあった。知り染めたばかりの頃のことさ。その愛香の心の一部を知って、わたしは改めて、愛香が好きになったよ。でも、もう遅い。幽霊めをこの世に作り出したのは、このわたしだ。まして、愛香に幽霊めの危害が及ぼうとは。そのことに、責任も取らなくてならないんだよ」

決然と、宇野が言い放った時、また、「幽霊男」のだみ声が洞窟の方から届いた。

「おいおい。ちよい待ちだ。危害とか何とか。俺様の力が及ぶ限り、宇野も無力だと言うことを、よく、頭に入れておいて欲しいな。ついでに、教えてやるが、何年前かは知らないが、宇野の母親を殺したのはこの俺様なのさ。因果なことに、こういう巡り合わせになった。今度は宇野が愛したとかいう女が、俺様の餌食になる。お前の母親のようにな。前に、六人犯して殺したと言ったが、最初の女はよ。あの山小屋で始末した子連れの子だった。へへ、今頃、思い出したぜ」

「…わたしの母親を？今頃思い出しただど？よりもよって、わたしの肉体に取り憑いた当の男が、その犯人だったとは…」

両の拳を握り締めたまま、しばし、宇野は絶句した。怒りに震え、涙が頬を伝わった。それから、宇野は思い直すように、きつと、顔を上げると、おもむろに告げた。

「母親のことも、ぼくは佐川に復讐しなければならぬ。そのためには…」

なお、宇野は自分の気持ちの整理に努めた。やっつと、決心がついたのか、宇野は愛香の方に顔を向けてから、自分の心の内を明かした。

「いま、何より、優先すべきことは、わたしが愛香を心から愛していたことを、知ってもらうことだ。その方法はいまは一つしかない。あの凌辱魔の男から、愛香をぼくが救えるのは、ぼくの命を愛香に捧げることなのさ。それから、お母さんを殺した男とも、わたしは

決着をつけなければならない。そのためには、そうさ。わたしの命を葬むり去ること

しか、その手段は残されていないんだよ。愛香、これが最後のさよならだ。悲しいことだが、愛香にさよならを言わせてもらうよ」

青白い闇が、宇野の背を照らし出していた。そして、バリアの中に包まれたままの愛香が、この宇野の告白を耳をそばだてて聞き取った。

愛香の表情が心なしゆがんだ。

覚悟を決めたのか、宇野は崖の淵に立った。それから、愛香の方を振り返ったあと、

「わたしが愛した愛香、さ・よ・な・ら」

と、宇野は覚悟の文句を発した。

「そんな。早まったことをしては」

慌てた英輔が駆け寄り、宇野の行為を止めようとした。それで、二人の体はもつれた。

が、一瞬の隙を突き、宇野は崖の下に身を投げた。雪煙が上がり、そして、宇野の姿が英輔の目の前から不意に消えた。

「あつ」

と、英輔は声を上げたが、遅かった。

崖の下を、英輔は覗きこんだが、雪煙が下方に向けて舞っているだけで、宇野の姿を見つげ出すことはできなかった。

(この急な崖だ。宇野の命はないかも知れない…)

しばらくの間、その場に英輔は立ちつくしていた。どれほどの時間が経過したのか。崖の上で英輔は身を固くしていた。何も考えられなかった。

と、その時、何者かが、「うう、うーむ」

と、呻く声が闇の向こうから聞こえてきた。

洞窟から外に出ようとしていた「幽霊男」が、その肉体化する霊能力を奪われたのか、呻きの声を発したようだった。

(宇野はすでに命を落としたのか。そして、その肉体を借りていた幽霊男は憑依していたその肉体を奪われた?)

やつと、そこまで、英輔は自分の考えをまとめた。崖の下から風が舞い上がってきた。

〈十数秒が過ぎた〉

洞窟と思われる場所のあたりから、暗紫色の火の玉のようなものが、ふわりと、英輔が立っている場所の近くまで飛んで来た。幽霊体そのものに力がなくなったのか、一瞬、紫色のオーラ光の玉が、拡散するように空中の一点でふわりと広がった。

青白い闇の天に、吸い尽くされるように、紫色のオーラ光の物体が引き込まれて行った。

尾を引くように、「幽霊男」の幽体と思われる光の玉が、一、二度、中天で舞い、この世への未練の足跡を残しながら、すーと、雪山の彼方に消え去った。

わずかに、残像のちいで、スライス状の線描の輪が、その闇の空に光の軌跡を残した。それも、すぐさま、闇の深みに呑み込まれた。

「ひゅー、ひゅー」

と、寒い夜風が唸り、その闇の空を吹きぬけた。その場には英輔と愛香だけが残された。宇野は死に、そして、幽霊男はこの世から消滅したのか、愛香の身边に変化が起きた。

愛香の全身を覆っていたオーラ光が、いつの間にか、払われていた。

3

「ぼくたちは、助かったようだ。この冬山の中、これから、どうして、山を下ることができるかだな。下山するには遭難の危険が伴うよ。もちろん、洞窟で一冬過ごす方法を考えてもいい。運がよければ、途中にあったあの山小屋にたどり着くことも可能かも知れない」

崖の淵に立ち、二人は肩を寄せ合っていた。マウンテン・パーカーだけでは、寒いので、英輔は自分が着ていたウール地のスピーネーカー・シャツを愛香に与え、マフラーも愛香の首に巻いてやった。

「でも、その前に、わたしたち二人のこれからのことを、考えなくてはならないわ」

「ぼくたち二人のこと？」

「ええ、わたしが英輔を裏切ったのは事実よ。瀬野レオの男らしさに引かれて、英輔との愛のことを、わたし、忘れようとしたわ。それから、エンバーマーである宇野俊光に、わたしの死後の肉体をわたしは捧げようとしたわ。そう決心したのも事実よ。わたしは美しい自分の肉体がとても愛しいと思った時期があったの。彼の言葉に惑わされたようなところはあったけれど、そうよ。いまだって、愛とかそういうのじゃないけれど、わたしが、とても気になっているの。彼は自ら死を選んだのよ。彼を死に追いやったのは、このわたしなんだから」

「いや、違う。ぼくが彼を止めていればよかったんだ。この結果については、ぼくにも責任があることさ」

「そんな慰めの言葉はもういいの。わたしのために、彼が死を選ばなければ、わたしはあの怪物の手に掛かり、辱めを受け、きつと、殺されていたわ」

「愛香の言う通りさ。でも、宇野はお母さんとのことでも、自死を選ぶことで、決着をつけたんだ。〔幽霊勇〕の肉体を消滅させるには、あの方法しか選択の余地はなかった」

「わたしたちには彼の死を見届ける義務があるような気がするの。このままじや、わたし、いやよ」

「ああ、この雪の中だけど、谷を下る方法はあるだろう。宇野の最後をぼくたちは見とつてやらねば。谷は深いが、狭い場所だ。少し迂回をすれば谷底の場所に行き着くことができるかも知れない。宇野に最後の別れをしよう」

英輔は谷に下る別ルートを探し、愛香と共に、雪の道を探ることになった。

その間、愛香は一言も発しなかった。

そのことが、英輔にはとても気になった。言葉では埋めつくせない危うい心の揺れのようなものが、すでに、二人の間には介在しているかに英輔には思えた。

深い新雪に埋まった地域なので、遅々として一步一步は進まなかったが、やっと、谷底に二人は足を踏み入れることができた。

「あそこに、人の影が」

英輔が指差した場所に、雪の中で埋まっている人の姿をみとめることができた。

急ぎ足で、英輔はその現場に愛香より先に着いた。谷底を下った地点に、宇野が横

様に倒れていた。そして、白い雪の上には血が染みていた。よく見ると、宇野の足首には、大型の鉄製のばね仕掛けの罠が食い込んでいた。

宇野が仕掛けた罠のように、英輔には思えた。すべり落ちた時、運悪く、宇野はその罠に足を挟まれたのだ。自業自得だとも言えたが、宇野は悲惨な最期を遂げていた。

「あの人、こんな姿になって…」

あとから、やって来た愛香が言葉を呑んだ。

すでに、出血多量で、宇野の命は絶えていた。崖から落ちた時に負った傷も何力所もあり、足首だけでなく、宇野は深手を追っていた。

「この人、動物写真の人気作家という面と違って、とても、淋しい人だったのよ。男らしさに、わたし、引かれたって言ったけれど、そんなんじゃないかった。とつても、弱々しい人だったわ。きつと、幼ない頃のお母さんとの悲しい別離が、この人の、それからの人生をこのようにしてしまったのね」

「彼はお母さんのところに戻ったのだよ。そう、いまは、ぼくは考えるようにしている…」

「そうね。そうならいいけれど」

「心のどこかに、そんな宇野に同情を寄せているようなところも、愛香にはあったってことなのか」

「どうかしら。マインド・コントロールされていたのも事実だし、出会った頃の彼のことしか、わたしにはほとんど記憶がないのよ。でも、わたしのきれいな死体を、あの人に捧げようとしたのは、わたし自身が決めたことでもあったのよ。これはわたし自身の問題だけれども」

愛香がぼつりと言った。英輔はそのことには、直接は触れられず、同意するともなく、ただ、頷いた。

「さあ、ひとまず、あの洞窟に戻ろう」

英輔が言い、そして、愛香がその背に従った。深い雪道をたどり、二人は洞窟を目指した。やはり、愛香は言葉少なで、何か、考えているようなところが見受けられた。英輔が気づいていたことなのだが、愛香は英輔とは距離を置き、行動をした。

やつと、岩穴の入り口を見つけ、二人が洞窟内に入った時もそうだった。英輔が手を引こうとした時、愛香はその行為を拒否した。

愛香の本当の気持ちがあわかったのは、宇野が愛香を閉じ込めていた岩室に戻った時のことだった。

「こんな、身も心も穢れてしまったわたしを、英輔はどう思っているのかしら？こんなわたしは、もう、英輔に愛されていた頃のわたしではないわ。そうでしょう。ぼくは潔癖症だと、あなたはいつかわたしに言ったことがあったわ。それから、着せ替えのお人形のように、美しく着飾ったわたしが、英輔は好きだった。そうよね。いま、わたしが考えていることって、英輔、わかるかしら？」

「このままの愛香ではいたくないと…」

「そうよ。わたしがいまから行くところについて来て。その場所で、わたしは自分を洗い清めたいの。自分の身も心もね。それからでないと、英輔とは口もききたくないのよ。いえ、違うわ。口をきくことなんか許されてはいないわ」

頑なな態度を崩さぬまま、愛香はそう言うのと、英輔を促し、自分が先に立って、英輔の道案内役を務めた。

その途中で、二人は山浦の死体と遭遇した。この場所で「幽霊男」に出会い、山浦は生き血を吸われたのだと思われた。

愛香が案内したのは、洞窟内にある地底湖だった。いつしか、二人は洞窟内にある地底湖のほとりに立っていた。

外のどこかとながった場所があるのか、天窗のような小さな穴があり、そこから、青白い光が一筋漏れ入っていた。きらきらと水面は光っていて、漂う青い水がビロードのように、一面に敷き詰められていた。十メートル四方ほどの小さな湖だったが、地底から水は湧いているのか、小さなあぶくが立ち、湖面をわずかに揺るがせた。

とても美しい湖で、とても、この世のものとは思えなかった。澄明な水の蒼さが幾重にも重なった水の層を作っていて、とても、神秘的だった。

「英輔、あなたは後ろを向いていて。わたしはこの穢れた身と心をこの聖なる湖で清めるのよ。そう。心、洗われる、わたしはそう願っているの。そうでなければ、前のわたしには戻れないわ。いいこと。絶対に、わたしの方を見ないで」

そう言い残すと、愛香ははらりと上着を捨て、湖のほとりに落とした。それから、英輔が与えたウールのシャツも捨てた。

もう、愛香は生まれたままの裸身に身を委ねていた。そして、一步、一步を地底湖に向けて愛香は歩み出した。

英輔は愛香に命じられたように、後ろ向きのまま、その場に控えていた。ぽたんぽたんと岩床に落ちる水の雫の音だけを聞き取っていたが、微かに、愛香の身の動きも、その耳で聞き分けた。

愛香の素足が湖の淵に触れた。冷たい水がその足を濡らせた。なお、愛香は一步を進めた。誰も見てはいなかったが、愛香の裸身はすべらかでとても美しかった。

上反りの乳房のかたちが、微かに揺れた。きゅっとすぼまったウエストライン、そして、伸びやかな脚線、湖上に向けたその横顔も凜りんとした美しさを保っていた。

湖の深みの場所に着いた時、愛香は水の中に上半身を沈めた。それから、愛香は顔ごと、水中に沈めると、乱れた髪を洗うために、髪を漱(すす)いだ。樂しげに水浴びをしている女にも見えたが、いつまでも、時間を掛けて、愛香は汚れた髪をそうやって洗った。

それから、髪を洗い終わると、全身で水浴びをした。長い間の監禁生活の汚れを、愛香は丹念な仕草で洗い落とし、身を清めた。

「英輔：わたしはあなたから愛の心を授けられるのを本当は待っているのよ。二人がもしやり直しすることが許されるなら。でも、いくら洗い清めても、わたしがこれまで取った行動、そして、穢れてしまったこのわたしの心はもうどうにもならないみたいだわ。どうすればいいのかしら？元の純粋な気持ちのままの二人に立ち戻るには」

水の冷たさも感じぬまま、愛香は聖なる沐浴(もくよく)をしながら、一人、呟いた。

湖のほとりに立つ英輔は、その時、愛香が沐浴をしている水音だけを聞いていた。後ろを振り向きたくなる衝動に駆られたが、英輔は約束した通り、愛香の裸身を見ることがなかった。

が、水浴びの音が止んだ時、英輔は異変を感じ取った。急に、あたりの空気が氷りついたような寒さを、英輔は肌を通して感じ取ったのだった。

後ろを振り向くと、湖底の深みの場所を目指して、静かに水を掻きながら愛香は歩んでいた。すでに、肩のあたりまで、愛香の体は水に沈んでいた。そして、英輔の見える前で、ふーと、愛香の上半体が湖水に呑まれた。

愛香は自らの意志で、死を選び取るうとしていた。英輔にはそう見えた。

「愛香、愛香、そんなことをしては……」

魂の叫び声を、その時、英輔は発した。

湖に飛び込むつもりで、英輔は急いで、身を翻し、愛香を救けるために、水中に駆け入った。

「来ないで。お願い！」

愛香も魂の底からの声を発した。

だが、英輔も必死だった。なお、遠くに、身を投げようとする愛香を、その場から救い出そうとした。夢中で、愛香を腕に抱え取り、英輔は湖のほとりまで、愛香を連れ戻した。

脱ぎ捨てた上着を着せてやり、そして、英輔は冷め切った愛香の体を抱き取り、自分の体温で暖めてやろうとしたが、愛香はその行為を拒否した。

「止めて。もう、いいのよ」

「何がだ？これからの二人のことを話し合おうと言ったのは、愛香なんだよ。そうじゃなかったのか」

上着だけを身にまとい、泣きじやくりながら、愛香は首を左右に振った。髪の毛から水滴がぽとぽと滴り落ち、愛香の涙顔に振り掛かった。

「ともかく、落ち着けよ。ぼくは、愛香を受け入れるために、この山の中までやって来たんだよ。そうだろう。このままでは、ぼくだって、どうしようもなくなる。どうすればいいのか。そのことも、まだ、二人は話し合ってもいない」

やっと、泣き止んだ愛香が、英輔に向けてちらと一言だけ漏らした。とても、弱々しい目をしていた。

「英輔好みの女にわたし、戻れるのかしら？」

「ぼく好みの？いや、そんなことより、ぼく自身も変らなくちゃならない。ぼくはそう思っているんだ」

「だから……それは、わたしが犯した罪の一つ一つを、英輔は許してくれることが前提となるのよ。そうでしょ。わたしは身も心も穢れた女だわ。きつと、たった一つの救いは、きれいなこの湖の水で、これまでの自分の穢れを落とした時、身も心も洗い清められたような気がしたことだけ」

「それでいいのさ。一つ、一つの罪と言っても、そんなの罪とは言わないよ。誰にだって、心が紛れることはあるさ。これから二人がどんな愛を育むか、そういうことこそが、大事なんだよ。ぼくはそう思う」

「英輔のやさしさに、わたし、負けそう。とつても、素敵な言葉だわ」

暗い中のことではあったが、やっと、英輔は心からの愛香の笑顔を見た気がした。片エクボがくつきりとその頬に浮かんだ。

英輔の目の向こうに、地底湖の透明な水が湛えられていた。尽きることなく、沸き出る水は、愛香の言葉ではないが、本当に、この世の迷い、戸惑い、そして、汚濁したものなどのすべてを、きれいに洗い流してくれるように、英輔には思えた。

「さあ、次のステップを踏もう。ワルツのステップで言えば、スロー・アウェイ・オーバー・スウェイってところかな。終章に至るまでのステップで、静止ポーズの一つ、ここは二人の気持ちがあびつたり合わない、見せ場のポーズは決まらない。そうさ。ワルツのレッスンを初めからやり直す気で二人は心を合わせればいい。慌てることはないさ。ゆっくりと、二人の心を取り戻そう」

「そうね。あとは、わたしの心次第かも。でも、本当に時間が掛かりそう。わたし、余りにも、かけ離れた世界に身を置いていたような気がするの」

英輔の励ましの言葉にもかかわらず、愛香は少し自信なげな台詞を吐いた。すつと、笑顔も消えた。

二人は地底湖をあとにした。二人の一步ごとに、ぼとんぽとんと、岩天井から水滴が滴り落ちた。二人は一度だけ湖を振り返り見た。

神秘的な蒼い水面に、すーと、斜めに光が走った。どこかからか、風が吹き入ってきたのかも知れなかった。漣(さざなみ)が立ち、湖面はその生命力を示すように、やさしく息をしてみせたー。

4

白い雪景色には、何一つ、標識となるものがなかった。高原地帯なので、白い雪野が果てしなく広がっているだけのことだった。

「ともかく、山小屋までたどり着かねば。あそこには、確か、暖房用のストーブなども用意されていた。それに、食料の備蓄もされているようだ」

洞窟内に居ても、飢えと寒さに、身を置くことになりそうなので、二人は相談をし、洞窟の外に出た。危険も伴う行動だったが、むしろ、愛香の方が積極的な意志を示したのに、英輔は驚きの気持ちを持った。

だが、その意志とは反して、愛香の一步、一步は遅いものだった。防寒服を、愛香の分も調達したので、一応は寒さしのはなつたが、山の天候のこと、いつ、天候が急変するかも知れず、英輔としては、先を急ぎたい気持ちが強かった。

「英輔、銀世界って、とつても、幻想的なのね。わたし、このまま、この白い世界で、死ぬるなら、それもいいなと、思っているの。ね。そんな誘惑に駆られるほど、どこまで行っても、白、白、白の世界よ」

「何を言っている。ぼくたちが一步、一步をこうやって印しているのは、二人の愛の世界を二人だけで作り上げようとしているからなんだよ。そうさ。新雪を踏み締めているように、これからの二人の一步、一步にはすべて新しい道が用意されているじゃないか」

「そうね。美しい物語を、わたしたちは、いま、二人で作りに出そうとしているのかも知れないわね」

「ああ、そうなるといい。美しくなくともいいんだよ。愛香がこれから望む二人の関

係が、手探りでもいい。一つずつ、確実に、二人の愛の力によってそれが手に入るなら、それでいいじゃないか」

英輔は遅れ勝ちな愛香をサポートしながら、ただ、白いだけの雪の道を切り拓いて行った。山小屋がどちらの方角にあるのかは、よくはわからなかった。それで、途中、小さな川筋を見つけたので、英輔はその道をたどり下流方向に進路を変えた。

雪に埋もれた道路標識があったので、雪を払って地理を確認すると、大源太山あたりを源とする川筋で、彼らがたどり着いた場所は、ヒロタボ沢と呼ばれていることが判明した。

だが、深い山中であることには変りはなく、まして、山小屋のある位置が確認できたわけでもなかった。沢地はやや急な斜面などもあるので、愛香には負担が掛かった。

「沢を見つけただけでも、幸運さ。川筋を下れば里地に着くというのは、山で迷った時の道しるべとしては、理に適っているよ」

そう言い、愛香を励ました英輔だが、さつきから、愛香の口数は少なくなっていた。沢地の雪を分けるうちに、英輔にも疲労が積み重なってきた。女手の愛香も息を切らし始めた。

それに、せつかく見つけた沢地なのに、川筋は途中から、深い雪に埋もれてしまったのか、目の前から消滅した。山案内の五万の一の縮小地図を見れば、ヒロタボ沢の南西方角では、川筋は切れることが記されていたが、あいにく、英輔はそんな地図は持ち合わせていなかった。

結局、二人は川筋をたどることをあきらめた。再び、平坦な地形の白い雪野に二人は戻った。二人はしばらくの間、雪の上に座り込み休んだ。

「この、白い雪だが、本当に、真っ白できれいだ。これから生まれ変わろうとしているぼくたちを、雪の世界は祝福してくれているように、ぼくには思えるよ」

「ね、このわたしも生まれ変わるかしら？」

「生まれ変わるって？もちろんさ。愛香は身も心もきれいなままだよ。こうして、二人は、二人だけの愛を取り戻しつつあるんだから」

「気を使ってくれてありがとう。わたしも英輔のこと、もっと、もっと、好きにならなくちゃね」

と、愛香が笑顔を作り答えた時、雪がちらちらと降り始めた。

「先を急がなくちゃ。ぼくは来る時、凄まじいブリザードに遭ったが、あれに見舞われたら、生きては帰れなくなる。さあ、休んでなんかいられないよ」

愛香の手を取り、英輔はその場から立ち上がった。愛香も英輔に従った。

誰も歩いていない処女地の雪を分けて、二人は再び歩き始めた。

風も出てきて、遠くで雪煙が舞った。その雪煙はほどなく二人の足元にまで届いた。雪の降りも強くなり、風の勢いも増した。

「これはまずい。ブリザードだよ。地吹雪を防ぐには雪穴を掘って、様子を見るのがいちばんだ。そうしないと前に進んでも体が消耗してしまう。寒さにも負けてしまうことだろう」

一度、地吹雪を体験した英輔らしく、直ぐに、英輔は雪穴を掘り、そして、回りに雪の壁を作り、風雪が凌げる小さな雪小屋を作った。二人はその雪小屋に入り、ブリザードが去るのを待つことになった。

とても、寒そうに、愛香が身を屈めていたので、英輔が愛香を引き寄せ、その体を抱き止めた。いまはその方法しか、二人が暖を取る手立てはなかった。

「英輔、とつてもあったかいわ。この暖かさがあれば人は生きていけるのね。いま、わたし、そのことがわかってきたような気がするわ」

「ああ、ぼくが愛香に上げられなかった暖かさ。しつかり、こうやって抱き合っていよう。二人の血が通い合うように、二人のこの心の暖かさが、きつと、二人の体温を上げてくれることだろうよ」

「嬉しい。わたしは英輔のものよ。わたしが欲しかったこの暖かさが、いま、こうして、やつと通じ合つたのよね。わたしの心臓までも、どきどきしているわ」

いついつまでも、二人はしつかりと抱き合っていたかった。心の暖かさの分、二人はとても幸せな時間を過ごしていたが、降り募る風雪はますますその勢いを増し、小さな雪小屋をすっぽりと呑み込んで行った。

そして、雪の重みに雪小屋の外壁が、やがてのこと削り取られていった。

いや、その前に、すでに、二人は寒さを凌げなくなっていた。しつかりと抱き合っているも、容赦なく体温は奪われていった。

そして、猛った地吹雪の嵐が地を激しく叩き始めた時、二人はもう無防備の状態においやられていた。

「英輔、わたしたちは死ぬのね。きつと。このまま。わたしは一度は自分で死を選ぼうしうとした女よ。覚悟はしていたの。このような場面に遭遇するかも知れないことも」

「愛香、何を言っている。死にやしないさ。これぐらいのことで。気持ちをしつかり持たなくちゃ」

二人の声も、風雪の音に打ち消され勝ちだった。途切れ途切れの声で、二人はやつとこれだけの会話を交わした。

「英輔、わたしを抱いていて。英輔に抱かれながら死ぬのなら、わたしは何も思い残すことはないわ」

英輔の耳に口をつけると、愛香は言い、そして、英輔にその身を預けてきた。二人は雪の上に倒れ込んだ。着衣の上からだだったが、それでも、二人は愛を確かめ合うことができた。二人は動かぬまま、そうやって、地吹雪が去るのをひたすら待った。

数刻後、嘘のように、雪嵐は去った。

雪だけはまだ降り続いていたが、それでも、一難去ったのは確かだった。

だが、この時、二人の体力は消耗していた。それに、零下の気温は、命を保つための人体の機能を奪いつつあった。

英輔はその覚悟をした。それでも、気丈に英輔は愛香を勇気づけようとして、苦しい息の下から言葉を掛けた。

「愛香、二人が生まれ変わったというのは本当だよ。ぼくだって、今度のことで、心洗われた一人さ。その点では、愛香にありがとうと言わなくては。ぼくは感謝しているよ」

「わたし……。わたし、いまは、英輔が望むことなら何でもできるわ。そうよ。いま、思い出したの。英輔はあの、バーチャルマン計画に医師としての夢を賭けていたわよね。

このまま、二人が雪の中で死んでしまえば、あの英輔の夢も叶うことはないんでしょ

う」

「そうさ。でも、ぼくだけでも、その夢は叶える方法はあるよ。ぼくだって、五体満足さ。献体を願ひ出て、バーチャルマン計画の実験体になりたいと、アメリカのアリア科学医療財団に申し出れば、これからの医学のために役立つことは可能なさ。もし、このまま、助かる見込みがないと、判断した時、ぼくは、携帯電話のインターネット通信を通じて、その意志を遙か遠くの医学者たちに伝えることはできるんだ」

英輔は自分の意志をはっきりと愛香に伝えた。いつか、同じブリザードが吹きすさぶ設定の中で、英輔は「幽霊男」相手に、この件については口にしたことがあった。

「わたしも、その献体の一人になることはできるのでしよう？わたしの気持ちこそなら」
「でも…。二人は死に瀕してはいるが、死んだわけじゃない。もしもの場合を考えて、ぼくの考えを述べただけだよ」

「わたしの命はもうそれほどあるとは思えないわ。いいから、わたしの気持ちを大事にして。わたしは、英輔に見守られて死ぬるなら本望よ」

そう告げると、愛香は一人立ちあがり、雪の中に立った。それから、何を思ったのか、愛香は防寒着を脱ぎ始めた。

「だめだよ。こんなところで裸になればたちまちのうちに体温を奪われ、愛香は死を迎えることになるよ」

「いいのよ。わたし、死ぬ前に、一度でいいから、英輔にわたしのきれいな裸身を見て欲しかったの。いま、そうしななければ、その機会は二度とくることはなくてよ」

愛香の行動は早かった。英輔は止めたが、愛香はすべての着衣をすりと剥ぎ、そして、雪の上に投げた。小さな雪の粒が雪の上で舞った。

「見て。英輔、これがわたしの体よ。いまなら、この体のライン、わたしは好きよ。ナルシストと言われてもいいわ。すべてよ。わたしの体のすべてを、わたし、英輔に見て欲しいの。一言でいいの。きれいと言って」

「ああ、きれいさ。本当に、きれいだよ」
心からの賛辞の言葉を、英輔が口にした。

英輔の目の前には、きれいな裸身をさらした愛香が立っていた。しっかりと目を開け、英輔は愛香の裸身を見た。

双つの乳房が上反りのかたちでつんと立っていた。小さ目の乳首だったが、乳輪のあたりはやや大きかった。白い闇の中で眺めだったが、その造型の美しさに、英輔はしばし見とれた。かたちが崩れていないので、生(き)のままの青い果実を見ている思いがした。

触れてはならないかたちのもので、英輔は暖かな息を吹き掛けてみたい思いに駆られたが、それとて、禁断の行為のように、英輔には思えた。微かに、乳房は揺れたが、それは愛香だけに許された身のこなしのゆえだった。

細身の体を目でなめると、すぼまったウエストラインと、丸い張りを保った腰が、白い闇の光を撥ね返して、その存在感を示した。

そうやって、愛香は寒さに身をさらしたまま、ナルシストたる者の美しさへの思いを、愛する男の前でひけらかせて見せた。

「わたしがきつと先に死ぬわ。このまま、この場所でわたしは凍死するのよ。それで、

わたしの体は英輔と一対になり、いつか、バーチャル体になり、生まれ変わるのよね」

そう告げると、愛香はそのことの覚悟を示すためか、雪の上に、裸身のまま横たわった。

「最後まで希望を失ってはいけないよ。それでは、凍死を待つようなものじゃないか」

「そんな慰みの言葉はもういいのよ。英輔だって、二人はもう凍死するしかないよ、思い始めていたのでしょ。ちゃんと、本気で、わたしの気持ちを受け入れて欲しいわ」

「わかった。厳しい状況にあるのは事実だ。もし、命が奪われるなら、そうするさ。もちろん、ぼくも愛香のあとを追う」

「それなら、英輔も裸になるべきよ。そして、生まれたままの清い姿で、しっかりと、わたしを抱き止めて」

「いいさ。いまだなければ、ぼくだって、愛香を抱き止められないだろう。神様がぼくたちにくれた、これは最後の聖なる贈り物なのかも知れないよ」

「早く。英輔の体の温みがわたしは欲しいの。早く、早くよ」

二人はこのあと、素っ裸になり、抱き合った。愛香の体の上にかぶさった英輔の体が、愛香の体を肌と肌を通して暖めた。

「暖かよ。とつてもあったかいわ。さつきまで、冷えたままの体だったのに、いまは、英輔の肌の暖かさが、わたしの心までも暖かにしてくれているわ」

愛香の顔がとても幸せそうに緩んだ。右の片エクボがきゅっと引つ込み、そして、愛香のやや小さめの口元に笑みが湛えられた。

「英輔、英輔って名を呼んでいてもいい？そうよ。わたしが英輔って呼ばなくなった時、わたしは天に召されているのね。そして、わたしのあとを追って、英輔が天に昇る階段を一步、一步、昇って来てくれるのよね。でも、わたし、そんなの待てないわ。そうよ。わたしが英輔を迎えるために、英輔のそばまで来て上げることにするわ。天への階段を昇るのはそれからよ」

「わかった。それでいいさ。心と心が一つになる。そのためにぼくたちは天に昇るのさ」

「うん、英輔、わたし、英輔と知り合って、よかったと思っっているのよ。ね、英輔はどうなの？どうなの？」

と、愛香が繰り返した時、その呂律が怪しくなった。愛香の意識は朦朧状態に入りつつあった。

「エイスケ：エ・イ・ス・ケ：」

愛香の呟きも間遠いものになっていった。しっかりと、英輔は愛香の裸身を抱き取っていたが、その体温も次第に奪われていった。

「愛香、愛香、ぼくは本当に愛香を愛していたんだよ。心からさ。愛香、わかるか」
その問い掛けに、微かに、愛香は頷いた。

が、それが、愛香が死力を振り絞ったこの世で最後の意志を伝える動作となった。冷たくなつていく愛香の体を抱いたまま、英輔はおいおいと声を上げ泣いた。

降りしきる雪の量が増した。

英輔は安らかな愛香の死顔を見ていた。その愛香の顔の上にも、穢れのない新雪がちらちらと降り掛かった。

「もう、ぼくも、愛香のあとを追えるよ。その前に、約束通り、二人の献体を申し出

るために、インターネット通信を送っておくよ」

英輔は凍えた手で、携帯電話を操った。自分たちの意志を伝え、バーチャル医学標本体になるべく、インターネットアクセスをし、英輔は所定の手続きをとった。

雪は本降りになった。その雪の量を目にしながら、英輔も命絶えた。裸身の一对の男女の凍死体が深い雪に埋もれて行った。

天然の冷凍庫の役目を負うように、次から、次と、新雪は降り続け、英輔と愛香の愛する者同士の身をやさしく包んだ。

真つ白な雪野で、二人はまた会う日のことを信じて、こうして、死に就いたのであった。

心なしか、東の空の方角に、朝の訪れを知らせようというのか、明るい光が射し染める気があった。

薄明の闇に、一筋の光明が射し入ったようだった。

エピソード

真つ白の銀世界には、やさしい風が吹いていた。小春日和を思わせる穏やかな一日のこと
で、遠くに見える雪を頂いた山々のスロープも、今日ばかりは、はっきりと望むことができた。

奥湯沢の地の山稜地帯には、いまは美しい雪景色が広がっていた。

一年前の冬、矢萩英輔と羽村愛香の二人は、風雪の中、この地で、短い生涯を了えた。雪に埋もれた状態で、相寄る二人の遺体は発見された。完全な冷凍体だったので、二人の遺体は傷つけられることなく、捜索隊により、発見され、そして、アリア科学医療財団の関係者が来日し、その、献体の申し出のあった二つの遺体は、その意志を継いで、関係者の手により、バーチャル医学標本とされた。

この日、誰かの目に触れていたわけではないが、雪野の新雪の上で、ワルツのステップを踏む英輔と愛香の姿があった。

この果てしない白い雪の舞台を、二人はワルツを舞う最後の舞台として選んだ。

新調したまま手を通さなかったモダンダンス用のドレスを、愛香は身に着けていた。

白を基調にしたAラインのドレスで、ドレスの裾野は二段仕立ての白いオストリッチ(羽毛)だったので、ふんわりと咲いた白い花のような華やかさが、そのドレスの裾野には広がっていた。

腕の部分は長袖の薄いピンク色のシースルー、胸に飾ったパールのネックレスの取り合わせとよく似合っていて、とても、エレガントな感じが表されていた。

ブラックストライブのエンビ服に、白のイカムネシャツ、サスペンダー、英輔も正装で、愛香のリーダー役を務めていた。

だが、すでに、二人はこの世の姿かたちの者ではなかった。完全バーチャル体になった二人は、線描画で描かれた者のように、透明体で、身の動きも軽やかに見えた。いまは、陽光を浴びて、きらきらと、二人のバーチャル体は光っているようにも見えた。

背をしゃんと立て、英輔がトーンを張った。姿勢のよさを保ちながら、英輔はパートナーの愛香とスタートのためのホルルドの姿勢を取った。

愛香の右手と、英輔のグリップした左手が、英輔の肩の上あたりで組まれた。英輔の右手は愛香の背の部分に添えられていた。

そして、愛香はやや後ろに首を傾げるポーズで、英輔のスタートの合図を待った。静止ポーズだったが、その二人のかたちはきっちり決まっていた。

「さあ、愛香、ぼくたち二人だけの愛の賛歌が、やがて、二人の愛を祝してこの場に届けられるよ。そうさ。『幻想交響曲』だ。ワルツの中の名曲、心ゆくまで、愛香も楽しんで欲しい。ぼくたちの愛の心のままに、二人で新しいステップを踏み出そう」

「英輔、わたしたちは、永遠の愛の世界で生きることができるよう。英輔はわたしにとって、これからも、とても素敵なパートナーよ」

愛香が英輔に答えた時、ベルリオーズの『幻想交響曲』が天の一角から届けられた。

第一小節のステップが踏み出された。オーバートーン・ナチュラル・スピン・ターンの軽やかな舞いのステップだった。

ワルツはスウィングの踊り、振り子のような振りこみのステップを生かすことで、優雅な舞いとなる。英輔がリードしながら、愛香を自在に舞わせた。お互いに体重を預けないノーウェイトのスウィング・ウイズ・ボディのワルツの踊り、その分、伸びやかに、二人は軽やかなステップを重ねて行った。

愛香が得意とするビヴオット・ターンでは、とても、素早い愛香の身のこなしが見

られた。ナチュラル・スピニング・ターンをする時の男と女のポジションの変わり身の際には、よく、トラブルになることが多いのだが、愛香はなめらかに、かつ、素早く、ビヴオット・ターンをこなし、次ぎのターニング・ロックのステップにつなげた。

「とても、息の合ったスピーニング・ターンだった。これで浮力(フロウト)をつければ、ぼくたちは願い通りに、天の国に昇ることができるよ」

「そうよね。わたしたちが、光のバリアに包まれているのが、よくわかるわ。本当に、身も心も二人は一体化されているのよ」

愛香が英輔に答えた。

愛香の右の片エクボがとても可愛いかった。愛香は笑顔の素敵なパートナーとなっていた。白い雪を頂く嶺々の高さに向けて、雪のスロープは伸びており、一直線の天への道がそこには示されていた。

ワルツの調べが、春を呼ぶ曲のように奏でられ、そして、輝く空に吸い込まれて行った。それとともに、英輔と愛香のカップルは、さらに、ダンスの素晴らしさを体現してみせた。ワルツの曲に、溶け込み、音を呼び込むと、柔らかな風のように、風に乗って、白い雪野を駆けた。

あくまでも、ソフトで、優雅、それこそがワルツの真髄とされるものであった。二人は大きく伸びやかに舞い、そして、小さく、クイックのステップを踏み、コーナーワークをこなす時の巧みなターンをこなしした。

愛香が身に着けたオストリッチ(羽毛)をあしらったドレスの裾野が、風を一杯にはらんだ。その分、愛香のハッピーな心が生き生きと息づいているかのようだった。

やがて、この世の雪の光景は、きらきらと輝く、バリアの世界にその背景を変えた。

まるで、雪が降るように、天の空から、光の粒子を思わせるダイヤモンドがステップを踏む二人の背に、きらきらと降り掛かった。

バーチャル体ではあったが、二人が寄り添っている様は、とても、美しかった。手に手を取り合って、愛の円舞曲を耳にしながら、英輔と愛香は永遠(とわ)の愛の誓いを立てるために、さらにフロウトし続けた。もうすぐやって来る春風が、すでに、吹き始めたのか、二人はとても暖かな風に包まれた。

「ナチュラル・フォール・アウェイだ。さあ、ラストはきれいに決めよう」

「わたしは英輔について行くだけよ」

見事に、ダンシングの終わりは決まった。それが合図のように、ふーと、その時、二人の姿は天の空の彼方へと消えた。

(了)